
俺は王様

imaiwa

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺は王様

【Nコード】

N6943E

【作者名】

imaiwa

【あらすじ】

俺はポンポルク王国に住む王様だ。俺の住む世界は、簡単に言うと、何でもありの世界だ。魔法、剣、超能力、魔物、魔王、宇宙、タイムマシーンなんでもあります。その世界はポンポルクという国が1国で支配していて、俺はその国の王様。王の中の王だ。俺は暇な時間を見つけては、1万人いる様々な性格の部下をチョイスして、無理難題な命令をしては楽しんでいるんだよ。楽しくて仕方ないよ。今日は誰選ぼうかな？

序章&コール君の場合その1（前書き）

えっと・・・テンション高すぎる時にまた投稿してしまって・・・
取り合えず書いていきます・・・

序章&コール君の場合その1

いきなりだけど、俺は王様だ。
どこの王様かって？

ポンポルークという国の王様だ。

このパンク星では、全世界にある大陸をポンポルークが全て1国で支配している。

俺はいうなれば王の中の王だ。

ここは、剣と魔法に銃に爆弾、車に、タイムマシン、幽霊、超能力、魔物、化け物、魔王や宇宙人、人間や未確認生物etc…。

とまあ・・・なんでもありの世界に一人臨んでいる。

俺を脅かすものは、たぶんこの先もずっと出てこないだろう。

俺には1万人の部下がいて、毎日毎日そいつらに色んな命令をして無理難題を言っでは楽しんでいるんだ。

変な趣味だろ？

今日も1万人の色んな性格を持つ部下に、何か命令して楽しむんだ。さあ誰を呼ぼうかな。

こいつにしよう。

コール君って言うのか。

プロフィール

21歳、大学生、気弱、わがまま、金持ち、頭脳明晰
セコイ、性格悪い。彼女いない暦〓年

コール君になにさせようかな？

今日の日没まで彼女を一人作る事。

これでいくか。

コール君の場合。

はあ…、王様からとんでもない命令されちまったよ……。
今日中に彼女作れって、なんでよりもよって俺なんかそんな難
題を……。

そんなにすぐ作れるわけないでしょうに。

しかし、日没までに、女一人調達しないと、俺は死刑だよ。
どうすっかなあ……いや、悩んでいる暇は無いな。

自力で一日で作るなんて無理な話だ。

一日で出来るくらいなら、俺はもうとっくに、ハーレム囲ってるよ。
どうしよ……

そうだ！彼女を金で雇おう…。

しかし、どうやって雇おうかな？

うーん、手っ取り早そうなのは……。

商店街のお水で働く若い子に、5万円あげるからって言うって

「一日だけ彼女になって！」って言うってみるかな。

しかし、俺、女の子に声かけの苦手なんだよな…。

いや、そんなこと言ってる余裕ないよ。

命が掛かってるんだ。

さっそく街へ繰り出すぞ。

コール君はジーパンに半そでを着ると、近くの商店街に足を運び
お水系の店を探しながら、練り歩いていた。
女々女はどこだ？

『5000円ポッキリ、一時間貴方にご奉仕します』

おお、ここいいんじゃないか……？

よし、ここにしよう、入るぞ。

コール君は清水の舞台から、飛び降りるような気持ちで中へ入った。

ガラッ

「いらっしやいませ」

黒服の男が笑顔でコール君に挨拶をしてきた。

黒服の男だよ、なんかリーゼントで決まってるけど
セコイとこで働いてるよな。

笑顔で爽やか風味だしてるけど……

朝から坊ちゃんみたいな顔した、変な奴が来たよって思ってるんだ
ろうな。

だが、そんなことは気にしちゃいられない、命が掛かってるんだか
ら。

黒服の男は台の下から、女性のプロフィールの書いたパンフレット
を出すと、
台にそれを広げる。

「うちは指名制です」

「どの子がいいですか？」

この際どの子でもいいんだけど、選べるんだから、ブスよりは美人
の方がいいよな。

お、この子かわいい！この子で行こう！

「え、えつと、こ、この子…」

コール君はぼそぼそと小さな声で、店員の顔をできるだけみないようにして、

年若い美人の女性を指指した。

「薫ちゃんですね、じゃあ、ここをはいって、3番目のピンクの部屋で御待ちください。」

コール君は店員に案内され、後を付いていく。

きよろきよろ店内を見回し、黒服の男の案内されるまま、ピンクの部屋に入ると

ソファーにちょこんと座る。

「ここで暫く、御待ちくださいね、すぐ来ますから」

黒服の男はにこやかに微笑むと、コール君を置いて部屋を出て行った。

ああ、ドキドキする。しかしすごい部屋だな、本当にピンク一色だ……

しばらくすると、ヒールの音が廊下にコツコツ音を立てて鳴り響くと、薫ちゃんがドアを開けて入ってきた。

「こんにちわ、薫って言いま〜す」

「よろしく〜」

生の女、うわ、胸ボイン……。

コール君は女とまるつきり接した事ないので、鼓動は高鳴り、緊張が頂点に達し下を向いて黙っている。

し、すっかりしないと。これじゃ駄目だ……。

何とか、この女に事情を説明して、一日彼女になってももらわないと。

「お酒のみます?」

「いや、ウーロン茶ください」

「ええ」

「はい」

あ、少し嫌な顔した。ガキ臭い奴って思われたに違いない。

糞、調子のるなよ、本等なら、俺はお前みたいな女相手にしないんだよ!

我慢だコール……そんなことは良いんだ、俺の命が掛かってるんだよ。

切り出さなきゃな。

「あの、実は」

「はい?」

「今日一日、僕の彼女になってくれませんか……?」

「何言ってるんですか、一時間の間は彼女以上のことしますよ」

「

「え……」

コール君は破裂しそうなくらい、心臓がドキドキしている。
うう、こんな美人に1時間、あんなことやゝこんなことゝ……して
もらえるのかな？

馬鹿馬鹿馬鹿、鼻伸ばしてる場合じゃないって！
そろそろ、切り出さないと……。

コール君は覚悟を決めると、意を決して彼女の顔を見ると、話を
切り出した。

「あのー、彼女になつてほしいって言ったのは……」

「こ、この店のサービスのことじゃなくって」

「王宮に今日一日、お、俺の彼女として、行って欲しいんです」

い、言えたぞ！俺頑張った…。

「ええ？私が？」

「はい、お願いします」

「お、お金はたんまり払いますので……」

「どうか、王宮に来て、僕の彼女のフリをしてほしいんです……」

コール君その2

「そんなこと急に言われても、私これから仕事が……」

「わかっていきます…ですが…僕も必死なんです…」

「じゃあ…20万出しましょう」

「いかがですか？」

「行きます〜〜〜〜！」

「有難うございます」「有難う…」

命が掛かっているコールは、お金を払ったとは言え、快く承諾してくれた

薫ちゃんに涙ぐみながら、礼を言った。

「今日の日没までにここから、車で三時間の宮殿に行かないといけないんです」

「急いで支度してください」

「分かりました、では少し店長に、急な用事ができたって伝えてきますね」

「はい、よろしく」

薫ちゃんは部屋を出て行った。

ふっ…成功したよ。

後は彼女を、無事王宮近くまで運んだ後、演技指導しなきゃな……。

薫ちゃんが戻ってきた。

「ただいま」

「店長と話してきて、今日早退の届けしてきましたよ」

「ありがと、悪いね…」

「えーっと、服装どうしましょう?」

「さあ、その格好でも…」

「う…さすがにだめかな……」

「お水の格好まるだしだね……」

「そうですね」

「よし、時間ないけど、近くの服屋へ行きましょうか?」

薫ちゃんが少し俯くと、何か言いたそうに口をモモモモさせている。

「どうしたの…?」

「あゝ、お名前聞いて良いですか?」

「コールだよ」

「コール君ですね、よろしく」

「え、ええ。よろしく…」

若いけど落ち着いた大人の女性の薫ちゃんは、優しくコールに微笑んだ。

コールはその屈託ない微笑みに、一瞬くらつときた。
やっぱり顔かわいいから、優しく笑顔投げかけられると、たまらないなあ……。

コール君たちは商店街に入り、比較的高級そうな服が売っているお店に入った。

「いらつしやいませ」

50くらいの店員のおばちゃんが出てきた。

「どんな服お探しですか？」

「ちょ、ちょっと待ってくださいね」

俺はそう言つと、店員より少し離れた位置で、薫ちゃんに買つて欲しい服を指示し始める。

「ここです、王宮に行っても、恥ずかしくない服買つて行つてよ」

「明るい色のドレスがいいかも…」

「わかった…」

「ここできめてね」

「時間ないから、適当で良いよ」

「はい」

彼女は店員に希望の服を伝え、何着か店員が持ってきたものを試着室に抱え込むと、薫ちゃんは中で忙しそうに着替えていた。

おっと、俺の事考えてなかった。

俺も半そでのジーンパンでいけるわけないよ。

彼女がドレスで俺がジーンパンじゃばれちゃうよ。

タクシードにしようか……。

「す、すみません…」

「はい」

違う店員がコール君をみて、下から上まで嘗め回すように見た後声を掛けてきた。

「えーっと、どんな服にされますか？」

「高級なジーンズがありますが…」

「いやいや、タクシード用意してください」

「はいはい、ございますよ」

「こちらへ」

「これなどがでしょうか？」

コール君は値札をみた。

50万か…、まいいよ。

「試着してくださいな」

「はい」

試着室に入ったコール君。

これでいいけど、足があつてないな。

しかし、すそ直し待っている時間はない……。

「あのー、これ、足あつてないんだけど」

「すそ直しでしょうか？2時間ほどでできます」

「そんなに待てない」

「裏にでも適當縫い付けてくれ、簡単でいいから……」

「ええ…？」

店員は少し目を丸くしながら、その言葉に動揺していたが俺の血走った目をみると、臨機応変に言葉を返す。

「分かりました、10分ほどで仕立てます」

「ありがとう…」

薫ちゃんが試着室から出てきたので、状況を聞いてみる。

「服きまつた？」

「うん、ま、これならいいと思うよ」

「じゃ僕がそれカードで買っとくから」

「はい」

俺は薫ちゃん服と俺の服の清算をすませ、もうすぐできるであろう裾直しを少しイライラしながら待っていた。
10分がこんなに長く感じるなんて……。

店員が戻ってきた。

「大変長らくお待たせしました」

「こちらになります」

「ありがとうございましたーお気をつけてー」

俺達は大きなお洒落な模様が入った、紙袋を渡されると店の外にでた。

「でもすごいねー、コール君」

「あれだけの買い物、全部払えるんだから」

「まあ、うち金持ちだからね」

時間くっちゃまった……。

普段はママンに買って来てもらって、自分で買いに来る事はないからちょっと、心配だったけど、命がかかると、なんでもできるもんだな……。

コール君は時計をみると、11時30分を回っていた。

えっと、日没が今だと6時と設定すると、5時には付いておきたいな。

3時間かかるんだから、多めにみて、4時間、演技指導に1時間……。

やべえ、12時には出ないとな……30分でどこかで飯食うか。
コンビニでジュースも買っていくかな。

コール君その3

取り合えず、ここの喫茶店で昼飯にするか…。

「薫ちゃん、ここ入ろうか？お腹すいたでしょ？」

「うん！実はお腹ペコペコだったの…」

薫ちゃんは。少し前に屈み少し腰を低くすると、目を見開き店の前に置かれている、看板のメニューの文字を見つめる。

「サンドイッチとパンのセットにしよう」

「コール君はいる！」

そう言っていると、突然、彼女は俺の左腕を右腕と胸の間にひっぱりこむように持つと

店の中へ誘う。

うわ！胸、ちょ…。

不意を付かれ、どきっとする俺。

中に入ると、薫ちゃんは、窓際の席に指差すと手を離し椅子を静かに引くと席に着いた。俺は向こう側に回りこみ、彼女と顔が向かい合う席に

浅く腰をかけると、隣に持っていたカバンを置いた。

外の看板のメニューを見る暇がなかった俺は、メニュー表を開くと物色し始める。

「何にすつかな、ん…？」

俺の顔をなぜか見つめてくる薫ちゃん。

顔をじーっと見られると、たとえ相手が男でも

意識するのに、こんな可愛い子に見つめられちゃ、ドキドキもんだ

……。

取り合えず、何か言うんだ！コール。

「え…っと俺はスパゲティにするかな」

「ねえ〜」

突然、俺に言葉をかけてくる薫ちゃん。

一瞬心臓食み出しそうになった……。

「は、はい！」

「なんでせうか？」

「コール君っていくつ？」

「お・俺？」

「21だよ」

「大学生？」

「そだよ」

店の店員がやってくると、水を俺達の前に置き

注文を聞き始める。俺達はさっき選んだものを伝える。それを聞き機械に打ちこみ、復唱し終わると店員は去っていった。

会話を寸断されたため、また一時の静寂が、俺達を包むがやがて、また薫ちゃんは話し始めた。

「学生さんか」

「いいな」

「私も2年前までは高校生やってたんだよね」

とういうことは、彼女は二十歳か、若いなあ……。

しかし、高校も出てるし、顔も美人なのに、なんでお水なんか……？

理由が聞きたい。しかし、直聞くのは、気が惹けるなあ……。

俺がテーブルに置かれた水を、空で止め、そんなことを考えていると薫ちゃんがまた俺をみて、話しかけてくる。

「私さ、なんでお水やってると思う？」

お！聞く手間が省けた。

「さ、さあ……金に困ったとか……？」

あ、直言っちゃった……。

「うん、その通り！」

ビンゴですか…。

「うち、母子家庭でね」

「妹と母親、私で暮らしてるのね」

「高校卒業して、母が大きな病気にちゃってね」

「今入院してるの」

「へ〜…」

なんか、暗い話へ…。

「就職はしてたんだ、とある、中小企業の一般事務」

「でもさ、病院ってお金かかるし、それに、事務じゃ時間縛られるでしょ」

「お母さんの世話や、お見舞い行く時間、家事、妹もまだ中学生だしね、」

「だから、お金の入りが良くて、時間の都合のきく、お水にとびこんじゃったのさ、アハハ」

泣ける話だ…。俺とは全く違う過酷な人生を、ほぼ年の変わらない彼女は

送ってきている、こんなに可愛いのに……。

しかも、何がすごいって…、その話を今日あったばかりの俺に、包み隠さず

あっけらかんと話すところが、人間の大きさ感じるよな……。

「……」

俺は何を言葉にして返して良いか思い浮かばなくて、つい黙ってしまった。

駄目だ、ここで何か言わないと……。駄目だ駄目駄目だ、何か会話を挟めコール！

「あ、あのさ……」

俺が背水の陣で薫ちゃんに、何か言葉を投げかけようとしたその時、絶妙のタイミングの悪さ？で、店員が食べ物を持ってきた。

「以上になります、ごゆっくり」

「おいしそう〜！」

「いただきます！」

食べ物を見た薫ちゃんは、お腹をすかしてたのか、満面の笑みを浮かべ

サンドイッチを手にもつと、すぐに食べ始めた。

……。

ま、まあ、助かったといえば助かったかな……。

俺達はしばらくして、飯を食べ終わると、ひと時の落ち着いた時間間を過ごしていた。

薫ちゃんは、相変わらず明るい感じで、色んな話を俺に投げかけてくる。

そんな彼女に、乗せられるように、俺もだんだん自然に口から言葉が流れ出てくる。

楽しいなあ、俺が今まで生きてきた人生で、これだけ異性と愉しく話した事が

あっただろうか……？ ママンと話すのとはまるで違うよな……。
時を忘れ、幸せな時間を満喫する俺。

しかし、その時間は長くは続かなかった。

かわいいなあ、でも俺なんでこうして、薫ちゃんと話してるんだろ……。

なんか重要なことがあったきが、ああ！！

俺は我に帰ると、腕時計に視線をなげかける。

12時20分…ゲゲ…あんまり愉しいので時間を忘れていた……。

急いで横に置いてある自分のカバンを手に握ると、薫ちゃんとの会話を

寸断するように、底から吹き出てくるような、焦る気持ちを言葉に出した。

「時間がない……！」

「もう、行かなきゃ……！」

「か、薫ちゃん、外でよう！」

「ん？ もう行くの？」

「ごめんよ、だけど、急がないといけないんだ」

「そっか、じゃ店でますか」

「うん」

薫ちゃんは一変して、表情が強張った俺をみて
始めはキョトンとしていたが、その雰囲気から空気を読んでくれた
のか

につこり笑い、静かに立ち上がる。

清算を済ませると、俺達は店を出た。

コール君その4

コール君達は店を飛び出すと、近くの大きな道路でタクシーを捕まえた。

「おっちゃん！宮殿まで急いで！」

「はい、宮殿だね」

タクシーは宮殿に向けて走り始めた。
道路は比較的空いていた。

「結構車少ないね」

「うん、これならすぐ着きそうだ」

ふふ…、一時は焦ったけど、なんとかかなりそうだ。
王宮着いたら、演技指導しないとな…。

「ね…」

「ん？」

「コール君って彼女いるの？」

…ギクッ…

突然その質問かよ…。

「いないよ」

「いたら、君にお金払ってまで彼女になってなんか…」

「あ、そつか！私馬鹿だね、だよな…」

…確かに、しかし敢て言わないよ…。

「薫ちゃんは彼氏いるの？」

「いないよ」

「お水の女の子なんか、誰も、まともに相手してくれないしね！」

うう…。

なんか作り笑顔っていうのかな、無理やり明るい笑顔してるけど、それが、少し痛々しい…。

彼女も好きでこんな世界に飛び込んでるわけじゃないんだね…。

「お客さん、後1時間半ほどつくよ」

「はや！」

「車空いてるから、普段の半分くらいの時間でいけそうだよ」

コールは時計を見た。

今1時だから、2時半に着いちまうのか。

余裕だな、時間余ってしまうくらいだ。

「　　」

「あ、携帯鳴ってる」

薫ちゃんは携帯を取り出すと、電話にでた。

「はい、薫です」

「おねーちゃん？」

「あ、成美？」

「うん」

「どうしたの？」

「お母さんが……、容態急変したって、病院から電話が…」

「そ…そんな」

「すぐ、行くから」

「先いつて成美！」

パチ！

薫ちゃんは携帯を閉じると、少し青ざめた顔をしている。

「どうしたの？薫ちゃん」

「お母さんが……」

「容態急変したって……」

「ええ!？」

「あの……」

思ってもいない自体に……。

く……、どうしよう……。

今更彼女下ろして出発しても、他の女見つけてる暇なんかないぞ……。
それにこんな所で下ろしたら、薫ちゃん、可哀相だ……。

「病院なんて名前？」

「え……？」

「三ツ星病院」

「おっちゃん……！三ツ星病院って知ってる？」

「ああ、知ってるよ、ここから30分北にある病院だね」

30分か……。こうなりゃ、一か八か……。

どうせ、彼女を連れて行かなければ、俺はどっちみち……。

「おっちゃん!!三ツ星病院先いってくれ!!」

「分かりました」

タクシーは交差点で右に曲がると、三ツ星病院へ直行した。

「お母さん、大丈夫かな……」

心配そうに、手を祈るように合わせ、薫ちゃんは今にも泣きそうな顔をしている。

「落ち着いて……もうすぐ着くから……」

「ありがとう……」

「妹の話聞いた感じだと、手術室に運ばれて、もう2時間は経ってるらしいの……」

「お母さん死んだら、どうしよう……」

いつも明るく振舞う気丈な薫ちゃんの目に、抑え切れない感情が当等涙として彼女の目から外へ零れ落ちた。

こんな時……俺は何を言えば良いんだろ……。

俺は意識はしていなかったが、自然と彼女の頭を右手で優しく撫でていた。

それに気がつくとな彼女は、すすり泣くと、頭を俺の胸に押し付けるように

縋り付く。

痛いほど彼女の悲しい気持ち、体の震えから俺に伝わってくる……。俺にはこんなことしか、彼女を慰めることは出来ないけど……。

「着いたよ」

「薫ちゃん、行こう!」

「おっちゃん、少し待っててくれるかい?」

「すぐ戻ってくる」

「取り合えず、お金、10万の小切手渡しとく」

「おいおい、そんなに」

「ごめん、急いでるから」

俺達はタクシーを出ると、病院の中へ小走りに入っていく。

「河野瞳が容態急変したって聞きました」

「今どうなっていますか?」

「手術中ですね」

「ご家族の方ですか?」

「はい、娘の河野薫です」

「3階の手術室の前でお待ちください」

俺達は3階にエレベータで行くと、患者達がたくさん見える。

その中に紛れて制服の女の子が目に入ると、その子はこちらを見て手招きを始めた。

「成美〜!」

「おねーちゃん、今手術中なの」

「知ってる…」

「あれ、その人誰？」

「友達だよ」

「それより、容態聞かせて」

手術室の前の椅子に俺達は座った。

彼女の話だと、今が峠らしい。

この手術がうまく良くかに生死掛かっている。

「お母さん……」

祈り続ける薫ちゃん。

妹の成美ちゃんも心配そうに俯きじつと黙っている。

1時間くらい待っただろうか・

ガチャズー…

回転式の手術室のドアが開いたかと思うと、マスクをしたオペ担当の医者が

一人出てきた。メガネをかけ、消毒薬の匂いがプンプンしている。

「娘さん？」

「はい」

「母は……」

「手術は成功しました、もう安心ですよ」

「良かった……」

「先生有難うございます、本当に有難うございます……」

姉妹で抱き合いながら、喜びを体全体で表す二人。

俺はその姿をみて、思わず貰い泣きをしてしまった。

「よかったね、薫ちゃん」

「うん、コール君ありがとね」

「いやあ、は……!」

俺はふと我に帰り、時計を見た。

…3時…。

「やべえ、どうしよう」

「どうしたの？」

「もう行かないと、間に合わないよ……」

「あ…」

「行こっか？」

「でも薫ちゃん、お母さんに付き添ってあげないと…」

「そうだけど…」

「俺いくよ…お母さん大事にね…」

俺はそう優しく薫ちゃんに声を掛けると、右手を振りその場を早足で抜け出していった。

格好いいけど…俺どうしようか…。

タクシーに帰ると、俺は絶望にくれていた。

今更女の子を新たに確保している時間も無さそうだ。

その時…病院の入口から駆けてくる女性が一人いた。

「薫ちゃん！」

俺はドアを開けると、外に出た。

「どうしたの？」

「私も行く…」

「でもお母さんが…」

「いいの、麻酔効いてるからまだ目を覚まさないし…」

「成美がいるから…」

「それに…、なんだか、コール君のことほっとけなくて」

俺は迷ったが、彼女の真剣な眼差しを目のあたりにして
その言葉に甘えることにした。普通なら断るところだが、命に関わ
る事なので
その申し出を断る理由はなかった。

「おっちゃんー、急いでまた、王宮に行ってくれ・」

「出来れば飛ばしてくれ！」

「わかった、任せとけ！」

俺達はタクシーに乗り込むと、また王宮目指して走り始めた。

コール君終了

タクシーは空いている道路を、颯爽と走り抜けていく。

空は入道雲が積みあがるようにして上に伸び、ソフトクリームのように見える。

しかし、最愛のお母さんが手術成功したとは言え…、一緒にいてあげる事を辞めて、何で俺についてきたんだろ…？

「ふゝ、何とか間に合いそうだ」

「ね…」

突然、薫ちゃんが俺の顔を見つめると、神妙な顔で声を掛けてきた。

「王宮に行く理由ってなんなの？」

「お金払って即席彼女まで作って……」

「よっぽどの理由があるんでしょう？」

「私、分かるの、何か普通じゃないって」

「だから…、母の事気になったけど、ほっとけなくて」

「ええっと、それは……」

困ったな…素直に答えていいものだろうか…。

ここは少しはぐらかすか…。

「王宮にいる、知り合いに自慢しにいくんだよ」

「へ…？」

彼女は俯くと、少し押し黙っていたがまた、顔を上げ言葉を発した。

「なにそれ、そんな理由で……」

「呆れた…」

「怒った？」

「……」

「私…、馬鹿みたい…」

ああ、今ので俺の株随分落としたな……。

場の空気が寒々としている。

薫ちゃんは、俺から少し離れるように右側の席に寄りかかり窓の外を見ている。

なんか重たいなあ、空気が…。

しかし、命が掛かるとか言ったら、もっと重たくなるしなあ…。

「ああ、ちよつと混みはじめたね」

「渋滞30kmか…」

「困ったな、事故が合ったらしくて、道路規制してるよ…」

「ええ、そんな…」

俺は嫌な胸騒ぎがはじめ、落ち着き無く足をとんとん弾ませ始める。

時計を見ると既に4時を回っている。

「おっちゃん、5時に間に合いそうか？」

「どうだろうな、微妙だな…」

「うっ…」

車は一瞬前に進んだかと思うと、すぐ停止する。

それを断続的に繰り返していた。

俺はその様子を見て頭を抱えると、絶望の淵に身を投じていた。

…このままじゃ俺は…。

「……」

そんな様子を見て、さっきまで、少し不機嫌な顔をしてた薫ちゃんが俺に近付き話しかけてくる。

「ね、なんでそんなに悲しそうな顔してるの？」

「たかが、自慢しに行くだけの事なのに」

「少しくらい遅れてもいいじゃない…」

絶望にくれ、塞ぎこんでいる俺に、知らないとは言え、無常な言葉を投げかけてくる

薫ちゃんに思わず、抑えてたものが雪崩のように口から流れ出した。

「あーあー、気楽に言ってくれよ！」

「ずっと、君に気遣って、言わなかったけど」

「俺は日没までに、彼女つれていかないと、夜を待たずして」

「処刑される運命なんだよー！」

俺はその言葉を放つと、はっとして我に返った。

…思わず、言ってしまった…。

薫ちゃんはその衝撃の言葉に、顔を強張らせ固まっている。しばらく沈黙の時間が続いたが、やがて口を開いた。

「なんで…」

「なんで、その事言ってくれなかったの！」

「だって、言ったら、君は慌てるだろうし……」

「責任も感じてしまうだろ…？」

「そういうの抜きで、行くつもりだったんだ」

「元々時間も余裕見てたし、こんな事になるはずじゃなかったしね……」

「今何時よ！」

俺はその怒鳴り声に体をびくつかせると、時計を見た。

「4時半だね……」

薫ちゃんは窓を開け、窓の外に顔をだし、前の方に視線を送る。長い車の列がどこまでも続いていた。

「このままでは、間に合わないわ」

「……」

「コール君外出よ！」

「え？」

薫ちゃんはタクシーのドアを開けると、俺の左手をひっぱりながら外に走り出る。

「おい、お客さん」

「ま、お金もらってるし、いいか……」

「おい、どこまで行くんだよ…」

「ちょっとまって！」

「なんだよ、一体」

「あれは…！」

薫ちゃんが、雑貨店をみつけると、中に走りこんでいく。外で待っていると、何か長い物を持って帰ってきた。

「ほうき？」

薫ちゃんは、ほうきを袋から出すと、それを横にし魔女みたいに跨った。

「おいおい、何の冗談だよ…」

「魔女のまねかよ…」

その姿を俺は呆然として見つめる。

薫ちゃん、テンパリすぎて頭逝っちゃったかな…。

「…私その魔女だしたら!？」

「ええ…？」

彼女はそう言うのと、ふーっと長く息をついたかと思うと
瞑想しているかのように目を閉じ、静かに押し黙っている。
そのうち、彼女の周りに風のようなものが吹き荒れ始める。

「なんだ？」

俺はその風に目をきっちり開けられない。

「よし！」

「乗って！」

「乗ってって…、言われても」

「いいから！私の後ろに跨って！」

薫ちゃんの異様な迫力に負け、俺は恐る恐る言われたとおり、その
ホウキに跨ってみる。

「じゃ、振り落とされないように、私の腰にしがみついてね」

「え、ああ…」

彼女がそう言うのと、更に風が辺りを激しく揺らしたかと思うと
すーっとホウキが浮き始める。

「わ、わ！浮いてる」

俺はお尻にふわっと浮くような異質な感覚が走ると
思わず声が漏れた。

「行くよ！！！」

そう言い放つと、ホウキは一気に上空に垂直に上がったかと思うとその高さから前方に急発進し、空を流星のような速さで突き進んでいく。

「うわ、わあ…」

「ちよつと、こわ…」

「はや、ひーーーー」

俺はまるでジェットコースターに乗ってるかのような衝撃に突如襲われ、まともな言葉が出てこない。下を見ると、街の姿が一回り小さく見える。

ちよ、こわ、俺高所恐怖症なのに……。

薫ちゃんは空から周りの景色を見渡す。

「あれね、ドンダリの頭のような金色に光る塔があるところ」

俺はもう薫ちゃんにぎゅっとしがみ付いて、目を閉じると前も見えていないし何も聞いてもいなかった。

「それ……！」

体全体を寒気のような、高所からおちるような、なんともいえない

感覚が襲う。

「うわ~~~~」

ただただ、目を瞑ってしがみ付くしか出来ない俺。

しばらくすると、その感覚が消えたかと思うと、足に地面の感触が戻ってきた。

「着いたわよ」

その言葉を聞いて、足を震わせながら恐る恐る目を開けると、どこかの建物の石段の前にいた。

「ここ、どこ...?」

消え入るような声で、ブルブル震えながら俺は薫ちゃんに言葉を発した。

「宮殿だよ」

「え...?」

その言葉を聞くと、目を大きく見開き、辺りを見渡すと宮殿のような建物が

確かに目の前に建っているのが分かる。

足に力を入れ、大地に何とか立つと、少しよろけながら2、3歩歩いてみる。

だんだん、意識がはっきりしてくると、俺に感情が戻ってくる。

「ええ、着いたんだ」

時計を見ると、針は5時10分を指していた。

「ギリギリセーフだ…、まだ日も暮れていないし」

「薫ちゃん、ありがとう」

「てか、すごい！」

「何で魔法使えるの？」

「私の高校は魔法も授業に入ってるね」

「ホウキで飛ぶのは、一番得意なのよ！」

彼女が微笑みを浮かべ得意そうにそう言った。

「さあ、行きましょう！」

「ちょっと待って！！演技指導しなきゃ！」

「演技指導？」

「うん、恋人の振りの練習しなきゃ」

彼女はきよとした目で一瞬黙っていたが、突然顔を近づけてきた。

「必要ないわよ……」

「だって、私……」

彼女はそう言うと、不意をつき、俺の唇にキスをした。
柔らかい唇の感触が伝わってくる。

キスをしておえ、静かに唇を離すと、お互い顔を見つめあう。

もう、俺も分かっていた。

彼女の事を初めてみた時から…

好きになり始めていて、今はもう…

恋の魔法にかかってしまっていることに……。

「中はいるっか？」

「うん！」

俺は左腕に隙間を作り、薫ちゃんの前に突き出すと

彼女は嬉しそうに手を巻きつけ、二人で中へ入っていった。

END

鞘神楽 武君の場合。

コール君がまさか、日没までに彼女連れてくるとは、思わなかったな・・・

さてと、また暇になったし、次のターゲットを絞るか。

鞘神楽 武君

プロフィール

高校2年、夏休み、真面目、地道、2枚目
地味、趣味はサイクリング、チャレンジ精神旺盛。諦めない。嘘が
つけない。

何をさせるかの？

武智山にいとされる山の精霊と会って、その証拠写真を撮って来
い。

宿賃と、交通費、小遣い、王宮から支給。

期限 夏休みが終わるまで。

懲罰なし。

鞘神楽 武君の場合。

俺は鞘神楽武。高校2年生。

なぜ選ばれたかは知らないけど、俺の家に王宮から命令が書かれた
文書が届いた。

武智山…、知らない山だ。でも少し退屈してたし、夏休みの良い思

い出として

行ってみるのも、それはそれで良い気がして、今日旅たつ事にした。家族にはもうその事は全て話していて、了解はとってあるし、後は、場所を確かめるだけだ。

王宮から場所が書かれたパンフレットが、一緒に同封されていたので、それを見てもみることにした。

なるほど、JX線、武智駅。

山の名前がそのまま駅の名前として、使われているらしい。

取り合えず、王宮から指定されている宿への電話をしてみるかな・

プルル、プルル…。

「はい、民宿、向日葵です」

「私、鞘神楽武と言います」

「今日の夜から、そちらで宿泊する予定になっている者ですが」

「王宮から、御連絡言ってますでしょうか？」

「はい、来てますよ」

「そうですか、分かりました」

「失礼します」

ガチャ、ツーツー…。

話はきっちり通っているようだ。

俺は荷物に、必要最低限の服装（4日分）と王宮から出ている小遣

い。

日焼け止め、カメラ、その他色々を大きな旅行カバンに入れると、母に出発を告げる。

「武、気をつけてね」

「うん」

「なんだか母さん心配だわ・・・」

「大丈夫さ」

「お金も持ったし、宿も手配されてるし」

「何も心配はいらないよ」

「毎日一度連絡頂戴ね」

「分かった・・・じゃ行ってくるよ」

俺は心配そうな顔をした母に、軽く微笑みを浮かべ手を振ると駅に向かうバスに乗った。

…… JX箕神楽駅前

ここで降りなきゃな…。

神楽駅の構内で切符を買うつと、機械に通して、駅に向かう。昼前という事もあって、それほど人はいないが、やはり夏休み。子供達がそこそこ構内には居る様だ。

駅にある椅子に座り、俺は目的の電車を待つ。
しばらくすると、ＪＸ東都宮線と言う文字が、電光掲示板に映し出される。

…来たか。

俺は大きなカバンを肩から提げ、足を強く踏ん張り立ち上がると電車の入口が前に来る、白い三角印のすぐ後ろに移動する。
後ろを振り向くと、同じ位の年頃の制服をきた女の子が立っている。

…学校の帰りだろうか。

しばらくすると、電車が俺の前をゆっくり通過したかと思うとスピードを弱め、停止し始める。

完全にその動きを止めると、俺の前にほとんどずれる事無く開閉式のドアが現れた。

ドアが開くのとほぼ同時に、電車に乗り込み、バッグを頭上の荷物棚に

力いっぱい持ち上げ置くと、２人用の席の窓側に深く腰をかける。

ＪＸ線、武智駅はこの電車の終着駅の一手手前の駅だ。

さっきの後ろに並んでいた女の子が、立っているな。

席はどこでも空いているのに、たぶん、家が近くなんだろうか。

なぜ、俺がこんなにこの女の子に、興味を示すのか

たまたま、同じ電車に乗り合わせたただけの見知らぬ女の子じゃないか

……その理由は実はすごくシンプルなものであつた。

先週、俺のきつい言葉が発端でケンカ別れした彼女にあまりに似ているから、ただそれだけの理由。
だけど、全くの別人であることは間違いない。

お下げ頭で、顔は比較的整っているけど、黒髪に、二重の目、広いオデコ

化粧はしていないかな、どこにでもある地味なかんじの女の子。そんな彼女に、俺は心底惚れていた。

齒に衣着せない言葉、素朴な顔立ち、性格。

その全てが、俺の嗜好に合っていたんだろう。

その彼女と似た女の子が同じ電車に乗っている。

俺はその子の横顔を、気づかれない程度に何度も見てしまう自分に、嫌悪感を抱きながらも

まだ別れた彼女に、未練が残っている事を痛感せずにはいられなかった。

鞘神楽 武君の場合その2（前書き）

長文難しい・・・

鞘神楽 武君の場合その2

あらかじめ用意しておいた到着予定表を俺は開いた。
着くまで一時間半つてとこか…。

何するかな、あれ？もう30分経ったというのに…。
まだあの子ガラガラで立っているよ。

あの女の子は片手に程よい大きさの手提げカバン、そのカバンに
重なるように
テニスラケットを持っている。とても軽そうには思えない荷物を持
ちながら

長い時間なぜ座らないのか、ずっと気になっていた。
たぶん、ダイエツトとか？もしくは鍛えているとか…。

それとも、電車に座らないという、彼女独自のポリシーみたいなも
のがあるのかも。

俺はそんなどうでもいいような事を真面目に考えていた。

しかし、そんな推測に費やす時も長く続く事はなく、だんだん、眠
気が徐々にではあるが

確実に瞼を閉ざそうと作用する。

完全に眠りに入ってはいないが、意識の半分は確実に現実の世界か
ら遠のき

ほぼ閉じかけた目に、少しだけ周りの様子が映し出されている。

朧気な意識の中、俺の目はあの彼女が電車を降りていく姿を捉えて
いた。

やっと降りるのか、どこ行くんだろう…。

しばらくすると、俺は体を揺さぶられるような感覚に襲われる。

「お客さん、終着駅ですよ」

「起きて下さい」

「う、うつ」

体を横に揺さぶる感覚と大きな声に俺は意識を闇から取り戻すと俺の左に立つ車掌さんの存在に気づく。

次の瞬間、自分が寝過ごした事をようやく理解すると、突然立ち上がり

車掌さんに枯れた声で言葉を発した。

「あ、ああ…すみません。す、すぐ降りますので」

起きたばかりの鉛のように重い体にムチを打ち、頭上のバッグを引きずり落とし

右肩に担ぎ上げると、罰が悪そうに、何度も小さく車掌さんに頭をさげながら電車を降りた。

ああ、参ったなあ…。

一駅乗り越しちまったよ。

虚ろな意識の中、ふらふら歩きながら清算機に近付き切符を入れると追加料金を払い、出てきた切符を手に持つ。

取り合えず、この駅を出るか。

重い足取りで改札口にやってくると、駅員さんに切符を渡し、太陽の日差しがきつい駅外へ足を踏み出していった。

…さてどうしようかな…。

駅の前には木造立ての古い建物が並んでいて、その建物の間から田んぼが

目に入ってくる。

田舎だなあ…。

取り合えず一つ乗り越したただだし、線路に沿って歩くか…。

そう決心すると、土と砂利の道を武智山駅へ向けて只管歩き始める。炎天下の日差しは容赦なく降り注ぎ、乾いた喉を更に乾かす。

…喉空からだ、カバンの中にあつたな。

俺は用意してきた飲み物の事を思い出すと、カバンを弄り魔法瓶を取り出した。

それを手で横に何回か振ると、水のざわめく音が外に漏れる。

昨日、魔法瓶に入れ冷蔵庫の中で冷やしたスポーツドリンクは

朝は凍っていたが、猛暑の中、歩いたり電車待ちをしている間に、熱が中に浸透して程よく解けていた。歩く足を止め、蓋を開け中身をその中にいれると、喉の音を立てながら、一気に飲み干す。

…つめた　生き返る…。

俺はその清涼感で体に一瞬の生気を取り戻すと、蓋をかぶせカバンに魔法瓶を仕舞い込み

また歩みを進める。さっきとは違い、その足取りは力強いものとなっ

ていて

どんどん、線路に沿うように続く土の道を突き進んでいく。やがて、木造の家々が視界から消えると、連なるように並ぶ畑が目

に飛び込んできた。

俺の家は比較的都会にあり、畑を目にする機会があまりないため、

その風景は

新鮮なイメージで俺の目に映る。

それを見ているうちに、少し遊び心が出てくると、畑のあぜ道に近寄り、その上を田んぼを覗き込みながらゆっくり歩く。アメンボが田んぼに張られた水の上を忍者のように

すいすい移動していて、水中には蛙が気持ち良さそうに泳いでいる姿が見える。

俺はその田んぼを眺めながら、トンボが飛び交う畑のあぜ道を、悦に浸りながらゆっくり歩いていた。

…気持ちいいな、新鮮な空気、自然に囲まれた田舎のゆったりとした雰囲気。

都会では決して味わえないな…。

しばらくすると、俺はあぜ道から線路沿いの側道に戻り、また只管目的の駅を目指して

歩き始めると、横に沿う線路の前方に、武智山駅と書かれた白い看板が見えてきた。

…やっと、着いたか。

鞘神楽 武君の場合その3

俺はやつと目的の駅へ到着した。

「えーつと…」

駅の屋根の下にできた小さな影に自分の体をすっぽり入れると、王宮から送られてきたパンフレットを半分におりたため、目に滴り落ちてくる汗を訝しく思いながらも、場所の確認を急ぐ。

ここから、真直ぐ行くと道路に出てそこを道沿いに西に歩くとあるのか…。

焦る必要は全く無いわけだけど、空腹感がどうしても冷静さをかき乱し、俺をいらいらさせる。

もうお腹が…なんか買っておけば良かったな…。

俺は昼食を完全に民宿頼りにしていた。そのせいもあって、場所を特定すると道を少し早い調子で歩きはじめる。

さっきまでゆつたりとした落ち着いた気持ちで歩いていたらけれど、民宿が近いことを悟ってからは、まるで猪のように、目的地目指して何も考えずに歩を進める。

しばらくすると、勾配が急な坂道にさしかかり、そこを降りていくとコンクリートの道路が見えてきた。上半身を覆うTシャツは体中の汗を吸収し、胸や背中の部分に大きな透明の染みを浮き立たせる。車の往行する姿が皆無のその道路に侵入すると、西に向かって只管歩く。

道路の左側から水が流れる音が聞こえる。その爽やかな音の方に導かれ、自然と足が進みガードレール越しに見下ろすと、透き通るような水を湛える川が横たわっていた。

その川の流れは激しく、点在する岩に水の流れが当たり、白い造形を彼方此方に浮かび上がらせているのが分かる。その猛々しい姿に俺は目を奪われ足を止めた。

しばらく、それを見無心で眺めていたが、押し寄せる空腹感が止めた足をまた前に突き動かす。

右側には盛った土砂の斜面の下を固めるコンクリートの擁壁が続いていて

それが途切れたかと思うと、赤い鳥居が目映える神社が姿を現す。特に目新しさは無いが、どこか威厳のあるその姿を

横目でちらちら見ながらも、歩を進める速度は衰えを見せない。目的地はもうすぐそこに来ているのを感じているからだ。

逸る気持ちが抑え切れなくなつて、少し小走り気味に突き進むとやがて、白看板に黒字で刻まれた向日葵という文字を視界に捉える。

やつと、着いたか…。

心に大きな余裕と共に安心感が訪れ、思わず顔が綻ぶ。

木の板が表面を覆うその民宿の玄関の引き戸を横に滑らせ中に入る。

静まり返ったそこに人の姿は見当たらない。

仕方ないので深く息を吸うと、少し大きめの声で言葉を奥に投げかける。

「こんにちわー」

その声に気づいてくれたのか、青い二部式着物を身に纏った女中さんが姿を現す。

「どうも、お待たせしました」

「あの、朝お電話しました鞘神楽と申します」

「ああ、鞘神楽様ですね、御待ちしていました」

「どうぞ中へ」

靴を脱ぐと、女中さんに導かれるまま二階へと上がっていく。

段差のそれほど高くない木の階段を上り終えると、木彫りの大きな熊が

置かれていて、その前にある細い通路沿いに幾つか部屋のドアがあるのが分かる。

その一つを女中さんが開けると、手を差し伸べ、私を先に中へと招き入れた。

8畳ほどの畳の部屋には木の枠の障子があり、真ん中には正方形の木製のテーブルが置かれていて、その周りに座布団が並べられている。落ち着いた感じの和室だ。

俺は畳の上に荷物を置くと、座布団に少し足を伸ばし気味に座り旅の疲れを癒す。

良い部屋だな…。

「でわ、13時になりましたら、昼食お運びしますので」

「それまで、ごゆっくりご覧くださいませ」

女中さんは和やかに俺と少し会話を交わすと、お辞儀を深々とし部屋を静かに出て行った。

腕時計に目をやると針が12時30分を指している。

…昼食まで少し時間あるな…。

俺は障子を開くと、窓の外に広がる景色を楽しむ。

眼下には道路を挟んでさっきの川があり、その向こう岸には川に沿うように

青々とした木々が生い茂り、その先には畑や民家が点在していて、奥に大きな山が聳えているのが見える。

…もしかして、あれが武智山かな…？

その山を見るなり、王宮から指示された内容を思い浮かべる。

山の精霊か…本等にいるんだろうか…。

取り合えず、この旅館の人が周辺住民の人たちに色々聞かないとな…。

その事を考えているうちに、少し面倒くさい気持ちになってくると足をテーブルの下に滑り込ませ、仰向きに力なく寝そべる。

静寂が部屋を包み、微かに川のせせらぎだけが耳に届く。

「失礼します」

俺は突然部屋に響き渡る声に体をびくつかせ、頭を急に持ち上げるとテーブルの角に思い切り額をぶつけた。

「痛…」

俺は右手で額を押さえると、苦悶の表情を浮かべ目じりにいくつか皺を作る。

「大丈夫ですか？」

その様子をみて女中さんは心配そうに声を掛けてくる。

いたたた、俺いつのまにか寝てたのか…。

しかし、みつともない姿を見られたもんだ。

「ええ、大丈夫です…」

自分への嫌悪感を抱きながら、その情けない姿を見られた恥ずかしさに

控えめに言葉を発する。

俺は痛みが少し治まるのを感じ取ると、ゆっくり体を起こす。

「よかった…」

その女中さんは安堵の声を漏らすと、運んできた昼食をテーブルに並べ始める。

俺はその様子をぼーっとみていたが、その女中さんの顔を見るや否や驚きとともに思わず声が漏れる。

その声を聞いて、一瞬食べ物を並べる手を止めると、その女中さんはこちらに目をやる。

「どうされましたか？」

「い、いえ…」

俺が驚いたのも当然だ。

今日電車で見かけた別れた彼女似のあの女の子が、青い着物を体に纏い

目の前にいるのだから。

どういうことだ？なぜ彼女がここにいるんだ…。

困惑を隠しきれない俺は、料理を静かに並べる彼女の姿を
呆然として眺める。

彼女は料理を並べながら、少し間が空くと俺に声を掛けてくる。

「今日は暑いですね」

「どちらから来られたんですか」

「ここから眺めれる景色は・・・」

ちよつとした会話で間を埋める彼女の顔に俺は強い視線を送る。
どうしても今日の偶然を彼女に伝えたくて、その事を切り出す
タイミングを計っていた。

彼女が一寸沈黙したのを窺うと、俺は一言発した。

「今日JX東都宮線の電車に乗ってましたよね」

「え…」

「実は僕も同じ電車に乗り合わせてて・・・」

「あら」

「ええ、すごい偶然！」

彼女は俺のその言葉を聞き、最後の料理を並べ終えると
声のトーンを一段階高くして、目を丸くしながら言った。

「僕もびつくりしたよ」

その話を皮切りに、女中さんと客が普段話す上辺だけの会話ではなく友達と話すように彼女に語りかける。

その俺の柔軟な姿勢に合わせて、彼女から素の言葉が飛び出てくる。

「へー、一人旅？すごいね」

「そうかな」

「君はなんでここにいるの？」

「だって、ここ私の家だし」

「ええ、今日神楽駅から乗ってきたよね？」

彼女はその俺の淡々とした問いにかなり驚いた表情を浮かべる。

…あ 今の質問はまづかったかな…俺は彼女を見てたけど、彼女は俺の姿を全く覚えていないようだし。

良く考えると、ここまで偶然が重なると、俺ストーカーに間違われでも可笑しくないよな。

確かに偶然なわけだけど。

そう我に返り、会話を振り返ってみると少し自分が不審な人物に見られていないか心配になってきた。

しかし、彼女は幸運にもそれも偶然という言葉で頭で処理してくれたのか、俺に軽く微笑みかけると、さっきまで彼女がしてきた事を明るい口調で語り始める。

ほっ…。

要約すると、彼女の家は民宿をやっていて、今日はここから5つ向こうの駅にある

彼女の高校でテニスの朝練を早朝に終え、そこから1時間以上かけて俺が乗ってきた駅の近くにあるおばさんの家に届け物をした後、また電車にすぐに飛び乗り（この時俺と一緒にいた）、武智山駅までの途中にある駅で、彼女の母に頼まれていた民宿の夕食のメニューに欠かせない力ボチャを買って…、さっき帰ってきて女中の姿で俺の前に現れたと。

彼女のそんな話を俺は啞然として聞いていた。

鞘神楽 武君の場合その4

俺たちが時間を忘れ、驚嘆に値する偶然の出会いと、各々の今日一日に体を動かし

心で感じとった体験を言葉を通して交わすうちに、それぞれの人間性を垣間見る事に

成功したのか、短い時間ではあるが、初めてこの場所で顔を見合わせた時よりは

打ち溶け合えた気が俺の心の内だけではあるが、実感として残る。

まだ、言葉のキャッチボールは終わっていなかったが、その間に分け入るように

彼女の後ろから、囁くような声が扉の隙間から差し込んでくる。

俺一人に長い時間を費やし、客人との会話の範疇を超えた友達同士で交わすようなやり取りを耳にした彼女の母（たぶん、初め俺を接待した女中さん）が、業を煮やし彼女を呼んでいるようだ。彼女は体を振ると後ろを振り向き、彼女の母に理解を示した意味を

込めて、右手の人差し指と親指で丸い円を作り合図を送ると、俺の目を見据えて言葉を残す。

「また、後で〜！」

彼女は俺に微笑みかけると、長い時間ほぼ正座をしていたにも関わらず、凜として立ち上がると、接客の作法を忠実に守った退室の一連の動きを俺相手に披露した後、部屋を静かに出て行った。

…さて、飯を食うか。

彼女と話しながらも、箸を握る手は頻繁に食べ物をお口へと運んでいたが

意識を話に捕らわれていたため、味わいながら食べる楽しみを見出せていなかった。

今からそれを満喫しようと、皿に残っている食べ物へと箸を伸ばす。

しばらくすると、全ての皿の表面に木の櫛や、料理の下に敷かれていたビニールや

紙、テンプラの粉だけ残されると、俺は箸を無造作に一つの皿に一応並べたつもりで置く

ようやく、胃袋へ詰め込む作業から解放され、壁に背中の一部をつけもたれ掛かる。

満腹感が心と体に広がり、少し眠気すら含んでいる。

意識を静寂に任せ、心を空っぽにしたまま、部屋の壁に掛けられている浮世絵のあたりに視線を置く。

どれくらい時間が過ぎたのだろうか、考える事を止めていた脳の動きを再開するかのように

頭を左右に振ると、これから何をするか、その行動計画を考え始める。

…取り合えず、山の精霊の伝承を誰かに聞くか、ここどこかにある郷土博物館にでも

調べに行かないと、話しにならないな。

なんたって雲を掴むような話だしな。

俺は取り合えず、この民宿にいる誰かに話を聞く事に決めると、足を強く踏ん張り立ち上がると、部屋の電気を消し廊下に躍り出て、外から部屋の扉に鍵を掛ける。

そして、1階へスリッパの音をさせながらゆっくり降りていくと、あまり忙しくしてなさそうな人を捕まえようと、玄関を少しはいっ

た廊下の壁に持たれかかり佇んでいた。

あまり客が他にいる様子の無いこの民宿は、静まり返っていたが、廊下に誰かが出てくる様子は今の所微塵も窺えなかった。

…仕方ないな。

待つていつても時間だけが過ぎていくので、俺は行動に出た。

廊下の突き当たりについて部屋、そこを右に曲がる通路があつて、そのどん詰まりにも

3つくらい部屋が見える。

俺は足音を微妙に静かなものにしながら、一つ目に見える部屋の古びた木の扉を
右拳を作り軽く2回ノックした。

「はい」

一際大きい声と一緒に畳を足で擦る音が、扉の向こう側から聞こえてくる。

木が軋むような音を孕み扉が大きく開かれる。

俺の前に現れたのは、彼女の母と思われる初めに接待してくれた女中さんだ。

なぜ、彼女の母だと半分断定しているかと言えば、一つ上げるとすれば

独特の少し下へ向いた睫と落ち着いた目つきが、彼女の娘さんを彷彿とさせるからだ。

逆もしかり。

俺は控えめな口調に勇気を少し込めて、武智山に住むとされる精霊について

何か情報は無いか、聞いてみる。

「ええ〜つと、私には分かりませんね〜」

その答えは聞く前から半分は覚悟していたが、実際聞いてみると、その落胆はかなりのものだ。俺は力なく視線を下にやると、言葉を一言一言呟き、軽く会釈をすると

扉が閉まる様子を虚ろな瞳で見つめていた。

完全に閉ざされようとした矢先、奥の方からあの彼女の耳に心地よい透き通るような声が俺に届く。

「私知ってるから、少し待ってて!」

それは少し意外だった。伝承ってというのは、古くからその場所に住んでいる

年の召した人から聞ける物だとTVのドラマなどで刷り込まれていたので、年若いほぼ同年齢と思われる彼女から、その言葉が出てくる事に違和感を感じずにはいられなかった。

色々な音が古びた薄い木の扉を透して聞こえてくる。

畳を引きずる音、押入れが開く音、それらから服を着替えている事を察するのは容易だった。

そして、女の準備と言うものが長くなる事は、十二分に前の彼女や母の例から分かっていたので、俺は中に一言声を掛けると、部屋に一旦戻る事を伝えた。

部屋に戻ると、障子を開け窓越しに映る武智山らしき山を目を細めて眺める。

霧が山の緑色を白く濁らせ、曖昧な少しぼやけた景色を俺の眼に届ける。

…あそこに精霊がいるのだとしたら、どのあたりに住むんだろう…?

そんな疑問がふと湧き立つ。暫く頭を悩ますと、その答えを山の頂

だと勝手に断定した。

それもまた、TVの影響が多分にあるのは言うまでも無い。

突然、というか必然に、扉をノックする音が聞こえたかと思うと一言挨拶の言葉を俺に掛けると、それに俺は優しい言葉を投げかけ招き入れる。

「ごめん、待たせた？」

「いや、全然」

彼女が申し訳なさそうに、苦笑を顔に浮かべ入ってくるのでそれにあっけらかんとした笑顔で応えて場の雰囲気をもたせようと試みる。

その様子を目にして、案の定彼女に微笑みが戻る。とても素直で実直なその姿に前の彼女の姿が重なるのを感じた。

…元々顔も似ている上に表情も性格も似てるもんだから 参ったなあ…。

俺は心臓の鼓動が早くうち、気持ちが高揚するのを感覚で捉えるとどうしても、自分に嫌悪感を感じてしまい、大きな穴があれば体ごとその中へ押し込めてやりたい気分になる。

「何から話そうかな」

彼女はそんな俺を余所に、いくつか心当たりがあるような素振りで額に右手の人差し指を当て、最初に俺に語る内容に頭を巡らせる。

「そうだ！まず、身近なところから」

「家に住む精霊の話しからするね!」

甲高い声を発したかと思うと、彼女は顔を綻ばせ不思議な言葉を俺に投げかけてきた。

鞘神楽 武君の場合その5

「精霊つて家にもいるの？」

不可思議な彼女の言葉に思わず喉から言葉が突いて出た。

「いるよ、今私の周りにもほら！」

彼女は畳に近い場所に何かそこに存在するかのようになり、指を差して俺に同意を得ようとするが、どうしてもその姿を捉える事ができない。

…彼女には何かが見えているらしいけど、俺には畳を指さしているようにしか…。

「ああ、見えないのね、鞘神楽君には」

突然名前を苗字で言われて、違和感を覚える。たぶん、宿帳の名前を調べたんだろうけど、急に苗字で呼ばれると驚いてしまうな。

「武でいいよ」

「そういえば、君はなんていうの？」

「ああ、私は紗枝檻小雨よ」

俺の苗字は少し特殊だし、呼びづらいだろうと思って、彼女に下の

名前で呼んでもらうことにした。そのついでと言っては何だけど、名前を聞く良い機会だと思って彼女の名前も聞いてみた。小雨ちゃんか、珍しい名前だ。

「武君さ、あんまり靈感ない方？」

靈感……。これはまた……。彼女は靈感少女のようだ。

俺の周りにはそういった特殊な力を持つ者が家族や、友達、知り合いにいないので

TVで夏にやっているホラー特集でくらいしか、お目にかかれないその奇妙な言葉に少し気後れを覚える。

「私には見えているんだけどね」

彼女に見えている世界に少し興味が湧いてくると、ちょっとした質問を投げかけてみる。

「どんな形してるの？精霊って見た目はどういったかんじ？」

それを耳にするなり、部屋に複数精霊達がいるかのように

足元や天井、部屋の隅など彼方此方に目をやり、それぞれに一時視線を置いたかと思うと、低く唸りながら首を傾げて、イメージを表現しようと彼女なりに努力をしてくれる。

彼女に見える精霊はとも口で表現しづらい姿をしているようだ。

突然、彼女が俺の肩の辺りに見据え指差すと言った。

「武君の肩にしがみ付いている子……」

「座敷童子って言うんだけど」

「この子も精霊の一種かな」

「おかつぱ頭にチャンチャンコ来た可愛いかんじの小さな女の子だよ」

「え…？」

不意を突く、全く考えもしていなかった彼女の言葉に思わず胸が高鳴る。

そして寒気のようなものが体に奔ったかと思うと、平坦だった手の肌に

小さな突起物が無数に現れる。

比較的、そういった物に耐性があるつもりだったが、実際それを見ることが出来る

人に真ん前から指摘される恐怖は計り知れないものがある。

体を強張らせ、肩の方を恐る恐る首を向け見るも、やはり俺の目に映ることは無かった。

「あ、離れた」

彼女が俺より少し離れた位置に視線を落とし、そう言ってくれたのでとりあえず力を抜き安堵する。

ふー、助かった。

しかし、この子…、ちょっと怖いな…。

本当に全部見えているみたいだ。

段々彼女から出る言葉に怯えはじめると、取り合えず話題を変える言葉を探り始める。

「そ、それよりさ」

「この部屋はいいから、山の精霊について何か知らないかな……？」
この部屋にいる奇怪な存在を語られるのには、少々耐えられなくなってきたので

離れた場所に存在する精霊の話しへと話題を振る。彼女はきょとんとした顔で

俺に視線を送ってくるが、しばらくして、何か思いついたかのように窓に

目を向け、静かな口調で話し始める。

「もうすぐ満月が近いんだけど、その時でしか見れない山の神様が」

「あの武智山にはいてね」

「私は彼に会う方法を知っているの」

「たぶん、行けば武君にも見えるはずよ」

「とても、格式高い霊的存在だから、貴方に見えるよきつと」

「明後日の夜私と行こうよ！」

俄かに信じる事ができないその非現実的な話に、驚きを隠しきれないが

彼女の眼には確信のようなものが浮かんでいて、それが本等である事を

俺に悟らせる。

「うん…」

俺はそれを快くとはいかないけど、承諾するしか他になかった。

王宮からの指示に唯一応えれそうってつけの話だったから。多少腰は引けているけど。

話しが纏まると、彼女と少し会話を交わした後、部屋を出て行く彼女に愛想程度の微笑みを送った。彼女の白いスカートが振り返る時に空に舞ったかと思うと、俺を扉の後ろから見据えて眼を細めて笑うと、手を小さく振りながら扉を閉めた。

彼女がいなくなると、また静寂の中に外からの川のせせらぎだけが混じる静かな空間に見を浸していた。

鞘神楽 武君の場合終了！

その後は、気まぐれに川の向こう岸へと足を運んだ。

歩くたびに揺れ動く古い吊橋を渡って向こう岸へまで来ると、そこから川へ繋がる石階段を下りて川傍でその流れを岩に座って眺めていた。

これといって、楽しいわけじゃないけど、川から飛んでくる水しぶきが、顔や手に

当たる心地よさに時を忘れて、大自然の中に自分を溶け込ませる。

時折、岩魚が弧を描いて撥ねる姿を見ると、櫛に挿された岩魚を食べる姿を

思い浮かべ、その度に一時の食欲の高揚感に駆られていた。

…しかし、一人旅もいいけど、少し時間がありすぎると、これといった目的がないから暇すぎるな…。

明後日までこういった、仙人のような時間を過ごすのは、都会生まれでデジタル製品に囲まれ暮らしている高校生の俺にとって、退屈でないと言えば嘘になる。

とにかく、時間を繋ぐ何かを探そうと周りを練り歩くも、あるのは青々と茂る木々や

日に照らされ表面を煌びやかに飾る田んぼ、そこを行きかう虫達の息吹だけだ。

そんな退屈な日々が取り合えず何事も無く過ぎて行っただかと思うと、もう彼女と山へ出かける日に移り変わる。

この日のためにだけに、この場所にやってきたんだ。きつちりカメラにその精霊か神様か幽霊かは分からないけど、その姿を納めないと。

正直言うと、初め小雨ちゃんの事が、前の彼女と重なって、気にな

つてはいたが、その気持ちは今、かなり薄いものへと変化している。顔立ちは同じでも、彼女の霊感体質とも言える、不可思議極まりないあの様子を目にしてから、どこか近寄り難い存在に思えて、この2日間

軽く会話を交わす事はあっても、深く関わる事を避け続けて今日までできた。

これから武智山へ彼女と行くわけだけど、それもまた雲を掴むような目的だし

面倒くささすら感じていた。

…もう帰りたい気分だ。取り合えず撮るものとして帰るか…。

そんな気楽ささえ漂わす投げやりな心持は、裏を返せば、武智山で起こるであろうな未知への出来事に対する、不安や恐怖から逃避したい気持ちの顯れでもあった。

夜7時夕食を運ぶ彼女の姿が俺の前にあつた。岩魚の塩焼き、刺身、芋の煮っ転がし

御餅。この宿の最後の晚餐に出された食事を味わいつくすと、ゆっくり彼女に話しかけた。

「今日さ、ずっと考えてたんだけど」

「やっぱり行くの止めるよ」

「怖くなつた…」

当等胸に秘めていた言葉を彼女に打ち明けると、俺の旅は終わった。そう俺の心は恐怖に負け折れてしまった。

次の朝、さっそく帰ることを彼女の母に伝えたと、俺は家路へと着く。

王宮の指示する写真は撮れなかったが、懲罰なしと言うことで

適当に向こうで取った景色を加工して、葉書の後ろに印刷して済ませる。

もう二度といかねえよ……。

F i n

彼が屁垂れてしまったのでこの話は終了です。

追伸

俺は前の彼女と仲直りしました！

帰ってきて、なにげにメール見たら、また話し合いたいって入っていたので

こっちもまだ未練が残っていたので、正直な気持ちで接したらまた寄りを戻す結果に。

今俺最高に幸せです。

鞘神楽 武君の場合終了！（後書き）

作者がへタれたわけじゃありません、彼がへたれたんです！

五条瓦 正和の場合

鞘神楽君が途中放棄してしまつて、つまらんことになつたな
まあ彼はハッピーなようだけど、わしはつまらん。

さて、次誰かに何かさせようかな？

五条瓦 正和

プロフィール

50歳リーマン、親父、古い、ださい、頑固

時代遅れ、大学生の娘あり、16歳高校生息子あり、妻と別居中。

何させるかな？

王宮の特殊装置でかわいめの15歳の女の子に変身後
帰ってもらつて、好きなだけそのまま暮らしてもらう。（ただし最
低でも1週間はそのまま）

事前に息子と娘に父親が女の子になつて帰る事は教えてある。妻に
は教えていない。

会社には王宮の命令で事情説明なしで、無理やり休暇を与えるよう
指示。その間給料保障（王宮から補助金、首禁止）

これでいくか…。

五条瓦 正和の場合。

「じゃ、お帰りください」

……。

えらいことになってしまった…。

わしは一体これからどうなるんだろ…。

この体…。

王宮で鏡みたときのショックはそれはもう、すごいもんだった。

鏡の前に映ったかわいい若い女の子。

それがワシだと分かるのに、そう時間は掛からなかった。

俺が手足動かすのと同じ動きを、鏡の中の女の子が忠実に真似てるんだからな。

しかも、体触ってみれば、胸の辺りに柔らかいあの感触……。

股間触れば x は無いし。

この格好で王宮は家に帰れという…。

は〜あ、齢50にしてこんな目にあうなんて夢にも思わなかったわ…。

しばらく、ワシは王宮の外へ出ると細い路地に入り、その姿を誰にもみられないように

蹲っていたが、いつまでもうつろうつろしても仕方が無いので、家に帰る決心をすると

歩き始める。

王宮から白いワンピースと女用の革靴は支給されたけど

下がスカスカして違和感あるな…。

普段は会社行っているから、着慣れたあの紳士服のズボンを吐いているんだしな

まあ、これはこれで涼しくていいがな

ふー…。

家の近くまで、タクシーで帰ってきたものの、中々入りづらいわ…。

娘や息子がこの姿みたら、どういう反応示すんだろ…。

わしは暫く、マンションの自分の部屋の外にある廊下を行ったりきたりしてみたり

落下防止用の壁の上で両手をくみ、その上に顎を置きながら眼前の風景を虚ろな目で

眺めていた。

今は、朝の１０時、普段なら会社に行っている時間だ。

こんな太陽の高い時間に、自宅前にいるなんてことは普段はありえない。

会社では管理職として、ずっとデスクに張り付きっぱなしで、書類の整理や

部下への指示、その他山積みの仕事を抱えて、エアコンの効いた部屋に

朝から夜７時～１０時くらいまで拘束されるなんてざらだしな…。その後、同僚と居酒屋へ飲みに行ったら深夜すぎに帰る事もよくあることだ。

そんなワシが、今こうして全てのしがらみから解放されて、暑い夏の空を

ゆっくり眺めている。入道雲が瘤でも何個かこさえたみたいに重な

大きな姿を晒している。

さてと…。

今娘も息子も夏休みだし、やっぱ今日家いるんかの…？

ええい、どうせ、情報は王宮から行ってるんだ。

ワシの家人るのに、ごちゃごちゃ考えてもしゃーないやろ。

堂々と入ればいいんだ。ワシが汗水垂らしてローン組んでまで買っ

たマンションじゃないか。

中にいるのは、ワシの子供達だ。どんな姿してるにせよ、ワシは父親なんだし

威厳持つて胸張ってればいいんだよ！

胸……。

結構俺大きいな……、手や脚の肌だつてすべすべしてるし。

まで……！！そんな事どうでもいいんじゃない！入るぞ！決めたぞ！
1・2・の3！

ワシは決死の覚悟で、ドアを開けた。

ガチャン……。

ワシがドアを開けると、玄関は静まり返っていた。

ふーどこか出かけているのかな、ん？何か聞こえるぞ。

応接間の方か……、行ってみるか……。

この部屋の扉の向こうから、TVの音が聞こえてくる。

やはり、誰かいるようだな……。

仕方ないな、もう覚悟は決めた！

入るぞ。

「ただいま」

部屋に入ると、ポツキーかじりながら、テーブルにスカート履いたまま

脚上げてTVを見ている、ワシの娘恭子がいた。

ワシの姿を見ると、思ったとおりの反応をこれみよがしにワシに見せ付けてくる。

目を思いっきり大きく開いて、眉毛もそれに押し上げられるように上に引張られ

幽霊でも見たような顔しとるわ、体が硬直しちまって、ポツキーが指から落ちたのさえ

気づかずにワシの姿じくくっつと見とる。

「も、もしかして、あなた、私のお父さん!？」

「ああ、お前の父親だ」

「何か文句あるか？」

初め娘は目を丸くしてその動きを止めていたが、だんだん近寄ってきて、ワシの姿を上から下まで観察するように見回すと、なんかへへ〜とか言いながら、ワシの顔や体をあちこち触って見たりして、遊び始める。

「綺麗な顔だね…」

「髪の毛も艶があって」

「お人形さんみたい…」

しばらくして、恭子はだんだんその顔に悪びれた笑顔が浮かび上がると

急に大声を上げ笑い出した。

「ちよつとくくくく!!」

「本当にお父さん、女の子になっちゃったよ!!!!」

「キャハハハハハハ！！！！！！！！！！」

「ちよっとお父さん待ってて！」

「貴史も呼んでくるから！」

「おい、こちらまで!!」

恭子はげらげら笑いながら、ポツキ―散乱しているのも片付けずに、２階にいる弟貴史を呼びにすごい足音を立てて、階段を上がつていった。

ふー、分かつちやいたけど…。やつぱりこの状態はすごいんやな…。
ワシしばらく奴等の玩具になるんやな…。

案の定、恭子が貴史連れてきよつた。

「うお！すげえ」

「
か
わ
い
い
い
！」

かわい……、これほど息子に言われて、気味悪い言葉ってこの世にあるだろうか？

最低也。

こら、そんな胸や脚、嘗め回すように見るな！

何か恥ずかしいやんけ……。

「お父さん、胸触って良い？」

「馬鹿いつてんな」

「触つたら、お前のお小遣い減らすぞ！」

「うえ、それは勘弁…」

とりあえず、格好はこんなんだけど、親の威厳は保っているな。まあなんとかかなりそうだ。とにかくいつも通りやればいいんだよ

「じゃ、お前ら、ワシは自分の部屋行くから」

「もう入ってくんなよ」

俺はまだサーカスの猿でも見るかのような目線を浴び続けていたがそんなもん無視して、少し怒ったような表情を保ちながら、彼らの前威風堂々と横切っていく。後ろから娘や息子の声が聞こえてくる。

「何か怒った横顔もかわいいいな」

「あれがお父さんだなんて信じられないわよね！」

ちっ、どんな顔しても可愛く見えるらしい…。

困ったもんだ。

五条瓦 正和の場合その2

「お父さん、入って良い？」

恭子が部屋を2回ノックしたかと思うと、扉を開け入ってきた。そしてワシの姿を見るや否や、甲高い声で言葉を浴びせかけてくる。

「ちよつとお父さん！」

「なによその格好」

「あ？」

何って、ワシ普通の格好してるやん。

白と青の線が縦に交互に入っただけの短パンに、白いランニングシャツ。

ワシが家にいる時のいつもの格好だ。

「そんな可愛い顔してるのに、何その親父くさいコスチュームは」

「別にいいじゃないか、家にいるだけだし」

ワシは肩肘つきながら横になってTVを見ていたが、あんまり娘が喧しいんで、体を起こし娘の方へ体を向けて胡坐を掻いた。

「はー……」

恭子はその姿を見るなり、深く息を吐き、両目を右手のひらで押さ

えて

呆れたような仕草を見せ付けてくる。

やがて、顔から手を離し、再び面倒臭そうにワシを見て言葉をポツポツ

投げかけてきた。

「あのね……」

「お父さん今どんな姿してるか分かってる？」

「可愛い女の子やろ、そんなん分かってるわ」

「だったら、その容貌に似合う格好しようよ……」

大体何が言いたいのか分かってきたぞ。

要は家の中でも、女もんの服装みにつけて、女らしい格好しろと言いたいわけやな。

恭子は比較的家の中でも、そういうところきつちりしてる方やし。間違っても下着のままうついたりする娘やなかった。

そういうところは、ある意味ワシの教育が行き届いてる証拠や。

「分かった、恭子」

「ならどんな格好しようか」

娘の言葉に理解を示し、前向きな答えを返すワシ。

恭子がワシの言葉を聞いて、歪んだ顔を穏やかなものへと変えていった。

しばらく、鼻を手で覆い隠すようにして、考えられているような素振りが続けていたが、何か思い浮かんだのか、再びワシに視線を向け

て一言呟いた。

「私の部屋きてよ」

恭子は怪しい笑みを浮かべながら、ワシの右手を引っ張り自分の部屋へと

連れて行く。

時折、鼻歌のようなご機嫌な声を発していた。
何か嫌な予感するな…。

ワシは部屋に連れてこられると、恭子が縞々のカラフルな座布団を出してきて

その上に座らされた。忙しそうに押入れの衣装ケースの中をかき回す恭子。

それを横目にワシは一つ大きな欠伸をすると、暇そうに部屋の内部にゆっくり視線を流していった。

フローリングの木の床には、埃やちりがほぼ落ちていない。

白い明るい壁には、額縁が掛けられていて、その中に風景画が固定されていた。

暖色系の絨毯や家具、ベッド、テーブルで纏まっているこの部屋は、ワシから見ても

非常に落ち着いてて過ごしやすい気がした。

ワシは足を崩して、段々体を横へと傾けていくと、絨毯の上に完全に仰向けに寝そべった。

恭子は探し物が中々見つからないのか、探索作業は長期化していた。

……

「うんしょ、うんしょ」

ワシは胸の辺りが何かに締め付けられるような感覚に襲われ曖昧に映るぼやけた物を澄んだものへと変えていく努力をし始める。半分開いた視界で確認できた者は、目線上で眉間に皺を寄せて両手を使って、ワシの胸の辺りで何かを繋ぎとめる作業をしている恭子の姿だった。

ワシは曖昧な意識の中、枯れた声でその恭子に向けて言葉を発した。

「おまえ、なにしてるん…」

その声を耳にすると一連の作業を止め、ワシの顔を驚いた表情を浮かべ一瞥したが何かワシにあやす様な言葉をなげかけながら、さっきより激しく両手を動かし始める。

やがて、ワシの首の後ろから何かを通すと、それを胸のあたりで絡み合わせた。

「はい、できあがり！」

恭子は作業を終えたらしく、額に汗が滴り落ちながらもその表情には満足感のようなものが垣間見える。

ワシはまだ起きたばかりで、体は鉛のように重かったが後ろ手について徐々に体を起こし始めた。

その動作の遅さに業を煮やしてか、完全に体を起こす前に右手を恭子が強く掴み、無理矢理立たせると、そのまま肩に担いで、引きずるようにワシをどこかへと運んでゆく。

「じら〜」

「はいみてみて〜！」

この部屋に備え付けられている大きな鏡台の前に連れてこられ
恭子が両手でワシの両肩を押し上げるようにに支えながら、かろう
じて立たされていた。

ワシは前にある鏡を寝ぼけ眼で見ると

白っぽい服を着た可愛い女の子が立っていた。

もちろんワシなわけだが…。

ん…？

これは、セーラー服！？

「どう？かわいいでしょ？」

「これ私が高校の時に着ていた制服なの！」

「サイズ合うか心配だったけど、ぴったりよ」

やられた。これを着せるつもりで部屋に連れてきたのか……。

ワシが寝ている間に着せ替え人形みたいにして、遊んでいたようだ。

スカートの中を見ると、ワシのあのパンツは剥ぎ取られ

女もののフリルのついたパンツ履いてるし…。

上着の隙間から純白のブラジャーも見える…。

「こら、恭子なんのつもりだ！」

ワシは憤慨して、恭子に怒鳴りつけた。

「うるさいな、せつかく可愛くしてあげたのに」

「あ、そうそう、これから外出るときその格好で出てね」

「何でこの格好やねん」

「いいじゃない、お父さんに合うサイズの服が家にないから」

「それでいいの!」

「それなら、替えもあるしね」

くく、ワシこの格好で外出るのかい。

いい年扱いてこんな格好させられるとは思いませんかったわ。

「後、家着はそこに重ねてある、棉パンと半袖きてね!」

「もちろん下着の替えもあるからね!」

床の上には、既に準備万端に積み上げられたワシの着替え一式が置かれていた。何が何でもこの可愛いものを着せるつもりらしい。

「さーってとお昼ご飯用意してあるから、下いこっか」

「面倒だから、その制服の姿で降りてきてね」

恭子は笑みを浮かべそう言葉を残すと、先に一階へ降りて行った。

「……」

はあ、どうせ台所で貴史と笑いものにすべく、待ち受けてるんだろうな……。

しかし、そうはいかんど、このままあいつ等に良い様に笑われるく

らいなら

外で飯食って来るわい…。

ワシは自室に戻り財布を握ると、踵を浮かせ静かに階段を降りていき
台所にいるあいつ等に気づかれないように音もなく玄関に歩み、王

宮から頂いた革靴を履いて

外へと静かに出て行った。

五条瓦 正和の場合その3

とりあえず、どこかで飯食べないとな。

行き着けのラーメン屋にでもよるか、

ワシは家の前のコンクリートの道路を真直ぐ東へと向かい、タバコ屋の看板を右に曲がると

商店街のバリケードが視界に入ってくる。

ワシは休日に娘も息子もいなくて、一人で家で過ごす時に、昼飯に困ったらこの商店街にある

ラーメン屋「九竜城」によく足を運んでいた。

そこは、ワシの知っている中じゃピカイチのラーメン屋だ。

「ちわ〜」

平日と言うこともあって、店内の様子はまばらだ。

ビジネス街や、都市圏から離れているこの店に、そうそう人が来るわけもなく

近くの大工職人や、近所のおじいさん、おばさん辺りしか店にはやっつてこない。

休日は家族連れで満員になることもあるんだけどな。

何かおかしいな、俺を見る目がいつもと違う。

あ、そっか、今、セーラー服も着てるし、彼らには見知らぬ女子高生にしか見えないわな。

はー、色々面倒くさいな。

「お嬢ちゃん、何にする？」

店主、小和田源五郎が珍しい客に新鮮さを感じたのか、爽やかな目をして、それなりの対応で接客をしてくる。

源五郎とは普段はラーメン食しながら、世間話などを交わす間柄なわけだけど

この姿でいつものように話すわけにも行かないよな。とりあえず、注文だけしとくか。

「えーっと、味噌ラーメンください」

「へい、味噌ラーメンー丁」

勢いのある江戸っ子口調で注文を大きな声で厨房へと投げかけた。それを聞いて、中で忙しく人の姿が行き交い始める。

ここは店主とその家族、彼の奥さん美鈴さん、16歳の息子光栄君、彼の母静江さん

の4人で切り盛りしていた。光栄君は高校生だから平日にいるわけではないんだが、彼もまた夏休みに入っているらしい。

ここの飼い猫の三毛猫秀太が、店内の窓際付近にお腹をだして寝ている。幸せそうだ。

ワシはラーメンが出来る間、横の棚に置かれている新聞を手にして、大きく広げると

スポーツ欄を読み始める。

「お金ここに置いてくよ」

「へい、ありあとあしたー」

客が、2、3人店を出て行く。元々入りがあまりないこの店には既にワシ一人しか残っていないかった。

「へい、おまちー！」

「ありがとう」

テーブルに毛の生えた太い腕が伸びてきたかと思うと、野菜やメンマ、チャーシューが

豪快に盛られた味噌ラーメンが静かに目の前に置かれる。

源五郎はいつになく優しい表情をしていた。

こいつ、可愛い女の子だと態度変わりよる。

まあ仕方ないよな、ワシも同じ立場なら鼻伸ばしているだろうよ。言っちゃなんだが、今のワシの姿はほんとに可愛らしいからな。

厨房の家族は食器を洗っていたが、元々洗う数がそんなにないためか

そのうち静江さんが厨房から繋がる部屋へと引っ込んでいった。

ワシは新聞を片手に、ラーメンを箸でつまみあげると、口の中へ音を立てて

滑り込ませていく。

ふと、カウンター越しに前に視線をやると、源五郎や美鈴さん、光栄君が

少し目を丸くしてワシの方を見ているじゃないか。

何か可笑しいのか？女子高生が新聞片手にラーメンを啜る姿・うん。

イメージしてみると、確かに珍しいかもしれない。いやたぶん変わった部類に入ることは

間違いないだろう。

ま、変わってはいようが、ワシの知った事ではないな、この年になると少々の事では

動じなくなっている。気にせずワシはラーメンを孤高に食べ続けた。

全て食べ終わると、しばらくお腹を摩りながら、店に備え付けられたTVに視線を置いて休憩していた。そんなワシとコミュニケーションを取ろうとも思ったのか
源五郎が声を掛けてくる。

「お嬢ちゃん、ラーメンどうだった？」

「おいしかったよ」

「おじさん、ラーメン作るのうまいね！」

ワシはちょっと遊び半分に源五郎の反応見たくて、持ち上げてみた。

「ハハハ〜！そりゃね〜！もう30年この仕事やってるからね」

案の定顔赤くして照れてやがる。

「お嬢ちゃんは、近くに住んでるのかい？あんまり見かけない顔だね」

どうすっかなあ、またラーメン屋にこの姿で来ることもありそうだし、適当言っとくか。

「はい、近所の叔父さんの所に、夏休み利用して遊びに来てるんです」

「ほほお、そうかそうか、高校生かな？」

「そうですよ」

「じゃあ、うちの光栄と同じだな」

光栄君が親父に名前出されると、なんか照れ臭そうに厨房から顔を
出してきた。

「しかし、美人だね」

「いや、それほど」

「下の名前聞いてもいいかな？」

源ちゃん、そこまで聞いたらあかんやろ、セクハラやで。

しゃーないから、答えてやるけど、今時そんな質問しとつたらあか
んよ。

可愛い名前なんかないかな、最近の子はどんな名前が多いんや
るか。

明美？お水っぽい名前やな、貞子？なんかそんなホラー映画あつた
よな。

ワシの化石のような頭では咄嗟に名前が出てこんな。
適当いったれ！

「知美です」

「知美ちゃんか、可愛い名前だな」

「母さんもそう思うだろ？」

奥でそのやり取りを聞いている妻美鈴さんが、なんだか不機嫌な

顔で奥から

源五郎を睨んでいた。

馬鹿め、若い子にそんなにデレデレしてたら奥さん怒るわ。

それにあまりにも詮索しすぎとるし、客に悪いわな。怒ってるぞどないすんねん。

「あ、ええつと、じゃあ、ゆっくり食べてや〜」

源五郎は目を眇めてワシにそう言つと、罰が悪そうに厨房へと引き上げていった。

何やら奥でも揉めているようだ。

まあよう、叱ってもらいや。

光栄君はカウンターの前で食器を洗いながら、時折、ワシの方をちらちら

見てくる。可愛いし同じ年代やし、気になるんやろうな。ちよつとだけ声掛けてやるか。

「あの、」

ワシが一言発しただけなのに、彼は一瞬体をびくつかせた後、皿を静かに置き

なんかまともに目をみれないと言った感じで、俯いてなにかぼそつと呟いた。

「は、はい」

ワシの姿って相手緊張させるほど美人なんやろうか？

確かに顔も整ってるし、色白で肌も綺麗だし、人形のような綺麗な黒い髪が

肩まですらつと伸びてはいるけど、雰囲気あるんかな？

そんな緊張されたらワシまで緊張するやないか。
なに言おうかな・

「おいくつですか？」

とりあえず、知ってるけど、聞いておくか。

「じゅ、16です」

「私より一つ年上ですね」

「あ、そうなんだ」

「はは、その割には大人びて見えますね」

大人びて見えるのか、まあワシ50歳やし、外見は少女でも、中身はおっさんやしな。

この後の言葉思いつかん。なんか言えよ少年。

「じゃ、じゃあ、僕、そろそろ仕事終りなんで、中に引っ込みますね」

「はい」

光栄君は間が空いたのに怯えてか、そうワシに告げるとどこかぎこちない動きで二束歩行で奥へと消えていった。まあ、なんというか、青臭い匂い漂ってくるなあ。新鮮やけどな。

五条瓦 正和の場合その4

「ただいま」

「お父さん、何処行つてたのよ！」

恭子が目くじら立てて、腰に両手を当て大きな声でワシに言った。

「飯食いに行つてただけだよ」

「家ご飯あるのに」

「ワシの勝手じゃ」

まだ色々言つてたが、それを左から右に聞き流すと階段を大きな足音とともにゆっくり上がっていく。

そして、ぶつきらばうに自室の扉を開け中に入った。

ワシが何しようが勝手じゃ。

ほつとしてほしいもんだ。

大体あいつ等には、ワシの気持ちつてもんが分かつちやあらん。

こんな姿に突然変えられて、一週間暮らすワシの身にもなれつてもんだ。

ふー、さて、何するかな。時間はたつぷりあるけど、使い道が全く思い浮かばん。

休日でさえ、家でゴロゴロするか、TVで野球見るかしかないんだからな。

高校野球でも見るか。ワシはそれを映すchを見つけると、椅子に肩肘ついて

座り、ぼけーっと見始める。

……ピンポーン

誰だ？まあ、子供達が出てくれるだろう。

ワシはそう決め付けると、高校野球に視線を戻した。

突然、誰かが物凄い勢いで階段を駆け上がったくる音が聞こえる。

その勢いは激しく、野球に向っている意識を寸断し

何か嫌な予感を起こさせるほどだ。

何かあったんやろか…？

案の定、ワシの部屋の扉を金槌で釘を打つかのような勢いで、ものすごいノックの音が

部屋の中へ鳴り響く。

「お父さん！！」

「なんだ、貴史か、何かあったのか？」

「母さん来たよ！」

「なに〜！？」

おいおい、どうしよう。

ワシの妻美代子が、訪ねてきたらしい。

元々のワシの姿で会うのなら問題はないんだ。

今の姿で会うことの方が困るんだ。ワシは誰だって話になるわな。

娘の友達にしては年が離れすぎてるし、息子の女友達？もしくは彼女！？

どちらかになるな、でも後7日間のうちに美代子何度来るか分からないし

そんな頻繁に家にやって来る女友達って彼女しかないか。
貴史はワシが考えている事を見透かしたように、薄気味悪い笑みを
浮かべ言った。

「とりあえず、父さん、俺の『彼女』ってことで通そうよ」

「それしかないよ」

ワシはあからさまに嫌な顔をしてただろうな。

顔が引きつっているのが分かるほど、頬の筋肉が震えているんだか
ら。

何でこないな目に会った。

取りあえず観念して、自室を貴史と一緒に出る。

ワシの部屋に遊びに来た女の子が堂々いたら、変だしな。

それに挨拶もしないとか、お里が知れる。

えーっと名前は智子だ、苗字なんにしよ。

貴史の後ろを付いていきながら、苗字に頭を悩ます。

美代子の姿が眼前に現れたかと思うと、貴史がさっそく紹介をし始
めた。

「母さん!」

「どうしたの?」

「こちら、えーっと」

馬鹿め、まだ名前話し合っていないうちに話しかけんな。

貴史が振り向いて、おどおどしながらこちらを見るので、すぐに顔
を近づけ

取りあえず、智子とだけ静かに呟き伝えた。

ま、苗字は頭の回転の速い貴史の事だ、適当言ってくれるだろう。

「俺の彼女の伊集院 智子さん」

「え、あ、初めまして、貴史の母美代子です」

母さんも目を丸くして驚いてるな。

無理もない、貴史が彼女連れてくるなんて、今までなかったもんな。しかも、貴史にはもったいたないくらいの美人だし。

ワシは仕方ないから、貴史の横に並んで、両手を足の付け根付近で綺麗に揃え

深々とお辞儀をし、丁寧に挨拶を交わす。

「私、貴史さんとお付き合いをしています、伊集院智子と申します」

「今日は貴史さんのお誘いで、お邪魔させて頂いています」

「え、あ、あら、そうでしたか、えーっと、ごゆっくりしてくださいね」

慌てとう、慌てとう。今時の子がこんな挨拶するわけないしな。

ちよっと、良家のお嬢様風に仕立ててみた。

ワシ等の方を作り笑顔で、何度か振り返り小さな会釈をし、足元がおぼつかない様子でどこかへ行く美代子。

たぶん非常事態で困惑してて、娘探しとるな。

取りあえず、驚愕もんのこの事実を、誰かと話さないと治まらんやろな。

まあ、彼女とか言っけしもうたけど、貴史にこんなべっぴんさんが

いつまでも彼女でいるはずがないし、別れて来なくなっても不思議に思わないだろうから

暫くそれまで彼女で通しとくか。

ふと、貴史の方に目をやると、なんか浮かれた顔をしていた。

たぶん、あれやな、俺にもこんな可愛い彼女できるんやでみたいなところ

母親に見せ付けて、悦に入ってるんやろな。

哀れというか、はよ、お前も本等の彼女連れて来い。

ワシは貴史がいつまでもにやけて立ち尽くしているので、足を強く踏んでみた。

「いて！」

「何するの？智子ちゃん」

こいつ、調子のり腐ってからに…。

さて、仕方ないから貴史の部屋にでも行くか。
いや、辞めとこ。

こいつの部屋で二人きりとかなんか気色悪いわ。
一階の応接間行こうか。

貴史の袖を引っ張り、応接間へと二人で共に歩む。

来る途中、貴史は「どこ連れて行くんだハニー」とかとぼけた台詞を吐いていたが

財布をちらつかせ、その意味を悟らせ。無口な男にしてやった。
部屋にやってくると、そこには誰もいなかった。

取りあえず、顎で貴史に椅子に座るよう指示する。

ワシはその隣に座った。一応彼女って設定やしな。

たぶん美代子と恭子は台所辺りでワシの事話してるんだろうな。

まあ、恭子は適当に話合わせてくれるだろう。

ああみえて、機転きく子やからな。

しばらくして、応接間に落ち着き払った様子で恭子と美代子が入ってきた。

ワシは軽く会釈をする。

「粗茶です、召し上がれ」

「有難うございます」

柔らかい物腰でそつとワシ達の前に、お茶と茶菓子を置いた。優しい視線をワシに向ける。

久しぶりに見る美代子の顔は前より若返って見えた。母さんも元気そうやな。

4歳年下の美代子。髪は肩に付かないくらい程度に伸ばしソバージュが全体に掛かった落ち着いた美人といえは美人。

ちよつとした、言葉の擦れ違いで、ワシが怒鳴りたててしまったせいで

今別居しているんだが。

正直言つと、別居生活もそろそろ終りにして、帰ってきて欲しいのが本音だ。

それには少しワシが折れないといけないだろうけど、中々な。

「伊集院さんは、どちらで貴史とお知り合いになられたんですか？」

あ、どないしょ、急に言われても、貴史男子校やったな。

ワシが返答に困っているのを恭子が感じ取ったのか、すかさずフオローを入れてくれた。

「確か、氷山女子学院に通ってるんですよね」

「はい」

貴史もフォロ―入れろ、ワシ思い浮かばんぞ。
咄嗟に貴史の太ももを軽くつねる。

「イタ、ああ、えつと、俺が氷山女子学院の学園祭に行ったとき、
彼女と話す機会あつてね」

「そうなんだ」

和やかに微笑みを浮かべる美代子。

その後もぎこちない会話は続いていたが、だんだん間が取れなくな
ってきたので

ワシはここを脱出するために一言切り出す。

「貴史君、暗くなる前に買い物済まさないといけないんだけど」

苦しい、ワシにしては頑張った言い訳。貴史期待に応えろよ。

「あ、そうか、そうだったよね、よし、じゃあ行こうか！」

「じゃ、母さん、俺達ちよつと近くの繁華街に遊びに行ってくる
わ」

「あら、いつてらっしゃい」

「お邪魔しました」

ワシたちは玄関で美代子と恭子に見送られ、外へと放たれた。

五条瓦 正和の場合その5

「父さん、外出たは良いけど、この後どうすんの？」

「まじで、デートでもする？」

「まあ、デートっていうか、飯でも奢ってやるぞ？」

「貴史のおかげで助かったしな」

「やった！」

貴史は左手の人差し指と親指を擦り合わせて乾いた音を鳴らした。最近小遣い少ないからな、喜んでるな。

ワシ達は九竜城がある商店街の方へ二人並んで歩いていく。

あの商店街を越えると、大きな道路に出る。

その横断歩道を越えた先に、ちよつとした大きめのスーパーがあった。

「俺、ハンバーガー食いたいなあ」

「じゃ、スーパーの中のハンバーガーショップ行くか」

「OK」

ワシ達がタバコ屋の看板を右に曲がり、商店街に続く道を歩いていると

前から自転車に乗った少年が近付いてきた。良く見ると、岡持ちを手に持っている。

あれは……光栄君じゃないか……。

どうやら彼もワシに気づいたようだ。

並んで歩くワシたちの全体像を見るかのように
視線を左右に何回か流している。

取りあえず、先制で挨拶しとくか。

「光栄君、出前？」

その声を聞いて右手で自転車のブレーキをかけると
ワシたちの前に停車した。胸に九竜城と黒い刺繍が入った白い服を
羽織っている。

左足に体重をかけ、岡持ちを持ったまま答える。

「はい、
x3丁目に行く途中なんです」

「そうなんだ、頑張ってね」

「はい！」

いやあ、最近女言葉も板についてきたとは言わないけど
それなりに対応できる。やはり母さんや恭子いるからな。
あいつらの言葉使いを真似たらいいだけだし。

光栄君はワシらにお辞儀を一度すると、また自転車をこぎ
後方へ走り抜けていった。

スーパーまでやってくると、ワシらは中にある
ファーストフードのエリアに足を運び、ハンバーガーを買うことに
した。

「貴史なに食べるんだ？」

「俺エビチリバーガー」

えーっと、フィッシュバーガーでも食うかな。

「父さ……いや智子ちゃん、先席座つといて」

「俺持つてくから」

智子ちゃんか、しかし、周り若い子多いし
人の目もあるんだし、父さんって呼ぶほうが変だな。

「わかった、貴史君」

ワシがそう言つてやると、貴史は何か普段見せないような笑顔を浮かべ

親指を立てた。

何浮かれてるんだお前……。

さて、どこに座るかな。二人用の窓際の席が空いてるな。

あそこに座ろう。席までやってくると、深く腰掛けた。

貴史がレジの前で待ちぼうけくらつてるのが見える……………。

何気に周りに視線を巡らすと、若い子達がワシをちらちら見ている。

特に男の視線が矢のように飛んでくるのが、鈍感なワシでも分かった。

またワシ目立ってるな……。何かヒソヒソ男どもで話してる……………。

「可愛いな……」

「萌え……」

聞こえてるぞ、少年達。

萌えてなんだ……？

ちよっと、微妙な空気の中、ワシは居づらかった。

何かあそこの奴等、こっち来そうだぞ……。

ワシは額に汗を掻きながら、体を強張らせていると

貴史がナイスタイミングで、こっちにお盆にハンバーガーを乗せてやってきた。

「お待たせ、智子ちゃん」

「食べて」

貴史がワシの前の席に座った瞬間、周りからため息のような声が漏れた。

彼氏もちだと分かって、落胆しとるな。

ふー、助かった……。貴史に助けられたよ……。

どうでもいいけど、女も大変だな、特に美人は……。

ワシらはハンバーガーを食べ始めた。

貴史はその間、恋人とでも話すように、軽い口調でぺらぺら喋っていたが

面倒くさいんで適当に頷いて、話は右から左へ流しておいた。

やがて、全て食べ終わると、スーパ―を出てどうしようかって話になった。

入口の辺りで二人で話し込む。

「ここで分かれるか」

「智子ちゃん、俺捨てるの〜？」

「ハイ、サイナラ……」

あほらしくなって、貴史のギャグをスルーした。

ここから東に300mほどのところに村川という川があった。

ワシは一人で、そこへ散歩へ行くことにした。

村川は比較的大きな川で、その両側には広い河川敷がある。

そこまで歩いてやってくると、川を跨ぐ橋の右端に佇み

鉄の柵に頭を置いて眼下の風景を見下ろしていた。

川に平行する道路から滑らかな傾斜を伴う草地が、川の手前にある

土の広い道へと繋がっている。

土の道はずーっと先まで続いていた。

その上をジョギングや徒歩で行き交う人々の姿が見える。

滑らかな傾斜には背の低い雑草が伸びていて、一定の間隔で

土の道に降りていく石の細い階段が敷かれていた。

ワシはしばらく、橋の上から見える眼下の光景を眺めていた。

時折どこからか、涼しい風が吹きつけワシの黒い前髪を揺らす。

ふと、傾斜の方に視線を落とすと、どこか見覚えのある人物が

階段に腰掛けている姿が映った。

あれは……。

光栄君じゃないか。

岡持ちを傍らに置いて俯いている。

どうしたんだろ、何か元気ないな……。

ワシはなんとなく、彼のいる方向へ歩を進めていた。

近くまでやってくると、後ろから声を掛けてみることにした。

「……光栄君」

「あ、智子さん」

私の姿を見るなり、慌てた素振りで急に体をこちらへ向けた。
かなり動揺しているように見える。

「どうしたの？こんなところで」

「いや、出前終わったし、特に帰ってもすること無いので……」

「寛いでたんです……」

「そうか」

二人の間に沈黙が走る。

いや、何話して良いか分からんな……。

若い子と話合っわけ無いしな。

取りあえず声かけたものの、どうしようかな……。

なんか言えよ少年。

またワシは彼頼みで応答待ちを決め込む。

「あゝ」

「さっき会いましたよね」

「ああ確かに……」

「智子さんの隣にいたのは彼氏ですか？」

光栄君は下から上目遣いで、ワシを見上げる。

目線が違うから仕方ないけど、これでは失礼だからしゃがんでみる事にした。

それと同時に彼の質問に答える。

「ああ、貴史君か、あれはイトコよ」

「今、私が遊びにきてる家の息子さんよ」

「あ、そうなんですか……」

また沈黙が流れ始める。

川のほうに視線を送ると、野鳥が水辺にゆったりと浮いていた。さーと、どうしようかな……。

これ以上いても仕方ないかな……。

そう思い、ワシが立ち上がるうとした時、彼がまた口を開いた。

「智子さん、一目惚れって信じますか？」

「はい？」

「さあ、そんな人もいるようだけど」

一目惚れね……。。

ワシの場合はあんまり無いな……。

高校生の時、たまたま擦れ違った女の子に、多少気持ち動いたこ

とあつたけど

しばらく経ったら忘れたしな……。――

一目惚れについて物思いに耽っている

彼は更に静かな口調で話し続ける。

「僕、ラーメン屋であなたを初めて見たとき……」

「何か雷に打たれたような衝撃を受けました……」

「あの時あまり話せなかったけど、心臓はドキドキしていたんです」

「その時思いました……」

「これが一目惚れなんだなって」

え？少年、何気にとてつもない事言っていないか？

ワシに一目惚れしたと言ってるのか？

え……？え……？

ワシの回転の遅い頭がその話を分析し始める。

彼は体育座りをしながら顔を埋めた。

足と腕の隙間から見える頬が紅潮しているのが分かる。

時折、腕の上から少し頭を覗かせて、その無垢な視線をワシに投げかけてくる。

少年……、それはまずいんじゃないかい……？

五条瓦 正和の場合終了。

「僕と付き合ってもらえませんか？」

ワシは悩んでいた。

この純粋な少年の気持ちをどうやれば傷つけずに澄むだろうか。
後6日でワシは50のおっさんに戻る予定だ。

そのおっさんの仮初の姿に、一目惚れした光栄君。あまつさえ告白までしてきている。

しかし、ハッピーエンドはまずないはずだ。

ならば今ここで、彼に興味のない事を告げふった形にすれば、最初は傷つくけれど長い人生を渡っているうちに、それは大したことではなく、ほんの一時の淡い恋物語として片付けられるのではないだろうか？

だがちよつと待てよ、そうだ！

アメリカから来てることにすればいいんじゃないか？

地理的な事でなら、その遠さに彼は諦めるかもしれない。

さっそく言ってみよう。

「光栄君、私アメリカのサンフランシスコに住んでいるんだけど」

「後、6日したら帰るの……」

言っちゃまったぞ……どう出るかな……。

「え、そうなんですか」

光栄君の顔が曇った。

やはり、ショックは大きいようだ。

二人の間に1分ほどの沈黙が流れたが、光栄君がまた言葉を口に
する。

「あの……」

「最後に一度だけデートしていただだけませんか？」

「すぐずーずーしいのは分かっています」

「無理にとは言いません、駄目なら諦めます」

光栄君は、両目を瞑り目尻に皺を寄せて、ワシの返答を待ち受け
る。

体育座りの足を組む両腕を、震えながら強く抱き込んでいた。

彼も必死なんだ、清水の舞台から降りる思いでワシに告白したに
違いない。

付き合う事が叶わないのなら、たった一度のデートでも良いと……
それで、彼の気が済むのなら……

「分かりました、6日後空いてますか？」

「え、」

「空いてます」

「緑円北遊園地でデートはどう？」

「はい、それで」

「分かりました、朝10時九竜城に行きますね」

「はい！　お待ちしています」

ワシが先導をして話を矢継ぎ早に進め、6日後、つまりワシが仮初の姿を捨てる日を彼とのデートに選んだ。

デートを終えた後、そのまま王宮に出向くためだ。
日にちがずれば、デート後に彼と出くわす事があるかもしれない。

それは避けたい。

彼の前から、そう、ひと夏の幻想のようにワシは消えるつもりだった。

デート当日……。

ワシはこの5日間平穩無事に暮らしていた。

妻美代子はこの間ワシの家に来る事が、どういっわけか無かったからだ。

ま、多少色々あったけどな。

相変わらず、貴史はワシを外へ連れ出そうとするし、風呂のぞきうとしてきたり

恭子は恭子でワシを着せ替え人形の如く扱い、寝顔に化粧してきたり、まあ玩具だな。

まあ、そんなもんは可愛いもんだ。所詮ワシの子供達のことだからな。

今日も化粧はばっちり。それはまあさつき行ったとおりの事で……問題は服装だな。制服じゃさすがに悪いよな。

「恭子、外行きの女もんの服ないか？」

「お、当等、父さんも女装に目覚めた？」

ワシの珍しい注文に目を丸くする恭子。
興味深深と言った面持だ。

「ちがわい！ ただ今日最後だし、記念に写真屋でこの姿取ってこようと思ってな」

「ふーん、父さんでもそんな殊勝な事考えるんだ」

「まあ、一時とは言え、この姿で生活したんだしな」

口から出任せとは正にこの事。

まあ、これも光栄君のためだ……

不細工な格好をした初恋の彼女を見たくはないだろうしな。

「分かったわ、可愛いワンピース持ってるんだ、花柄の」

「高校の時のだけど、父さんのプロポーションなら着れるはずだよ」

恭子が用意した、首の辺りに花の飾りのようなものがいくつもある
眩いまでの純白のワンピース。白いソフト帽、その出っ張りの付
け根におしゃれな刺繍が

一周して縫いつけられていた。

靴は……王宮に借りてきた革靴でいいか、これ高級そうだしな。

ついでにあの時借りたワンピースも持っていくか。返さないとな。
全ている物をバッグに詰めた。

「ちよっくら行って来るわ」

「いつてらっしゃーい」

この姿で九竜城に行くのも最後だな……。
ワシはいつものようにタバコ屋を曲がり、いつものコースで商店街に向っていた。

なんだか、今日は少しその道のりが、違ったものに見える。
九竜城まで来ると、既に彼は立っていた。
ジーパンに半そで、野球帽。

ワシがお洒落してきた割に、彼は平凡な格好をしていた。
まあ金無いんだろうな……。高校生だしな。

「じゃ行こつ」

「はい！」

なぜか全てをワシが仕切ることになる。
発言も行き先も、ワシ主導。

この辺は性格がそうさせるんだな。
相手に主導権与えるの嫌いだし……

……

遊園地前までやってきた。途中電車で相変わらず視線を浴びせられたりしたが

光栄君が隣にがっちり座ってたおかげで、まあ落ち着いて乗れたかな。

彼はやはり男であって、ワシを守るといふ意志は人一倍あるようだ。

常に周りに警戒しながら、ワシと並んで歩き、安全を確保してくれていた。

「さてと、入場券買ったし中に入りましょう」

この時初めて、主導がワシから彼に切り替わった。

先ほどのナイトぶりが彼の心理を変えたのかもしれない。

「じゃまず〜ジェットコースターいきましょう」

「はい……」

正直ワシは怯えていた。実は高所恐怖症だ。

一度のつて恐怖を覚えこんだワシは、ここ20年全くあれには乗っていなかった。

光栄君の隣の席に座るワシ。

「はい、ベルト締めますよ〜」

従業員がベルトを締め、発車の合図を知らせる音が鳴り響くとその恐怖の乗り物は動き始める。

神様……。

どんどん急な勾配の線路を上がっていく。

そして頂上まで達すると……急落下!!

「ひひひ」

思わず下品な声を出してしまうが、気にする余裕はない。
もう目をつぶって耐える事しか出来なかった。
まだか、まだ終わらないのか？

「智子さん、智子さん！」

「は、はい？」

「もう終わってますよ」

見ると、ワシと彼以外乗っていなかった。

いつの間に終わったんだ？

従業員が苦笑しながらも、早くどいて欲しそうな顔をしていた。

「次はあっち」

「次はこれ」

さすがに若いな、わしは振り回されっぱなしだ。

次から次へと絶叫マシンをハシゴさせられるワシ。

彼はいつの間にか、ワシの手を握って引張っていた。

楽しいんだろうなあ……。ワシは既に疲れていたが……。

「最後観覧車に乗りませんか？」

「うん、どこにでも行くよ」

「はい！」

彼は満面の笑顔で答えた。

観覧車はとても落ち着いて、絶叫マシンとは比べようのないくらい居心地が良かった。

上にかかるほど、見渡せる景色が広がっていく。

彼と向うように座るワシは、疲れていたせいで、目の位置を彼の顔にぼーっと置いたままにしていた。

疲れたなあ……ん？

なぜだか彼は顔を赤くしていて、帽子を深く被り野球帽の先を下げていた。

「智子さん、そんなに見つめないでください」

「照れてしまいます」

うーん、シャイな子だな。ちょっと目が合ってただけで……。

まあそんなもんなのかもな、ワシも昔はそういう時があった気がするな。

「今日は楽しかったです」

「とっても、楽しかった……」

無垢な笑顔を浮かべ、照れ隠しか景色を見ながら話す光栄君。

帽子を内輪がわりにして、顔を煽っていた。

「私も楽しかったよ」

「いい思い出になると思う」

ワシのその言葉を聞き、口を横にひっぱり、彼は精一杯の笑顔を披露した。

ワシ等は地元に戻ってきた、九竜城の前まで来ると彼が口を開いた。

「智子さん、今日は本当に有難う」

「うん」

「アメリカに帰っても、光栄君の事は忘れないよ」

彼は少し俯いていたが、すぐに上を向いてワシを真直ぐ見つめた。

「僕も今日の事、一生忘れません」

「ありがとうございました」

そう彼は言うと、爽やかな笑顔でワシにお辞儀すると、ラーメン屋の中へ消えていった。

彼は最後まで丁寧語で突き通した。

ワシより一つ年上なのに……。

雰囲気がいかり伝わったんだろうな……。

しかし、彼はワシの前ではずっとナイトであり、紛れもなく男の子だった。

素直で実直で、そして自然だった。

ワシも彼を見習わなきゃな……。

「ただいま」

ワシは彼と別れた後、王宮へそのまま行き姿を戻してもらった。

王様はワシのこれまでの経緯を丁寧に聞いてくださり、それを成し遂げた事を快く褒めてくださった。

そして、今、いつもの威厳ある父の姿で我が家へ帰ってきた。

「あ、父さんだ」

「お帰り」

笑顔でその帰りを迎える子供達。

「お帰りお父さん」

「美代子……」

妻美代子も家に来ていた。

多少驚いた。平日の夜の時間帯に来る事は滅多になかったからだ。

どこかいつもとは違い、優しい瞳でワシを見つめていた。

「よし、お前たち、美味しい物買って来たぞ」

「ええ、なにになに」

袋に飛びつき中を拝み見る恭子と貴史。

「うわ、すごい、ケーキだよ、しかも上等な奴、屋のだよ」

「姉ちゃん、奥で食べようぜ！」

喜び勇んで、それを持って二人は台所へ駆けていく。

「母さん、ちよつと話があるんだ」

「はい？」

今なら素直に言える気がする、ワシは今日、光栄君とのデートで何かが変わった。

彼の一途で実直な思いがワシを変えたんだ。

「奥へいこうか？」

END

ゴルフ・トライスキーマーの場合 その1（前書き）

ふとシリアスなの書いてみたくなりました。 短く纏められればと思いますが、どうなるやら。

時間が空いたら、ゆっくり書いていこうと思います。

ゴルフ・トライスキーの場合 その1

久しぶり！

またかるく臣下のものども苛めてみるか

誰にする？

ゴルフ・トライスキー

カウボーイの格好をした美形のおにーさん、魔法と長剣を使い、武術にも精通している。

無法者20代、殺しもする。

20代の美形彼女あり、彼女思い。腕に自信あり、心臓がたまにドキドキする（精神的なもの）。薬常備。

強気、動物には優しい。多少甘いところあり。

なにをさせる？

この世のどこかにある天空城にのりこみ、そこにあるエメラルドの王様を盗んでくる。

期限はなし、彼女人質にとってを命令聞かせる。

こんなもんかー、言ってみよう！

「王宮の奴等め……」

グルフはバーボンを食らいながら、薄暗い石壁が覆う自室で愚痴を零していた。

四角い窓から見える三日月がグルフを嘲笑うかのように、天空から一際明るい光を放ちグルフを見下ろしていた。

「レソシア……」

~~~~~

グルフの最愛の女性レソシア。

燃えるような赤い髪が肩まで伸びた、快活で美形の女性。

グルフは彼女を何よりも大事にしていた。町の真ん中で心臓が苦しくなり倒れていたグルフに、優しく慈悲深い表情を向けて、親身に介抱してくれた女。

グルフの容貌はとても近寄り難く、町の者は彼が倒れていても、見てみぬ振りをして通り過ぎていくだけなのに、彼女はグルフに声を掛け、肩を貸し、自宅にまで連れて行ってベッドを貸し与えた。

そんな彼女といつしか、恋に堕ち、同棲生活まで始めた矢先の事件。

突然、王宮の宮廷魔道師数人が家に踏み入ってきた。

グルフは最初に幾多の魔法を浴びせられ、地に伏す。

その間にも連れて行かれる彼女。

悲鳴にも近い自分と呼ぶ声と彼女の後姿が、最後に目に焼きついていった。

魔道師達はそんなグルフを魔法で押さえつけながら、彼にこう言った。

「彼女を助けたければ、この世界のどこかにある、天空城に眠るエメラルドの王様、『エンジェルキラー』を奪って王宮にもってこい、そうすれば彼女は返してやろう。しかし王宮に牙を向いたり、その役目を果たさない場合、彼女は死ぬ事になる、よく覚えておくんだな」

グルフの髪の毛を引っ張り上げ、魔道師は自分の顔の辺りまで持ってきて、一方的に彼にそう告げた。

彼はそれに唾を吐いて返した。

~~~~~

「むう……」

グルフは低く唸ると、バーボンの瓶を壁に投げつけた。

粉々に飛び散る破片。

それに驚いたネズミ達が壁の端に出来た、小さな穴から一斉に逃げていく。

酔いどれ、ふらふらとした体を椅子から持ち上げると、グルフは立ち上がった。

棚に置いてあるアーミーバッグに、手榴弾を詰め込み、右肩に皮のベルトで固定された鞘に、地面に無造作に転がっていた長剣を差し込んだ。

腰に巻かれたベルトにも大きな銃の柄が覗いている。

薄緑のチョッキの裏にテーブルに置かれていた小ナイフを次々と差ししていく。

そこまでの作業を終えたグルフは、バッグを左肩に担ぎ、木の扉を開けて宵闇の中へと消えていく。

#

一片の光も差さない荒野を、月明かりだけを頼りに馬で移動する
グルフ。

向かう先はこの辺では大きい方の部類に入る城下街、ソランシア。
ここでグルフは天空城の情報を集めるつもりだ。
順調に馬はそちらへ向っているはずだった。

しかし……

「おい、そのカウボーイの兄ちゃん、止まれ！」

見ると、5つの黒い影が周りを取り囲んでいた。

グルフはその影に視線を巡らせると、左右に首を振りながらため
息をつく。

この手の山賊どもには、嫌気がさしていた。

散々グルフは似たようなのに襲われていて、返り討ちにしてきて
いた。

この辺のそういう輩には、既にグルフの強さが伝わっていて、も
う襲ってくる奴等はモグリか、流れ者の山賊くらいだ。

取りあえず、暗がりのせいで、自分の事が見えてないのならば、

「俺の名はグルフ、この名を知るものあらば、一目散に逃げる事だ
な、今のうちなら追ってまで殺す事はしない」

グルフが山賊達に大きな声で言い放つと、せせら笑う声とその場
で足踏む音、鞘と剣が擦れる音が賑やかに奏でられる。

「グルフだかなんだか知らないが、さっさと置くもの置いて、平謝
りするした方が身のためだぜ」

「ふん、やはり流れ者か、なら……死ぬしかないようだな」

グルフの言葉を聞いた山賊どもが、笑いながらも殺気を漂わせる。円状に彼を囲むと、鞘から剣を一斉に抜いた。

「馬鹿な兄ちゃんだ」

赤い眼帯を右目につけた男が言った。

月の光に反射して赤く光るルビーが埋め込まれた眼帯を薄っすら捉える。

しかし、僅かな光しか差さないこの場所で、闇で取り得た情報はそれだけだ。

後は数人の黒い影と、金属音、男の汗臭い匂いのみ。砂を靴の硬い底が擦る音が聞こえてくる。

次の瞬間、四方から男達が襲ってきた。

「死ねや……！」

その粗暴な声が間近まで迫る前に、上空高く舞うグルフ。

宙で体を捻らせ、下を見下ろすと影の配置を掴む。

そして、チョッキに差されたナイフを重ねるようにして、右手に集めると上空で体を回転させた反動で、下にいる黒い影に投げつける。

肉に鋭いものが刺さる音が、刹那の瞬間にほぼ同時に呻き声と共に聞こえてくる。

この時、グルフは違和感を頭の中で覚える。

おかしい……一人逃れたか？

地に着地すると、長剣の鞘に手を掛け辺りに警戒した視線を流す。耳に神経を集中させるグルフ。

しかし、布がはためく様な微かな音を捉えると、横っ飛びに地を蹴りその場を離脱する。

彼がいた場所に上から、剣が突きたてられる。

グルフはたたらを踏みながらも、そっちに体を向けると、赤い眼帯を間近に見る。

「終わりだ……」

その声がしたのとほぼ同時に、鋭いものの先が腹に突き当てられる。

ガキーン！

赤い眼帯の男が突き出した短剣は、確かにグラフに刺さるはずだった。

だが、腕に伝わるはずだった肉を貫く感触は、硬い金属を擦る感覚が取って代わり、逆に、背中に鋭利なもので突き刺される痛みが走った。

「終わり？ お前がな」

呻きを上げながら、その場に崩れ落ちる赤い眼帯の男。

右手に持つナイフが、雲が流れて月が顔を出すと、鈍い光を発している。

その先に滑る赤い血。

倒れこんだ男を見据えながら、周りを見渡すグルフ。

他の山賊達は完全に息絶えているようだ。

足元に倒れる赤い眼帯の男に視線を戻すと、まだ息があった。

「殺せ……」

その男は体を震わせながら顔を上げると、そう呟いた。

「ああ、殺せだと？ 俺に命令するんじゃないね」

ゴルフがぶつきらばうに男に言うと、

「ふ、分かった、このまま野垂れ死ぬよ……」

眼帯の男はそう低く声を漏らし、頭を地につけ動かなくなった。ゴルフは剣をポケットから取り出した布で拭うと、一呼吸置いた。その男から金目のものを奪おうと、体を屈ませ、ズボンのポケットに手を入れると何か入っていたので、中からそれを取り出した。

「ふーん、いい財布持つてるじゃないか、山賊にはもったいねえ、ん？」

折りたたまれた財布の中身を覗いたゴルフの目が留まる。

金髪の女性の写真がビニールの子袋に入れられていた。

その写真を目を細めて最初は眺めていたが、すぐに折りたたんでポケットに入れた。

そして男に視線を降ろすと、その背中に右手の平を当てる。

まだ心臓は動いているようだ。

顔をしかめて、一度舌打ちをするゴルフ。

何を思ったか、男の傷口にある服の布をナイフで切り取り、傷口を顕にした。

「貸しだぜ」

なにか怪しげな言葉を口ずさむ。

すると、赤い炎が右手に宿ったかと思うと、ナイフの先をその炎で熱し、赤くなったその先を男の傷口に当てて焼いていく。

小さく呻く赤い眼帯の男。

一通り傷口を焼き終わると、男を馬に放り投げ自分も一緒に飛び乗った。

馬はその突然の重さで嘶くと、グルフが馬の手綱を握り、舵を取り馬を走らせた。

砂煙が漂う荒野を、蹄鉄が砂を叩く重い音が響き渡る。

ゴルフ・トライスキーマの場合 その2

「うう……」

眼帯の男は目に映る瞼の明るさに、顔をしかめる。

鼻に出来る皺3本がちようど小という字を描いていた。

夢心地から抜け出そうと、意識の歩を外へ、瞼を開けるのに比例して進めていく。

半分くらい開いた視界に映った木造の天井。

口の中はからからだ。

手から背中にかけて密着する白い清潔な布。

布の間に視線を這わせると、包帯が幾重にも巻かれていた。

俺は死んだはずじゃ……

眼帯男は、かぶさる白い布を剥ぎ取り、起き上がる事を試みた。しかし、背中に走る鋭い痛みを起点に体中の筋肉を硬直させる。

……どうやら、生きているようだ、

自分の生を痛みで知った彼は、起き上がれない事もあって、無理をせずその場で寛ぐことに決めた。

この後どうなるかと、一回死んだ身と思えば　と開き直って意識を繋ぎとめながら、穏やかな呼吸を続けていた。

不意に扉が開く音が静寂を破った。

荒々しく無造作なのぶの回転と、扉が外へ弾かれる音。

「よお、目覚めましたか？」

ゴルフは陽気に眼帯男に声をかけた。

「……………」

「まだ寝てるのかよ」

眼帯男が目を瞑ったまま返事がないので、寝ていると判断すると、一転して訝しげな表情を浮べ、舌打ちを打った。

眼帯男は悩んでいた。

このまま目を開けて、ゴルフと会話をするのが苦痛だった。

敗者である自分が、みつともなかった。

腕に自信があつた眼帯男にとって、複数で襲つていながら負けた屈辱は計り知れないものがある。

だが、元々山賊である彼にとって、それは大した理由ではなかった。

山賊なぞ、プライドを持つに値する人間ではないと自覚していたから。

そんなものはすぐにゴミ箱に叩き込めた。

ただ単に、話すのが苦痛なだけだった。

彼は人見知りで口下手だった、理由はそれだけだ。

ゴルフが部屋を去るのを待っていた。

だが、中々ゴルフは出て行こうとしない。

そのうち尻が痒くなってきた。

眼帯男は仕方なしに、ゆっくり手を尻に持っていた。

気づかれないように本等にゆっくりと

「なんだよ、起きてるんじゃないか」

ゴルフは視界の端のほんの少しの変化を、見落とさなかった。

僅かに掛け布団が震えたのを感じ取ったようだ。

眼帯男は観念したのか、大きく息を吐いた。

「お前幸運だよ、女の写真挟んで置いてよかったな」

ゴルフは気さくに彼に話しかけた。

本当は眼帯男を殺すつもりだった。

しかし、眼帯男の財布に女の写真が入っていたことで、それを止めることにした。

殺す基準というかゴルフのポリシーみたいなものに、財布に女の写真を入れている者は殺さないというものがあった。

それを聞いた眼帯男が、鼻で音が聞こえるように息を漏らした。笑ったのだ。嘲笑とでもいうべきか。

ゴルフの甘さに、滑稽さに、心底笑ったのだ。

もう笑うだけじゃ済まされなかった。

無口だが、押し込めている言葉を黙れるほど、彼は成熟していなかった。

「甘ちゃんが……」

低音で囁かれた眼帯男の言葉は、ゴルフの耳にしっかり届いていた。

ゴルフが口に当てていた葉巻を、灰皿に押し付けると、カツカツ音を言わせながら、眼帯男が眠るベッドに歩み寄る。

「もう一度言ってみろ！」

眼帯男の胸元に腰のベルトから抜いた、ごつい銃の先を向けてすごんだ。

「……………」

この緊迫した場面でも、無視を決め込む眼帯男。
険しい顔で彼を見下ろしていたゴルフが、銃をまたベルトに差すと、両手を頭の辺りに放り投げ、窓際により外に視線を向けた。

「お前さ、今まで良く生きてこれたな」

ゴルフは皮肉を込めて眼帯男に言った。

「……………」

眼帯男はそれさえも左から右へと流して押し黙っていた。

#

「ゴルフ〜〜！！」

突然部屋の扉が勢い良く開け広げられた。

女の声だ。しかも若い女。

眼帯男の体が強張る。

こいつ女連れかよ。

彼は女に免疫がなかった。

無口な上に苦手とする若い女まで部屋に入ってきた。

柄にもなく緊張してしまっていた。

体に冷たい汗を掻き体中の筋肉を強張らせるが、すぐに激痛が走り弛緩させた。

思わず、ため息が漏れる。

「なんだよ、テンロン騒がしいな」

「そんな言い方ないでしょ、散々ただ働きしてるんだからさ」

ゴルフは慣れた様子で女と淡々と会話を交わしていた。

「で、どうしたよ、なんか会ったんだろ？」

「あ、そーそー、情報集めてきたよ」

眼帯男は目を細めて、テンロンを一瞥した。

緑の短い髪がもじやもじやと外に跳ねていて、赤い短パンに、黄色のシャツ。

大きな黒い瞳に、人懐っこそうに映る八重歯が口元から見え隠れしている。

「黄金の巨人知ってるでしょ？」

「ん？ ああ、天まで届こうかっていう木偶の坊の事だろ？」

「そう、その木偶だよ、そいつについていけば、天空城の場所分かるってさ」

「ほお」

眼帯男が瞼をピクリと動かした。

実は彼もその存在をしっていた。

思わず、耳を欹てていた。

ゴルフは顎髭を摩りながら、何かを考えている素振りを見せる。

その間にテンロンはそーっと、踵を浮かせ音を立てずに眼帯男に近付き、

「わっ！」

大きな声を不意をついたつもりで眼帯男にかけた。
だが、眼帯男はびっくりとも反応を見せなかった。

「なにこいつ、つまない奴 それなら」

テンロンは人差し指を立てると、その先を男に軽くだが、連続して突き出し体に触れまくった。

突付かれまくる眼帯男。

その衝撃が背中にまで届き、痛みが絶え間なく体に走っていたが、我慢に我慢を重ねてそれに耐えている。

そのうち、飽きてやめるだろう。

眼帯男はそう高を括っていた。

「まだまだまだ」

その考えは少し甘かったようだ。

まだ突付いてきていた。しかもさっきより早く、強く。

眼帯男の堪忍袋が膨れ上がっていく。

その薄幕が限界を超えて、不意に弾けてしまった。

「この尼……人が黙ってりやふざけんなよ……」

眼帯男は痛覚を怒りが凌駕したのか、痛みを気にせず勢い良く半身を起こした。

だが、この場面でも顔を平静に保ったままだ。

手を伸ばし、テンロンの胸倉を掴んだつもりだった。

だが、手に伝わる感触が何かおかしい。

「ねね、手みてごらん」

テンロンがきょとんとした目を、自分の胸元に向けて言った。
彼は素直に手に視線を落とした。

これは

動揺は走ったが、意思の力で表情をなんとか押さえ込み、女に視線を戻す。

能面のような波立つ事がない顔を向けているつもりだったが、
だが、表情を保ちきれていなかったようだ。
初めて見せる鼻を伸ばした崩れた笑み。

「私はいいんだけどさ、この場合男は謝るべきじゃないの？」

「す、すまん」

謝ることで、平坦な顔に自然と戻る。

テンロンはそれを聞くと、微笑んだがすぐに胸元に視線を降ろして、

「それでね、すぐに離すべきだと思うんだ、ゴルフに言わせるとセクハラって行為らしいから」

テンロンは淡々と顔を赤らめることもなしに、冷静に言葉を紡ぐ。
まだ、眼帯男は胸を掴んだままだった。
女の反応に驚いて、呆けていたからだ。

ゴルフは二人が会話をしだした時から、その様子を黙って眺めていた。

テンロンの胸を掴んだ辺りまでは、平常心でみていた。
すぐに間違いに気づき手を離すと思っていたからだ。

しかし眼帯男がその手を中々離さない事に、だんだん怒りがこみ上げてくると、

「てめえ、すぐ離せよ！」

大きな声で怒鳴り、凄い形相で眼帯男の方に駆けだした。

その勢いを保ってジャンプすると、靴の裏を眼帯男に向けてきた。疾風と化した勢いがついた蹴りが、眼帯男に迫る。

その渾身の蹴りを、ひょいと後ろに退いて交わす。

この時やっとテンロンの胸から手を離した。

テンロンがすごい！と感嘆の声をあげて、口笛を吹いた。

蹴りを交わされたゴルフは、バランスを崩して壁に激突し後ろに弾かれ、尻餅について倒れこんだ。

「この野郎、避けやがって、イテテ」

テンロンがゴルフの無様の姿をみて指差し、大笑いしてたが、急に興味の方向が眼帯男に移ったのか、視線を向けると、無邪気な笑みを浮かべた。

「私はテンロン、聞いたからしってるよね、あなたはなんていうの？」

眼帯男は戸惑いを隠せない。

さっき胸を触り放題してしまった。

故意ではないにしろ、女がそんな事をされた男に、平然と接して名前まで聞いてくる。

ついさっきも、普通に自分と接していたし 眼帯男はこの女の思考回路がまるで理解できなかったが、名前を隠す必要も無いかと考え呟く。

「ジスパ―……」

「ジスパ―って言うのか！ うんうん、ジスパ―ってかんじだよね」

どういう感じだとジスパ―は思う。

「よろしくね！」

懐っこい表情で、ジスパ―に手を差し出し握手を求めるテンロン。

ジスパ―は、ほんの気まぐれで右手を差しだした。

テンロンがきゅっとその手を強く握りこんだ。

小さな白い手。

思わず、顔を赤くしてしまった。

ジスパ―は、外に感情を漏らす事をあまりしない。

顔を赤くしたのも、ここ3年ほど無いことだ。

その手が繋がる下で、這い寄ってきたゴルフが怪訝な表情を浮かべ見上げていた。

「お前等、仲良さそうだな」

ゴルフはどこか嫉妬にも似た感情がこみ上げていたが、レソシアの事を思い出し、何考えてるんだよ！ と心の中で自分を戒めた。

ゴルフ・トライスキーの場合 その3

「さて、出ようか」

ゴルフはテンロンに顔を向けて言った。

まだベッドに横になっている、ジスパーを横目に二人は部屋を出ていこうとすると、

「ちょっと待て……」

ジスパーが初めて自発的に、ゴルフ達に声をかけてきた。

その声を聞いて、ゴルフとその隣のテンロンが立ち止まり、一斉にジスパーに目を向けた。

ゴルフは何か思い当たって、顔を少し上に向けると、ジスパーから扉に視線を戻し、淡々と言葉を連ね始める。

「宿代なら心配するな、ここのオーナーとは古い付き合いでな、俺の知り合いと言っておいたから、傷がいえるまで、好きなだけいれ
ばいい」

そこまで言い終えると、テンロンの肩を後ろから押しながら扉に向って歩き始める。

テンロンは肩を押されながらも、ジスパーへきよとした瞳を何回か向けていた。

「違う……その事じゃない……」

「あん？ まだ他にあんのか？ 金か？ しゃーねーな」

ゴルフは呆れた表情を浮かべ大きく息を吐いた。そして、ジスパ
ーと仲間の山賊から奪い取った金の一部をポケットから取り出し、
部屋の隅にある古びた木の台に置いていく。

銀色のコインを丁寧にな枚重ねて置くと、ジスパーに振り向かず
手を上げて、

「あばよ」

と、扉に手を掛けるが、それとほぼ同時にジスパーが大きな声を
放つ。

「待て！」

ゴルフはここまでしてまだ何かあるのか？ と思いながらも、ジ
スパーに体を完全に向けると、外へ向けられていた気持ちを抑え、
どつしり構えて話を聞いてやる事にした。

無口な男がここまで声を荒げるには、それ相応の訳があるのだと
ゴルフは思ったからだ。

「お前たち……天空城探してるんだろ？」

「そうだよ、良く知ってるね」

「馬鹿、さっき話してただろ」

「そっか、ゴルフは頭いいね」

「だから、そういう問題じゃ……第一お前は、」

テンロンが間の抜けた事を言ったので、目を細めてゴルフが言葉

を挟んだ。

それに対して更に気が抜ける発言を返すので、二人はジスパーを蚊帳の外に置いて、可笑しい言葉のやり取りを続けていた。

「だから……………聞けよ」

騒がしい二人の傍らで、ぼそぼそとジスパーは呟くものの、二人に声は届かない。

ジスパーは考えていた。どうやればこの間抜けな奴等に、余り多く語らずに、自分の意図を伝えられるのか。

二人の騒がしい会話の乱れる中、首を傾げながらいい案を思い浮かべる。

そして、何か思いついたようで、少し自信ありげだが、飽くまでポーカーフェイスを保ちながら、二人の方に体を向けて、

「天空城は俺の家だ……………」

驚愕の事実を短く語った。一瞬で部屋の喧騒が静かになったかと思つと、二人が会話していたそのままのポーズで口を開けたまま、ジスパーの方へゆっくり首を回して、無機質な表情を向けた。

「お前今なんて言つた？」

「だから……………あれは俺の家だ」

ジスパーはベッドから足を下ろすと、胸元で腕を組んで目を閉じたまま、同じ言葉を繰り返した。

微妙な雰囲気部屋を包み、誰も言葉を発しないまま時は過ぎていく。

ゴルフが口を開けたまま可笑しい顔を晒していたが、急に低く笑

い出すと、つかつかとジスパーに歩み寄る。

間近までやってくると、ゴルフはジスパーの後ろ頭をいきなり叩いて、

「嘘は泥棒の始まりだぞ！ それにもうちよつとつくならましな嘘があるだろ、センスねーなー」

と言つてからは、抑えていた笑い声を大きなものに変えて、ジスパーの背中を何回も揺さぶった。

「天空城がお前の家だつて、アハハハ！ 笑わすなよガハハハ！………う……が」

ゴルフは笑い出すと止まらなかった。しかし、余り笑いすぎると彼の持病ともいうべきものが外に現れる。

笑う事を突然、何かが喉につつかえたように止めると、表情を一変させて神妙な面持で、胸を押さえたまま丸椅子によたよたと腰掛ける。

「苦しい……テンロン、水くれ……」

「ああ……分かった！」

テンロンは急いで部屋のテーブルに置いてある水の入ったボトルを手にとり、それをゴルフに手渡す。心配そうにゴルフの様子を見つめるテンロン。

ゴルフはボトルの蓋を震える指でねじり開けると、チョッキのポケットから何かの錠剤を取り出しそれを口に放り込んだあと、ボトルの水を勢い良く口に流し込んだ。

「カハッ！ うう……糞、てめえが笑わすから、死ぬかと思ったじ

「やねーか」

声を低く濁らせ、ゴルフが訝しげな目をジスパーに向けて言った。苦しそうなゴルフの後ろに回り、テンロンが背中をさすっている。

ジスパーはその様子を目を細めながら、観察していた。

「ゴルフはね、心臓が悪いわけじゃないんだけど、神経がたかぶりやすくて、動悸が激しくなってドキドキがとまらなくなる時があるの」

ゴルフの背中を心配気に摩りながら、ジスパーに顔を向けて今の状況を説明すると、

「余計な事いつてんじゃねー！　グフ……駄目だ、ちょっと俺も寝るわ」

ゴルフはテンロンに怒鳴るものの、その影響で更に神経がたかぶったのか、苦しそうに顔を歪めると、自分のベッドに歩み、靴を乱雑に脱いで力なく仰向けに横たわった。

#

ゴルフは横たわるものの眠りに入ってはいなかった。薬が効いて神経の高ぶりが治まるのを、神に祈るような気持ちで待っていた。

1時間くらい経っただろうか、ゴルフの表情に安らぎのようなものが浮んでくると、半身を起こしベッドに置いたボトルの

水を喉を鳴らし飲み干すと、一度大きく息を吐いた。

「はぁ、死ぬかと思ったぜ……もう馬鹿笑いは止めとこ……」

力なく弱弱しい声で語るグルフは、さっきまでとは別人のようだ。その様子を見て、テンロンは多少安心したのか、硬い表情を緩めて、安堵の息を漏らした。

「大変だな……」

ジスパーは気まぐれに、哀れみのような言葉をグルフに零した。

「ち……、で、さっきの事は本当なのか？」

グルフは軽く舌打ちをしたが、もう気力が残っていない様子で、ジスパーのさっきの話に戻した。

「うむ、俺の家だった……というべきかな」

語尾をそれとなく過去形に戻すと、ジスパーの目にどことなく影のようなものが暗く差しこむ。

沈黙が長引き始めると、テンロンがその先を促すように問いかける。

「ジスパー、何があったの？」

ジスパーはテンロンに細い目で一瞥してから、太ももの辺りで手を握りこむと、静かに低い声で語り始めた。

ゴルフ・トライスキーの場合 その4

「まあ……簡単に言うとな……」

ジスパーはベッドから立ち上がると、ゴルフが金貨を重ねた台に向って歩き始めた。

前まで来ると、コインを一枚掴み取って、手の平におきゴルフたちに向き直る。手の平のコインを二人に近付けて見せた後、右手の人差し指と親指で摘んで器用に弾いて宙高く飛ばした。そして、回転しながら落ちてくるコインを、目にも留まらぬ速さで両手を掠めてどちらかで掴み、両拳をゴルフ達に突き出した。

「さあ、どっちにコインが入ってる？ これ当てたら、教えてやるぜ」

ゴルフは眉間に皺を寄せると、深く息をついて、面倒くさそうにジスパーの右拳を指差した。ジスパーは薄笑いを浮かべると、小さく正解と呟いた。

ゴルフはそれに右手指を弾いて小さく喜ぶが、ふと我に変えると何やってるんだ？ 俺々と自己嫌悪を軽く表情に現し、ジスパーを睨んだ。

テンロンは左手だと思っていたので、目を眇めて悔しがっていた。

「じゃあ話そう、簡単に言うとな、俺は一流の盗賊を目指すと親に言った、そしたら、勘当されてあの家を追い出された、それだけの事だ……」

さつきからジスパーは得意な様子でいつになく軽い調子で喋っていたが、勿体つけた話がこの程度かとゴルフは内心呆れると、踵を

返して面倒くさそうに口を開く。

「じゃあな、小僧、馬鹿ばかりやってないで、母ちゃんとこ帰るな」

「おい、待てよ！ だからよ、俺連れて行けば、場所も宝石の保管場所も、それを守るトラップも分かるってよ」

「しるか！」

ゴルフは怪訝な表情でテンロンの右手を引っ張りながら、扉へ歩み強く開け広げると、ジスパーを置き去りにして、早足で部屋の外の廊下に出て行った。その素早いゴルフの行動に気後れしながらも、ベッドの横にある自分の上着を引っつかむと、ゴルフたちに走って追いつき、自分を連れて行く利点を熱く語る。しかしゴルフは訝しげな顔で手の平をジスパーに乱雑に振って、すたすたと歩いていく。

#

街中の大通りを出口へ向って歩く二人に、ジスパーは少し後ろからついて歩いていた。

ジスパーは普段は無口でポーカーフェイスだが、その外見よりは中身はずっと子供っぽく、さっきのように、一旦箍が外れると調子に乗って口調が軽くなるところがあった。

一旦相手に与えた印象は覆りにくく、今更、最初の印象に戻せる訳も無く、ジスパーは開き直って、後ろで軽口を永延と叩いていた。

「だからよ、俺を仲間に入れろよ、絶対役に立つからさ」

「ふん、どうだか」

さつき、ゴルフはジスパーに辛辣に興味ないような口振りで言ったが、ジスパーの情報や元々彼の家である事を考慮に入れると、案内役としては絶好の相手なので連れて行っても良かった。しかし、何故かジスパーに素直に連れて行くことを告げる気にはならなかった。

どこか世の中舐め腐っているようなジスパーの態度が気に入らなかった。

「頼むよ、連れて行ってくれよ」

ジスパーがここまでゴルフに、自分を連れて行くことを求めるには訳があった。

それは単純な理由だが、彼にとっては重要な事だった。

「ジスパー、連れて行ってあげようよゴルフ！ ほらこんなに来たがつてるんだし」

テンロンがジスパーに振り向くと、顔を赤らめてジスパーは薄笑いを浮かべた。

「しゃーなーテンロンがそこまで言うのなら、連れて行ってもいいが……」

「が？」

「一つ条件がある、ジスパーのお守りはテンロンがやるんだ」

「いいよ、良かったね、ジスパー」

ゴルフがテンロンの言葉に仕方なく折れると、テンロンは笑顔でジスパーに左手を差し出した。

お守りとか言われて、ジスパーの表情が強張るも、テンロンから差し出された手を拒むつもりもないらしく、

「テンロン、俺頑張るから……」

多少顔を赤くしながらも、ポーカーフェイスを保って、テンロンの顎の辺りを見つめて言った。目を直視するには照れ臭いものがあった。

「うん、頑張つてね！」

テンロンはそう言って、ジスパーに無邪気に微笑んだ。

#

街の出口まで来ると、ゴルフは地図を見ながら目的地を確かめていた。

テンロンが集めてきた街の住人の話から、黄金の巨人はここから東のサルスタリア地方を今彷徨っているという情報を掴んでいた。

「サルスタリアか、ここから南南東へ300kmだな」

岩地がどこまでも続き、サボテンが諸所に生えている。そんな殺風景な荒野にゴルフが足を2歩3歩と足を踏み入れると、テンロン

達も後を付いていくが、突然ゴルフは足を止めた。

「さてと、三人か、どうすっかな」

「どうするもなにも、乗り物がなくて、どこ行くんだよ」

ジスパーは街を出口に向かう時、出口に馬車か何かがあるものと信じていたが、それらしきものの姿がまるで目に映らない。それを不審に思い声に出して聞いてみた。

そう言われてゴルフは目を細めて、ジスパーに訝しげな目を向けたが、少し間を置いてから、にやっと口元を綻ばせてテンロンを見る。

「テンロン、この馬鹿にお前の能力みせてやりな」

「いいけど、何にする?」

テンロンはゴルフに言われてきよとした目を向けて言った。

「そうだなあ……」

顎髭を右手で摩りながら、何かを考えている様子のゴルフ。それまでの二人のやり取りを見て、ジスパーは会話の意味が理解できずに、呆けた顔で二人を観察していた。

「やはり旅と言えば、地上がいいな」

「じゃあ、三人いるし、いつものでどう?」

「うむ、あれならでかいし、三人乗れるな、それ頼むわ」

「OK！」

しばらく良く分からないやり取りが続いていたが、二人の意見が一致した。

テンロンはその場で四つん這いになると、急に体を小刻みに振るわせ始めた。

「なんだ？」

「ふふふ……」

テンロンの様子に動揺を隠せずにジスパーは目を丸くして呟くと、その隣のゴルフが不敵な笑みを浮かべていた。

その間にもテンロンの体が白く発光して、その姿が大きく変化させていく。

「な……眩し……」

最後により大きな白い閃光を方々に放つと、ゴルフが目には右手を翳して激しい光が目には直射するのを遮った。ジスパーは諸にその強烈な発光を目に受けて、両手の平を苦しげに瞼に押さえつけた。

「はい、どうぞ、乗っていいよ〜」

テンロンの快活な声が荒野に響いた。

「じゃ、俺から、よいしょっと」

ゴルフの声がジスパーの耳に届く。しかしまだ目が開けられない

でいた。

薄目をなんとか開けるも、視界に入るものがまだ黒ずんで見えて、目が慣れていない。

しかし、だんだん正常な視力が戻り始めて、徐々にだが確実に視界がクリアになっていく。

そして輪郭がしつかりしてきた中で目に捉えたものに、ジスパーは体をよるめかせ驚嘆の声を上げた。

「なんだ、このでけえ白い角の生えた馬は？」

「ん？ お前しらねーのか？」

「ユニコーンだよん」

大きな純白の馬というには、あまりに神々しく、その大きな頭から立派な大きな三角錐の形をした角が斜め上に伸び、その周りから長い首にかけて、白い鬣たてがみが猛々しく靡いていた。

そのユニコーンの姿にだけなら、ジスパーもそれほど驚く事は無かったかもしれない。だが、ユニコーンが人間の言葉を発した。それもテンロンと同じ声をしている。ジスパーは混乱していた。

「テンロンはな、俺が辺境の地イスパイアで見つけた、世にも稀な変体動物ラズンの生き残りだ」

「そうなのだよ、フフフ」

テンロンはそう言うと言と鼻息を強く吹いて、大きな頭をもたげて嘶きの声を上げた。ジスパーは目を大きく見開きがに股で、その姿をしばらく放心状態で眺めていた。

ゴルフ・トライスキーの場合 その5

ユニコーンとなったテンロンは地鳴りのような足音を立てて、サルスタリア地方へ向っていった。その上に跨るといよりは、乗っかっている二人。大きな背中では比較的平らで安定していて、多少揺れても、すぐに純白の体毛を掴めば振り落とされる事は無かった。

ジスパーはゴルフに背を向けて座っている。

「ジスパーよ、お前なんで盗賊になんぞなりたかつたんだよ？」

前方から吹き付ける砂塵の混じった風に目を細めながら、ゴルフはジスパーに問いかけた。

ジスパーは胡坐を掻いて、左手で握ったナイフを水平に顔近くに持ってきて、刀身の輝きを確かめるように目を凝らしていた。ゴルフの問いかけは耳に届いていた。しかし、少し前にその話をしてゴルフに小馬鹿にされたばかりなので、素直に答える気にはなれなかった。

「フン、まあいいよ」

ゴルフは気が短い。沈黙に耐えられるような精神構造をしていなかった。それは彼の持病も大きく影響していた。自律神経の不安定さが、集中力を保ち続ける事を許さないのだ。そのせいもあり、ゴルフの言動は荒々しく見えたり、時には繊細にさえ周りの人々の目に映っていた。

ジスパーはゴルフが聞くのを途中で辞めてから、時間が過ぎるのと比例して話したい衝動が込み上げてきていた。本来ジスパーは無口ではあるが、人に問いかけられると、相手が嫌な奴以外なら止め処なくそれに答え、永延と話し続けてしまう。彼は常に受動的だっ

た。

話したい……もう一度突っ込んでくれ 彼の心の衝動は胡坐を書いた足を、小刻みに振るわせ始めていた。ゴルフはそんなジスパーの様子に全く気づいていない。

「ジスパー、何で盗賊になりたかったのか教えてよ」

テンロンの大きな耳には、風きり音と自分の足音だけでなく、背中で話す二人の会話も聞こえていた。テンロンの声にジスパーの右耳が微かに揺れた。押さえ込んでいた言葉が、堰を切ったように、溢れ出てくる。

「聞きたいか……？」

「うん！」

「じゃあ、話そうかな！」

ジスパーは上機嫌で武器を懷にしまい、テンロンの頭の方へ体を向けた。前に跨るゴルフが少し怪訝な表情を浮かべている。

「俺は自分の力で食べて生きたいんだよ、うちは金持ちでさ、家にいると何にも不自由する事は無いんだよ、だから、家出て盗賊として自力で食べていく事に決めたんだ」

「ジスパーはいい子だね」

「いい子？」

さすがのジスパーも褒められているとしても、この返しは素直に

喜びづらい。テンロンの事だから、大して意味もなく普通に褒めるんだろうとは思うが　軽く微笑み聞き流した。

しかし、ゴルフは黙って入れなかった。

「馬鹿！　いい子が山賊なんぞするかよ！　盗人風情のくせに自力で食ってくだ？　人様のものかっぱらってんだろ？　盗人がしゃあしゃあとよく言えるな」

ゴルフの意見は尤もだった。しかし、その辛辣な言葉の数々に気持ちが治まるわけもなく、ジスパーは顔を紅潮させて、独自の持論の展開をし始める。

「うるせー！　山賊もそれなりに苦労があるんだぜ！　弱い奴じややっていけ無いだよ。強奪に加わるには、戦闘術を身につけなければいけない。俺は言っとくが、その辺の山賊どもとは違うぞ、武術、剣術、弓術、その他様々なもの見につけてんだよ。血の滲むような努力で得た物だ、それを振るって得た対価が人様の持ち物ってだけなんだよ。奇麗事行ってちゃ食べていけねえ、俺は地上に降りて3年間、泥嚙ってそれを自身に叩き込んできたんだ」

ゴルフは適当にジスパーの長話を左から右に流していた。泥棒の理論には付いていけなかったが、他人の生き方に文句をつける気も無く、それ以上深く突っ込むのは止めておいた。ジスパーはゴルフが大人しくなると、少しすっきりしたようで、耳穴に右人差し指を突っ込んで穿っていた。

「あれ何？」

テンロンが急に速度を落とすと、足を止めた。ゴルフ達の体が前に少し揺らぐ。ゴルフはテンロンが見つめる先に視線を送ると、途

方もなく大きな金色の石柱のようなものが、地から伸び、天空を貫いているのを目にした。

その先は白い雲が遮っていて見ることが出来ない。しかし、その石柱の近くに7人くらいの黒い影も同時に目に映っていた。ゴルフは多少顔を強張らせながらも、テンロンから飛び降りた。黒尽くめの装束に身を包む謎の集団はゴルフに、向き合って規則正しく横に一列に並んでいた。ジスパーはその様子をテンロンの背中に寝転びながら、片目を開けて見ていたが、7人の正体に思い当たったのか、急に起き上がってゴルフに叫んだ。

「ゴルフ気をつける！ そいつら、俺ん家の使用人どもだ！」

「何……？」

「む……その声は……ぼっちゃま？」

ゴルフは後ろを一瞥して、警戒心を高めた。7人の一人が自分たちを使用人と呼ぶ聞きなれた声に反応すると、一歩前にでて、頭を覆っているフードを後ろに下げて顔を晒した。

青い髪に顎鬚、顔中に皺のある目の鋭い老人といったところだろうか。ジスパーはその姿を目にすると、テンロンから飛び降り、近くに駆け寄ってきた。

「おお、セバスチャンじゃないか、久し振りだな」

「やはり、坊ちゃまでしたか、おひさしゅうございます、お元気でしたか？」

「うむ、セバスチャンも元気そうだな」

セバスチャンは7人に目配せして手を横に伸ばすと、6人が一歩下がって、右ひざと右手について屈んだ。

「坊ちゃま、帰る気になられてここへ？」

「いや、そうでもないんだけど、俺のと……知り合いに自宅の宝石くれてやるうと思ってな」

「な、なんですと！？ 天空城の秘宝『エンジェルキラー』をこの方々に与えると言つのですか？」

「そうだ」

ジスパーは言い切った、その口調に嘘偽りはなかった。元からそのつもりで一緒にグルフ達と行動を共にしていた。ジスパーはエンジェルキラーを奪う事によって、自分の山賊としての力量を、自分を一方的に蔑み勘当した両親に見せ付けてやりたかった。宝石の事はどうでも良いというのが本音だ。

「坊ちゃま、私たちがなぜ、ここに待機してるか分かりますか？」

「無論、お前たちは後ろの黄金の巨人の守護者。それに群がる盗賊共を排除するのがお前たちの責務だ」

「そこまで分かってらっしゃるなら、私たちが今からどういう行動に出るか分かってますよね？」

「分かっているが、お前たちも周りの奴等の気配は感じ取ってるはずだ、そっちを先に片付けた方が良くないか？」

「そうするつもりですよ」

6人が一斉に立ち上がると、円陣を組んで辺りに警戒を張り巡らす。グルフは良く分からなかったが、この場所が戦場になるだろうと予測はしていた。

「グルフとりあえず、テンロンに乗るんだ！」

「ふん、分かったら」

ジスパーが一足飛びでテンロンの背中に乗り込むと、グルフも遅れて飛び乗ってきた。

「テンロン少し離れるんだ」

「うん、分かった！」

グルフがそう言うと、テンロンは黒尽くめの男から、50Mほど距離を取ると、テンロンは足を踏み鳴らしながら体を回転させて、そちらへ向き直る。

「へへへ、こいつが黄金の巨人の足か、こいつを上っていけば、天空城にたどり着けるはずだ」

荒くれ者の盗賊共、その数100人以上はいるだろうか。周りの岩場の影から続々と姿を現した。

グルフ達が去ってから出てきたところを見ると、ずっと守護者達を影から見ている、それ以外の者、つまり通りすがりのグルフ達には興味は無いようだ。

グルフはその数の多さに、驚いてジスパーに言った。

「お前あの爺さんの仲間なんだろう？　この数に囲まれて大丈夫なのか？」

「大丈夫……と言いたところだが、たぶん死ぬんじゃないか？　多勢も無勢もいいところだ」

ジスパーは淡々と語った。その目は冷ややかでさっきまで、氣さくに声を掛けていた知り合いを見る目つきではなかった。ゴルフは分からなかった。ジスパーとこれまで話した感触で、それほど冷酷に仲間を突き放す事ができる男では無いと思っただけに、その言葉の軽さに幾分迷いが生まれ始めていた。

ゴルフ・トライスキーの場合 その5（後書き）

訂正少ししました。

ゴルフ・トライスキーの場合 その6

「さーと、奴等が戦っている間に行こうぜ」

「それはいいが、一人お客さん来たぜ」

テンロンの足もとには、黒装束の男が一人立っていた。

頭まで覆ったその装束のためか、ジスパーはすぐにはその男が誰であるか分からなかったが、隙間から覗く銀髪を見て正体に気づいたようだ。

テンロンの上から大きな声でその男に言った。

「早乙女、久し振りだな、なんか用か？」

「ジスパー様……、私の任務はあなた達三人の抹殺でございます」

「ほお、あれだけの盗賊どもを6人に任せてていいのか？」

「彼らは直ぐ殲滅されるでしょう、あなた一人の方がよっぽど危険です、悪いですがここで死んでもらいましょう」

男はそう言うと、体が揺らぎ始める。そして その姿が徐々に三つに分かれていく。

ジスパーは目を細めて、その動きに目を凝らしていた。ゴルフはチョッキの裏に手を伸ばすと、分身一人一人ではなく、その辺り一帯を標的とする無数のナイフを滔滔と投げ込んだ。

しかし、手ごたえは無かった。

「テンロン、お前の体は絶好の的だ、人間に戻れ！」

「はい」

グルフの命令で瞬時に人間に戻る。戻る合間にジスパー、グルフは背中から飛び降り、テンロンを守るように前に立ち尽くす。

早乙女は尚も三体に別れたままこちらへ、素早く駆けて来る。足音をたてずに岩場を、移動する無駄の無い動きに、グルフは只者じゃない事を瞬時に悟る。

しかし、急に分身が上から襲ってきたかと思うと、ジスパーは刀を空に横薙ぎに振るった。

それもまた実体がなく手ごたえがない。その分身たちは切りつけられると姿を空に溶かす。ジスパーは完全に相手を見失ってしまっていた。しかし、グルフの間に早乙女が入っていた。鋭利な刃物がグルフの腹部に突き立てられる。

ガキーン！

早乙女は戸惑う、確かに腹部にナイフは刺さったはずだった。その敵の動揺を意に介せず、グルフが上からナイフで背中を刺そうとすると、早乙女は後ろに、刹那の判断で飛び退いた。

「ほお、やるじゃねーか」

「貴様、一体腹に何を着込んでるんだ？」

ジスパーも以前グルフと戦い、今の早乙女のように腹部に刃物を差し込んだ事があるが、同じように硬い何かに阻まれ、そしてその隙にグルフに刺され敗れた。

早乙女の問いに対するグルフの答えに、こんな時ではあるが興味はあった。

「そりゃゝ企業秘密つてもんだ」

ゴルフが腰から抜いた大きな銃を早乙女に向けた。

ドン、ドン、ドン、ドン！

狂ったようにゴルフは際限なく、早乙女の動きを捉えながら銃を撃ち捲くる。

間一髪でそれらを交わしていくが、反対側から飛んできたジスパ一の鍵爪に足を捕らえられる。ジスパ一はそれに繋がる鉄鋼線を振って、早乙女を地面に強く叩きつけた。

早乙女は小さく呻くと、地に伏しなんとか立ち上がろうとしたがその頭上に、ゴルフの銃口が鈍く光っていた。

「終わりだな……」

「殺せ……」

ゴルフは目を細めて、早乙女の顔をじーっ見てから、

「テンロンゝ荷物にロープあっただろ」

後ろの岩陰に隠れていたテンロンに大きな声で言った

「よっしゃ、こんなもんだな」

ゴルフは早乙女をロープで岩にぐるぐる巻きにして、縛り付けた。

「なぜ、殺さん……？」

視線を下に向け、解せない様子で呟く早乙女に対し、ゴルフは早乙女の頭を覆うフードをずらして、まじまじ見つめた後質問をした。

「お前、女いるか？」

「いるが……それがどうした」

「やっぱりな、お前ほどの男前ならいると思ったんだ、だから殺さない、ただそれだけだ」

ジスパーは笑っていた。最強と呼ばれる忍者である早乙女の顔が、呆然として男前の顔が少し崩れて、間が抜けた顔になっていたからだ。

「まあ、早乙女さんよ、ゴルフはこういう奴だ、じゃ俺たち先行かせて貰うぜ」

「く……」

早乙女は、足を地面に叩きつけて、悔しがった。

#

「おお、おお、やっとなるやっとなる！」

ゴルフ達は少し高台から盗賊たちと、6人の戦いを眺めていたが、ジスパーがゴルフに突然顔を向けると、

「今がチャンスだ！ 黄金の巨人の近くまで行くぞ！」

「ふむ、しかし、どうやったら、あれから天空城、いやおまえんちにいけるんだ？」

「簡単さ、黄金像の上には俺んちがあるんだ、あいつが天空に手を伸ばして触っているものが天空城に他ならない。あいつは言わば、エネルギータンク、地上を歩きながら、足から地熱エネルギーを得ているんだ。それを天空城の浮遊エネルギーに変えて、手の平を天空城に押し付けて。それを渡しているにすぎない。天空城は月に一度エネルギーを黄金の巨人から頂かないと、空に浮いてられないんだ。あいつを伝っていけば、すぐに俺んちにつくさ」

その単純且、不便な天空城の実体を知って、グルフは目を細めて口端を大きく横に広げた。

テンロンはあまりジスパーの言った事が理解できなかったが、やっとジスパーの家に行けるとあって、満面の笑顔を浮かべていた。

#

「お前ところで、どうやって黄金の巨人の上まで行くつもりだ？」

グルフがジスパーがやけに落ち着いていたので、いい方法を知っているのだらうと思い聞いてみた。

「そりゃ、鍵爪を二つ手にさしてだな、交互に突き刺しながら、根性で上がっていくんだよ」

「カア~~~~冗談は顔だけにしとけよ！」

顔を抑えながらゴルフが言った。ジスパーは本気でそのつもりだったので、その何が悪いんだ　と納得いかない顔でゴルフを睨んだ。

「そんなら、なんか方法あるのかよ？」

ゴルフはそう言われてにやりと笑う。指先をテンロンに小刻みに何回も刺していた。

「はあ？　まさか……」

ジスパーはテンロンに振り向くと、テンロンが照れ臭そうに笑っていたが、ゴルフを一瞥すると、

「ドラゴンでいいよね！」

「うむ」

「うは〜」

ジスパーは驚嘆の声をあげて、テンロンの変わりゆく姿を見つめていた。

「ガオー！　お待ちせ」

大きな体に緑色のぶつぶつした硬そうな肌、漆黒の翼が背中の上から二つ生えている。

羽をバタつかせると、強烈な風がジスパの銀髪を揺らした。

「何でもありだな、テンロン……」

ジスパーは童話に出てきそうなドラゴンそのままだなぁと暗に思う。

「よっしゃ、行くぜ！」

二人はテンロンの背中に跨ると、テンロンは一声絹を裂くような声をあげて、黄金の巨人に寄り添うように上空へと上がったいった。

ゴルフ・トライスキーの場合 その7

ドラゴンとなったテンロンは、天空城へ向けてどんどん上昇していく。

強く冷たい風が背中 of 二人に吹き付ける。ゴルフは寒そうに震えていた。

寒さを紛らわそうと、ジスパーに話しかける。

「なあ、ジスパー、俺なあ、お前に聞いておきたい事があるんだ」

「なんだ？」

ゴルフは少し目を細めて、真剣な顔をジスパーに向けた。

「お前なんで俺達と一緒にくる事にしたんだ？ しかも、宝石を渡すつもりとか抜かしてたな、どういうつもりだ？」

「ふん、それはだな、第一に、宝石のある部屋はあるトラップが張ってあってな、一人ではそれを破ることができない。第二に、俺はお前たちが気に入った。第三に、俺は宝石にも金にも大して興味がない、第四に、テンロンは俺の嫁にする。第五に……」

「ちよつと待て、第五は良いから、第四について詳しく話してもらおうか？」

ゴルフは目を吊りあがらせてジスパーを睨む。ジスパーは腕組みしながら、胡坐を書いて目を閉じていた。第10まで言い切つてさうと流そうとしたが、途中でゴルフに突っ込みをいれられ、言葉に詰まる。だが、すぐに息を深く吸うと、口を開いた。

「ふ、俺はテンロンに惚れた。ただそれだけの事よ」

「ふ、じゃねーよ、お前分かっただろ？ こいつはラズンだ、人間じゃない。お前はどうせ人間の姿であるテンロンに惚れたんだろうが、こいつは変体生物ラズンなんだ」

ゴルフが力強く言うと、ジスパーが目を開け、人差し指を立てて横に三度振った。

「分かってないなあ、良く考えてみるよ、こいつはラズンだが、人間の時は人間そのものなんだ。それにな、俺はこいつの姿に惚れたんじゃねー、中身に惚れたんだよ。しかもな、更に色々変身できるんだ。便利な奴だ。言う事ねーじゃねーか！」

「お前って……馬鹿に見えて、とことん合理的に考えてるんだな……」

ゴルフはこの割り切り方には、ある意味敬服の念を抱きかけた。小僧ではあるが、とても前向きで理に叶っているとさえ思う。ゴルフにはない柔軟な思考をジスパーは持っている。

だが、問題は

「ただなあ、テンロンの気持ちもあるだろ？ お前が勝手にそんな事決めても相手が嫌といえ、それはただのお前の片思いだ、横暴だ。そのへんどうするつもりだ？」

テンロンは途中から会話を追いながら耳を澄ましていた。自分の事が話題に出ているのは分かっていた。しかし、どういつことで揉めているのかが、理解できないでいた。

ジスパーはテンロンの気持ちまで考えていなかった。無計画さが露呈した形だ。
取りあえず

「テンロン〜テンロン〜!!」

「ん〜？ なーに〜？」

「俺の事好きか？」

「うん、好きだよ！」

「OK」

ジスパーは得意な表情を向けてゴルフを見下ろす。ゴルフはテンロンの背中に頬杖をついて目を瞑っていた。

#

「何か見えてきたよ〜」

「おお、あれはまさしく……我が家……」

「本当にだせー天空城だな、平べったい円盤にしかみえねえ」

平べったい円形、まさしくその通りの形をしていた。その底を黄金像の指と思われる黄金の石柱のようなものが触れていた。

「よし、テンロン、左に回ってくれ」

「はいー！」

ジスパーはテンロンの頭の近くまでよじ登り、天空城の入り口の正確な場所を伝えていく。

「あ、あつたー、あの横穴に入ればいいんだね」

天空城は円形だが、多少厚みがあり、左側面には丁度テンロンの体が、すっぽり入れるくらいの横穴があった。テンロンは底へ翼を折りたたんで滑り込んでいく。

「このまま、真直ぐだ」

暗い通路を滑るように入っていくと、その先には壁があり行き止まりになっていった。

その手前でジスパーは大声で叫ぶ。

「よし、あの壁の手前で降りよう」

ジスパーがそう言うと、壁の近くまで来た後テンロンは強く羽ばたき、減速し手前で足からふわっと着地した。羽ばたきによる風の流れが壁に押し返され、ジスパーとグルフの髪が激しく左右に揺らめく。

テンロンは突然変身を解いた。一瞬で人間の姿へと変わった。それを見越して身構えていた二人が、変身前のテンロンの背中を直ぐに蹴って、軽やかに地面に着地した。

「さーつてと、この扉を開くぞ」

ジスパーは口笛を吹きながら、壁の少しくぼんだ部分に手を触れる。

その瞬間、前の扉が地響きを立てながら、横へスライドしていった。

中は近代的な作りになっていて、銀色の壁で覆われた通路が続いていた。

「中は案外しつかりしてるんだな！」

「当たり前よ、一応天空城だぞ、金かかってるからな、宝物庫はこの先だ！ 行くぞ！」

ジスパーが二人に振り向いて言うと、ゴルフとテンロンが静かに頷いた。

内部を良く知っているジスパーを先頭に、辺りを警戒しながら二人は後から追っていく。

右折し、しばらく走って、また左折、そして階段を降りて、どんどん進んでいく。

内部は入り組んでいて、かなり広い、しかし 人の気配が無かった。

ゴルフはその静けさに異様さを感じていた。しかしジスパーは止まろうとしない。

どんどん進むジスパーの後ろ姿に、何故か不安だけが募っていく。そうしているうちにゴルフは顔を歪めて立ち止まる。

「ちょ、ちょっと待ってくれ……」

「あ、ゴルフまた……」

「ん？ どうしたんだ？」

テンロンは肩に抱えていたバッグから、水の入ったボトルと錠剤を手に取り、ゴルフに手渡した。それを受け取ったゴルフが薬を、素早く口に放り込み水と一緒に嚥下した。

息を荒立たせながら壁に寄りかかって、そのままずるずる滑りその場に座り込む。

「大丈夫？」

テンロンが心配そうに言うと、ゴルフは頭を縦に振った。
苦しそうな顔で胸を押さえていた。

「ま、急いでないから座つてろ……宝物庫はもう目の前だ」

「ふー助かったぜ……」

ゴルフは少し安堵の息を漏らす。神経の高ぶりと長時間走ったために、今こうして鼓動が早くなっていた。先が近い事を知ったことにより、気持ちが和らいでいく。
しかし

「来ちゃったのね……」

通路の先から、女性の低い声が壁に反響して三人に届いた。
コツコツと固い靴が、地を叩く音が迫ってくる。

湾曲した通路の向こうから若い女性が姿を現した。その姿を見てジスパーが目を見開いて、言葉を投げかける。

「おお、久し振りだな、ミアン」

「兄さん……」

ゴルフはその女性がジスパーを兄さんと、呼ぶのを聞いて驚いた顔を浮かべる。

しかし、直ぐに煩悶の表情へと変わる。まだ心臓ガドキドキして苦しいようだ。

テンロンは落ち着かせようとゴルフの背中を摩っていた。

ジスパーはそんな二人を一瞥すると、ミアンの直ぐ前にたち塞がる。

「ミアン、ここは引いてくれないか？ 俺はお前を怪我させたくない」

「無理な相談よ、兄さん宝石を持ち出すきでしょ、あれを持っていたということが、どういう事か分かっているの？」

「無論分かっているさ」

「なら、答えは一つよ！」

ミアンがいきなりジスパーに切りかかる。一足飛びでレイピアの先をジスパーに突きつける。それを間一髪で左に避けて交わした。しかし、すぐにミアンは向き直って、縦横無尽にレイピアを高速で操る。鋭いレイピアの先が、様々な角度からジスパーの体を貫こうとするが、ジスパーは冷静にその刃の軌道を見切り、皮一枚で全て交わしていた。しかし、完全には交わしきれてはいなかった。所々、薄皮を切り裂かれ、出血していた。ミアンは地を勢いよく蹴って、ジスパーの心臓を狙った。その突きの鋭さに咄嗟に、ジスパーは腰

の短剣を抜いた。短剣がレイピアの刀身とかち合う。

お互い力を込める刀身が十字をなし、金属の擦れあう音が各々の耳に届く。

「ミアン、腕を上げたな！」

「あれから修業しました、今ではお兄様にも負けないわ！」

「それはどうかな？」

ジスパーは左手に力を込め、レイピアの刀身を片手一本で支えると、体に巻きつけていたカギ爪を手にして、レイピアの刀身に振り下ろした。少し斜めになっていたレイピアが、上からの強い力によって音も無く叩き折られた。折れた切っ先が甲高い金属音を立てて、地面に落ち一度跳ねた後平坦に倒れる。

それに驚いたミアンが、咄嗟に後ろにステップして退いた。

「私の負けね……」

「じゃ通らせてもらっぞ」

その場に力なく膝を追って、座り込むミアン。ジスパーはミアンに声を全くかけようとしなかった。

ジスパーはナイフをしまうと、テンロン達に振り返らずに前を手を放り投げる。

その合図に呼応して、テンロンはゴルフを肩に担ぎ後を追った。

#

通路をでると、大きな広間にでた。奥の方に光り輝く緑の球体に
ゴルフは目を輝かした。

薬が効いてきたのか、ゴルフは大分落ち着きを取り戻し、テンロ
ンの肩を借りながらではあるが、一人で立てるまで回復していた。

「あれか、エンジェルキラーっていうのは……」

ゴルフが近付こうとすると、

「止まれ！ 言ったら！ 罠があるって！」

ゴルフはその声に驚き、咄嗟に前へ進む足を引いた。

「おっとそうだったな……」

広間の入り口付近で三人は座り込み、話し込んでいた。

「それにしても、あれお前の妹だったのか」

「ああ？」

「写真だよ！このシスコンが！」

ゴルフは以前ジスパーから取り上げた、財布の中にあつた写真の
事を言っていた。

あの写真に映っていた女性がジスパーの妹だと、さっき本人を見
て気づいたからだ。

「うるせーな、何入れようが俺の勝手だろ！」

「そうだけだよ、それにしてもよ、お前んとこの使用人にしろ、妹にしろ、なんか変だよな」

「何がだよ……」

ゴルフは少し息を吐くと、表ポケットからタバコを取り出し火をつけた。

しかし、吸おうとしたとき、テンロンが咄嗟に取り上げて、

「馬鹿！ さつき発作起きたばかりなのに、体に悪いもの吸っちゃ駄目だよ！」

ゴルフはテンロンが睨むと、舌打ちをした。

そして、またジスパーの家族の話題に戻そうと会話の舵を切る。

「何が変わって……お前あそこのお坊ちゃまだったくせに、使用人も妹も本気でお前を殺そうとしてくるじゃねーか。いかに、勘当されたからってよ、お前の家族は残酷だよな」

「まあ、使用人はあそこに近付くものを全員殺すよう親父に命令されてるからな、ただ、妹は違うぞ、あいつは、自分たちの家を、命を守るために仕方なく襲ってきたんだよ」

ゴルフはジスパーの言っている意味が良く分からなかった。テンロンは初めからあまりわかっていない。それはゴルフの介抱に気を回しているせいもあった。だが、適当に会話の端を掴んで、単純な質問をジスパーに投げかける。

「家を守るってどういう事？」

テンロンの質問にジスパーが微笑んだ。

「簡単さ、エンジェルキラ盗まれたら、天空城が地上に落下するからだよ」

「ええ！？」

「なんだと！」

二人は目を丸くして驚き、腰を少し浮かせた。それを意に介せず、ジスパーは淡々と語る。

「エンジェルキラはな、簡単にいうと、黄金の巨人から渡されたエネルギーを浮遊エネルギーに変換する装置の一部でもあるんだ」

ゴルフがあからさまに顔を歪め嫌な顔をした。テンロンもこめかみに一筋汗を滴らせる。

「おい！　じゃどうするんだ？　無事にとれたとして、いきなり落ちたら城の落下に巻き込まれて、死んでしまっじゃねーか？」

「それは大丈夫、直ぐには落ちない、補助エネルギーが働くからな」

ゴルフはそれを聞いてほっとすると、後ろ手を床についた。だが、それでも少し納得いかない顔で、ジスパーに問いかける。

「お前の家族死んじゃうんじゃ？」

「うむ、だからあいつ等必死なんだよ。たぶん、うちの家族の奴等、地上の使用人から、俺がエンジェルキラ盗みに向ってるって無線で連絡受けたんだろうな」

ゴルフは話すのが嫌になってきていた。ジスパーが馬鹿なのか冷酷なのか、判断しづらいからだ。

#

「とはいえ、あいつ等死なないと思うぞ、脱出ポットがこの城にはあちこちあるからな。家を失うだけの話だ」

「おいおい、気楽に言うな、勘当されたからって、そこまでして悪いと思わないのか？」

ゴルフはジスパーの真意が知りたかった。

「思わないね、少し痛い目みればいいんだ……」

「……ふー……まあ、俺はどっちでもいい、お前の家族が死のうが生きようが、どんなことをしても、あれを奪うつもりだからな」

ゴルフは少しジスパーの家族に同情はしたが、直ぐに本来の目的を思い出して表情を強張らせて言った。

「じゃあ、トラップについて聞こうか？」

ゴルフ・トライスキーの場合 終了。

「なぐに、奥の台座にエンジェルキラー見えるだろ？ あそこに行くまでに大きな見えないエネルギーの壁が張られてるわけよ、それに触れれば一瞬で体は蒸発するだろう」

「うお、あぶね、危うく死ぬところだったな。俺……」

ゴルフはさっきの迂闊な前進を止めて命拾いをしていた。少し身震いさえしていた。

ジスパーは更に言葉を続けた。

「バリアの手前に等間隔に3つ台があるだろ、あそこにそれぞれブルーストーン、グリーンストーン、レッドストーンを三人で分かれてほぼ同時に嵌め込めば、バリアは消えるって寸法よ」

「なるほど、簡単なように聞こえるが、ちょっと聞いていいか？」

ゴルフは呆れたような顔をして、ため息をついた。

「その3つのストーンはどこにあるんだ？」

「ああ、妹と母親と父親が持つてるはずだ、あ！ 妹から奪うの忘れてたな」

「ジスパーはすっかりさんだね！」

テンロンに駄目だしをされて、ジスパーは苦笑を浮かべる。
そんな微妙に落ち着いた雰囲気の中、背後に気配を感じてゴルフ

が叫んだ。

「誰だ？」

人影が三つ入り口の向こうから近付いてくる。

エンジェルキラの放つ光に照らされ、その姿をゴルフ達の前に晒した。

「これはこれは、父上、母上、ミアン、三人お揃いで……」

ジスパーが少し声色を高くして、皮肉っぽい口調で言った。

「相変わらずだな、お前は」

黒い顎鬚に精悍な顔立ち、額に金色の輪っかをはめた男が言った。腰には長剣を差し、黒い外套、威風堂々たる風貌をしていた。

その隣には落ち着いた白いドレスを纏った高貴な婦人が寄り添っていた。更に隣に先ほどジスパーに敗北を帰したミアンが俯いて立っていた。

「何しにきたんだ？」

「ジスパー、お父さんにそんな口の聞き方はいけませんよ」

「うるさいな、俺は勘当されたんだ、もう父親でもなんでもない」

ジスパーは平然と言ってのけた。ゴルフはその家族喧嘩を聞くのが疎ましくなってきたので、テンロンをひっぱり少し離れた場所に移動した。

「母さんは反対したのよ、でも父さんがどうしても許せないらしくって、でも私はいつでもあなたのこと心配してたのよ……」

「ふん、そんな事どうでもいいさ、それより話を戻すが、何しにきたんだよ？」

ジスパーは三人に視線を往復させながら睨みつける。

すると、母親が首から提げていた青い丸みを帯びた石をジスパーに手渡した。

続いて、ミアンも赤い石を手に持ちジスパーに投げつける。

ジスパーは片手でそれを掴んだ。

両の手にもつ輝く玉を確認した後、ジスパーが三人を見やった。

「何で渡すんだ？ 分かってんだろ？ エンジェルキラーがなくなれば、天空の城がおっこちるって」

「分かってるわ、でもどっちみち、兄さん力づくで奪いにくるでしょ」

「母さんもあなたと戦えるわけないし、それなら渡しておいた方が良いと思ってね」

ジスパーは最初きよとした顔でそれを聞いていたが、しばらくして低く笑いだした。

「ふふふ、物分りいいな、そのほうが利口だ、で、父さんは渡さないのかい？」

それを聞いた父親が鼻で笑うと、閉じた目を見開いてジスパーに言った。

「ジスパ―よ、ワシはお前に石を渡しにきたんじゃない、盗賊を成敗しにきたただけだ」

「ふん、さすが父さんだ、なら、本気でやらせてもらうぜ！」

その言葉を皮切りに、父親とジスパ―はお互い素早く距離を取る。父親は長剣を抜いて、高々と掲げて大きな声で、

「ジスパ―よ、見事父を討ち取ってみよ」

ゴルフは壁にもたれながら、馬鹿親子の骨肉の争いを冷めた目つきで見ている。

#

「ふむ、中々やるな、あのおっさん、ジスパ―とほぼ互角だ」

戦いを見物していたゴルフが言った。テンロンは不安な目で二人の戦いを見つめていた。

ゴルフに時々顔を向けて、何かを目で訴えている。

「ほっときゃいいんだよ」

「でも、あのおじさん強いよ?」

「一対一の戦いに入るほど俺は野暮じゃねえ」

ゴルフはテンロンに低く呟くと目を閉じた。

ジスパーは珍しく肩に提げていた、長剣を抜いて戦っていた。短剣では戦える相手ではなかった。父親の振りはするどく、幾度も窮地を迎えるが、ジスパーは俊敏な動きで、それを紙一重で避けていた。父親の刃の連撃の合間に、長剣の切っ先を突き出す。それを巧みに刀身で弾いていなす。実力は拮抗していた。

「む……ジスパー腕を上げたな」

「ふん、俺は地上で何度も生死をかけた修羅場を潜ってきたんだ。父さん等のように、ぬくぬくとした環境で鍛えた剣技とは訳が違うぜ！ 遊びはここまでだ！」

ジスパーはそう言い放つと、左手でカギ爪を父親の足元に投げつける。父親は宙高く飛んでそれを交わすと、大上段に剣を振り上げ、上から切りつけて来た。その瞬間　ジスパーはカギ爪に繋がる鋼線をおもいつきり引張った。鋼線はムチのようにしなり、その先についているカギ爪が父親の肩に突き刺さる。

父親は小さく呻くと、右膝について地に着地した。その父親の顎下には白銀の切っ先が置かれていた。

「勝負会ったな」

「見事だ……」

父親は肩のカギ爪を左手で引き抜くと、息を荒立たせながら剣を地面に置いた。

傷口から血が滴り落ちる。痛みをこらえながらも、父親は懷からグリーンストーンを取り出しジスパーに渡した。

「ふん、最初から渡せばよいものを、おい！ ミアン！ 治療してやれ！」

「うん……」

ミアンは父親に近付いて、左肩を貸して立たせた。父親は押し黙って、心配そうに見つめる母親の元へミアンと歩いていく。

三人より固まり、部屋を出て行く姿が、物寂しげに映る。

ジスパーはさすがに何かその姿に感じるものがあつたらしく、少し罰の悪そうな顔をして頭を掻き耑っていた。ゴルフがそんなジスパーのいる場所へ歩み寄ってきた。

「よくやった……と言いたところだが、お前って心底親不孝だな……」

「……………」

ジスパーは言葉を返せなかった。

だが、これで三つ石が揃った事で、ゴルフは上機嫌だった。

不毛な骨肉の争いは見てて疎ましかったが、それもジスパーの勝利で終わり、石が手に入ったのだ。両者とも死者がないことも幸いだった。仲間が親殺しにならなくて済んだのにもほっとしていた。それはゴルフの本心だ。

「おい、じゃあ始めるぞ！」

「あ、ああ……」

「OK!」

ジスパーはグルフの呼びかけに冴えない口調で返した。テンロンは大きな声で合点した。

三人各々の台座で石を手にもつ。

「いいか、息を合わせろ！ 3 / 2 / 1」

グルフの合図で三人はほぼ同時に、石を台座の表面の凹みに嵌め込んだ。

すると、何か磁場の消えるような低い電子音が微かに三人の耳に届いた。

「さてと、本当に大丈夫か」

グルフはチョッキからナイフを取り出し、エンジェルキラの隣の壁に投げつけた。

真直ぐ壁にその鋭い先が突き刺さる。

「よし、トラップは消えているようだな」

グルフはゆっくりエンジェルキラの置かれている台座に近付いていく。

後から二人もやってきた。

並んでエンジェルキラの眩い光を目を細めて見つめる。

「じゃ、取るぞ!」

ゴルフは気合を込めていい放つ。多少心臓は高鳴るが、さつき薬は飲んだばかりなので、それほど呼吸は乱れていない。台座から一気に緑の球体を引き抜いた。

その瞬間 足場が大きく揺れる。ゴルフとテンロンは焦りを顔に表す。足場が少し斜めに傾いて、立っているのがやっとだった。だが、暫くして補助エネルギーが動き出したのか、また平坦に戻っていく。

「ふーびつくりさせやがって……」

ゴルフは額の汗を手の甲で拭った。

#

「さーって、出ようか」

ゴルフが二人に声をかけて、出口に歩いていこうとすると

ガーガタン！

出口が急に上から降りてきた、壁によって閉ざされる。

ゴルフは焦って壁に素早く駆け寄り、その表面を両手で叩いた。それとは対象的にジスパーは落ち着いた表情で立ち尽くす。

「親父め、嵌めやがったな」

「おい、ジスパーどうすんだよ！」

グルフは動揺していた。エンジェルキラを抜き取ってしまい、補助エネルギーが切れるまでの時間もそう長くはないだろう。もし切れれば、即座に天空城は糸が切れたように、地上へと落下していく。そんな事を思い浮かべると冷静ではいられなかった。

「糞っ！」

ジスパー達に別れを告げ、大きな部屋で家族は寛いでいた。

広間の扉を閉めてから、もう1時間は経過していた。壁際で見張っていたミアンの合図で、エンジェルキラが取り出された直後に出口を封鎖した。

宝石を抜いて、補助エネルギーが浮遊を保てる10分、それでもまだ天空城が浮いているという事は

「ふふふ、ジスパーの奴、結局エンジェルキラを戻したようだな」

「お父さんやり過ぎですよ」

「馬鹿、あいつが無茶なんだよ、イタタ、見てみる、肩けがしちまつて」

父親は半身裸で包帯が傷口に幾重に巻かれていた。

少しよろめきながらも、ソファアの上着を肩にかける。そのまま天空城の操作部屋へ向うと何か作業をしていた。

母親は少し俯き加減に、ソファアに肘掛に頼杖をついていた。夫とジスパーのことで激しい口論をしたばかりだ。ミアンはその口論の最中、両方を抑える事に必死だった。

彼女もまた疲れきっていた。

しばらくして、父親が操作部屋から帰ってくる。どこか微笑みを湛えて、得意な顔で二人に強い口調でいい放つ。

「さあ、行くぞ！」

三人はジスパー達が閉じ込められた、広間の扉の前までやってきた。

「取りあえず、あいつがまたエンジェルキラを引き抜いて、落下する事になってはたまらないので、地上の島へ移動しておいた。まあアイツも少しは反省しただろうし、開けてやるとするか」

父親は外の窪みを手の平で押した。すると中からジスパー達が力ない目をしてよたよた出てきた。

「負けたよ、あんたには……」

「ふん、親を甘くみるんじゃないぞ、これでもお前の父親だったんだからな」

「ふー、もう興ざめしたんで、エンジェルキラ置いてくよ」

「そうか、ふむ、お前も成長したな」

「母さん嬉しいわ！」

父親は髭を指で摩りながら、大きな声で笑っていた。母親はジスパーの肩に、顔を近づけてすすり泣いていた。ゴルフも後から出てきて、何も言わずにジスパーの家族を、素通りして出口へ向って歩

いていく。

ジスパーは家族と少し話した後、別れを告げた。ジスパーの後姿を見送った後、父親は広間に踏み入って眩い光を放つ、エンジェルキラを近くで眺めていた。

きちんと装置に嵌め込まれたそれを見て、父親は深い息を漏らすと踵を返す。

そして、出口へ向おうとした矢先

「じゃ、私も帰るね！」

後ろから女の声が聞こえてきた。咄嗟に振り向くが誰も後ろにはいない。

しかし、突然エンジェルキラが光り輝く。眩い光で手を翳すジスパーの父親。

次の瞬間、光の中から、物凄いスピードで何かが飛び出てきて、出口を颯爽と出て行った。

「なんだあれは？ ああ、エ・エンジェルキラが……」

「ただいま」

「おお、お帰りテンロン！」

ジスパーの顔の近くに大きなスズメバチが、寄り添いながら飛んでいた。

だが、眩い光を放つと、スズメバチは姿を変えていく。

次の瞬間、テンロンがジスパーの隣に、笑顔を湛えて立っていた。少し後ろにはエンジェルキラを、抱えながら鼻歌を歌うグルフがいた。

あの時 ……

ジスパーは閉じ込められた後、座り込んで悔しさをかみ締めながら、色々脱出方法を考えていた。様々な脱出方法を考えるが、一向に答えは出てこなかった。しかし、グルフがまたテンロンを指差した。テンロンは変体動物である。その変身能力は対象の姿形を、真似るだけではなかった。その対象の能力全てを受け継ぐ事が出来る。テンロンはエンジェルキラーに変身し、グルフが装置にテンロンを組み入れた。城がずっと浮いたままなら、中の様子を見ようと、また家族が訪れる事は必然。ジスパー達はそれを読んで、ただ只管待っていた。

「うまくいったな」

グルフはもう浮かれていた。これでレソシアが助かる。そう思うと、心底安堵して、喜びが心の底から溢れてくる。

「まあ、あいつらが地上に降りる事も計算済みだった。それでももう浮き上がれねえ。ざまーみろってんだ。せいぜい地上の暮らしに慣れるこつたな」

地上に降りた事を確信できたのは、テンロンがエンジェルキラーとなつて、エネルギーの使われ方の異変を肌で感じる事ができたからだ。

ジスパーの本来の目的は家族を地上で住まわせる事だった。数年前、天空城で地上と隔絶した生活を送るのが嫌で家を飛び出した。盗賊になる、ならないは、あの時どうでも良かった。ただ出て行く理由として、本来の目的の代わりに言っただけだった。最初から本来の目的を家族に言っても、受け付けるわけがないのは、父親の気質を知っているジスパーは良く分かっていた。そのため、先に地上に降りて暮らし、その生活を体に叩き込み、地上に慣れていくこ

とをした。大分地上の生活にもなれて来た頃、家族を地上に住まわせる方法を思案し始めた。そんな時、ゴルフ達と偶然出会った。

何となく二人と一緒に天空城に行く事にした。ゴルフの腕をそれなりに認めていたからだ。だが、ここまでうまく行くとはジスパ―も予想はしていなかった。だが、ゴルフ達と天空城へきた事は彼にとって、正しい判断だったようだ。

#

全てうまく行った。とはいえ、まだジスパ―にはやる事があった。

「テンロンよ、お前俺の事どう思う？」

終始笑顔で歩くテンロンに、咄嗟にジスパ―は聞いてみた。今まで見せたことのない真剣な顔を向けていた。頬がほんのり赤く染まっている。

ゴルフは少し後ろで、エンジェルキラ―眺めながら、レソシアの事で頭が一杯だった。

前方を歩く二人の様子は、目に入っていない。

「ん？ どうって？」

「だからよお、なんて言えばいいのかな、好きか？」

「うん、好きだよ」

何の躊躇いもなく、テンロンは微笑んで言った。

しかし、ジスパ―は頬を指で搔いて、首を傾げる。
「どうやったら、自分が考える『好き』の意味をテンロンに、伝えられるか思考を巡らせていた。」

「どのくらい好きだ？ グルフより好きか？」

「うーん、グルフと同じくらいかな」

ジスパ―の頭に、重いハンマが―打ち付けられたような衝撃が走る。

肩を窄めるジスパ―。足取りが急に重くなっていた。背中を丸め頭をうな垂れている。

グルフは自分の名前が出たことで、二人の異質な様子にきづいたらしく、

「こら、ジスパ―どさくさ紛れて何やってんだ！」

「うるせーなー今大事な所なんだよ！」

顔を突き合わせいがみ合う二人。

ジスパ―はいがみ合う中で、突然何かが閃いた。

グルフを無視して、突然テンロンに真剣な顔を向けて、

「テンロン俺の家に來て、俺の飯を作ってくれないか？ 俺と一緒に夜寝て、一生楽しく過ごすってどうだ？」

テンロンは少し躊躇う。いきなり色々言われて戸惑いを見せていた。グルフは開いた口が塞がらない。テンロンはそんなグルフを一瞥して、ジスパ―に淡々と思いを述べる。

「あのさ、それは良いんだけど、ゴルフ心配なんだよ。薬切れたら苦しくなるし。レソシアさん帰ってくるだろうけど、やっぱり旅をする時は私が必要なの、だから離れるわけには……」

ジスパーは苦い顔をした。だが、ここでうるたえるジスパーでは無かった。

「じゃ、ゴルフの家の隣に俺んち建てるから、それでどうだ？ それならゴルフとも旅にでれるし、俺も一緒にいけるし、好都合だ！」

「うん、それならいいよ！」

テンロンは快活に大きく頷いた。

「そっかーじゃ結婚式あげような！」

更にとん拍子にジスパーは話を進めていく。というよりは、テンロンが良く分かっているのを承知で、先に礎を早く作ってしまおうという狙いもあった。

「結婚式？」

きよとんとした目でテンロンが言った。

「そうだ、お互い同じ家に済む男女は、必ず結婚式を挙げることになってるんだよ」

出鱈目を吹き込むジスパー。

「ええ、ゴルフとそんなのあげてないよ」

「ゴルフは良いんだよ、俺とはあげなきゃいけないの！」

「ふーん、じゃ結婚式あげよう！」

「よしきた〜！」

ゴルフは最初色々突っ込むつもりで構えていたが、ジスパーが矢継ぎ早に話しを進めるので暫く黙ってみていた。話がまとまった後でも、ゴルフは黙っていた。

ゴルフはテンロンを実の妹か娘のように思っていた。そして、ガキっぽく無鉄砲だが、それなりに優しさと強さを兼ね備えたジスパー。この二人を見ていると、なんだかお似合いな気もしてきていた。それに自分もレソシアが帰ってきたら、色々忙しくなってくる。隣に住むと言っているし、ジスパーもそれなりに腕が立つ。

テンロンとの結婚を許す事を条件に、ただ働きさせることも出来るだろう。逆に都合がいかもしれない。そんな気持ちから二人の結婚を認めることにしたようだ。

こうしてテンロンとジスパーは、その後結婚式をあげ、ゴルフの隣に家建てて、幸せに暮らす事になる。テンロンにとって、ジスパーと暮らす事はゴルフと一緒にいる時とあまり変わらない気もしていた。だが、ジスパー本人は大喜びで、そのうち嫁を連れて、家族の下へ紹介しに行った。もちろんジスパーの父親は最初は、不機嫌な顔で受け入れなかったが、何度か訪問しているうちに打ち解けていき、ジスパーの勘当も取り消して、度々ジスパーの家にも家族で押しかける仲へと発展していった。

ゴルフはと言うと、エンジェルキラを王宮に持っていて、直ぐにレソシアを返してもらえた。

前と同じように幸せな生活が戻る。隣に騒がしいジスパーが引越してきたが、度々一緒に旅をし、金持ちの用心棒や、町の保安の仕事を受け負い、ジスパーと一緒に仕事をするようになる。彼等は幸せにその後も暮らしたとか。

小田原 昌彦の場合、その一（前書き）

年越すまでには……書き終えたい……5話程度になる予定です（希望的観測）。

小田原 昌彦の場合、その一

やー久し振り。

そろそろ暇こいてきたんで

また誰か苛めようかと思ってな。

さーて誰にするか？

小田原昌彦

プロフィール

19歳 二流大学生、熊のように体がでかい、多少小太りきみ、腹がでてる。

眼が細い、たらこ唇、もてない、消極的、開き直れる、暴走機関車、中流家庭。

普段口数少ない。合理的な考えができる。彼女いない暦〃年。

何させる？

イブまでに女を調達してデートすること。現在12月10日

しくじると、網走刑務所で3ヶ月拘留。

これでOK！

ある日、王宮から茶封筒が届いた。
内容はこうだ。

『イブまでにデートできる女性を見つける事、イブにデートすること。その詳細は王宮監視員が当日、あなたを監視しているから直ぐ分かります、健闘を祈る。しくじったら刑務所で拘留、北の刑務所は極寒だよん 王様より』

…… 何なんだ、このナチス政権下のような、日本の戦中の特攻隊への赤紙のような内容は……

後、二週間でデートしてくれるような女見つけないと、刑務所へぶち込むとか書いてるぞ。

この王国はどうなってるんだ？ 専制君主体制なのか……？
いやあ、今の国家体制に文句言っても始らない。頭を切り替えて現実的に考えないとな。

取りあえず、ミツシオンを成功させるのが最重要課題だ…… 極寒の刑務所で3ヶ月とか絶対嫌だ！

しかし、女と付き合った事の無い俺が、そんなに短期間に見つけられるとでも？

まあ、いいや…… 後ろ向きに悩んでる場合じゃない。

俺は財布を開けて中を覗いてみる。

だが、案の定…… 1万円しか入っていない。

こんなんで、女は買えねえ……

という事は、自力でゲットするしかねえよ。

いっちゃなんだが、金がない上に、ルックスもいまいち、更にデブ！

そして大学も二流ときてる上に、性格も明るい訳でもない。

そんな俺がナンパを決行したところで、どうなるかは火を見るより明らかだ。

だからと言って、大学で親しくしているような女はいないんだ。サークルにも入っていない。大学ではただ決められた講義を粛々と受けているだけだ。

高校時代からの友人、アニオタの川田ってケチな野郎と休憩時間、二人で寂しく男同士のひっそりした会話を交わしたり、昼飯を食べたりする程度だ。

女の『お』の字も俺達の周りに漂っていやしない。

困ったな……こう考えると俺がデートするような女を、イブまでにゲットできる確率は、限りなく0に近い。むう……

俺は勉強机に突っ伏して、何かいい方法が無いか頭を悩ます。足が自然と一定のリズムで、フローリングの床を叩いていた。顔を左に右にひねって唸りながら、煩悶として考えた末

やっぱ……バイトしかないな!? 女がいるバイトだ。しかも、すぐに入れるところだ。

今は年末だし、飲食店あたりはすぐにでも人が欲しいのではないだろうか?

女もいそうだし。よし決めたぞ、さっそく履歴書書いて、飲食店のバイトを雑誌で探すか。

近いところを探そう。

その日の夕方、俺は雑誌でつけたレストランのバイト先に電話した後、さっそく現地へと赴く事になった。

「じゃあ、明日から働いてもらおうかな……大丈夫?」

「ええ、大丈夫ですよ!」

「それじゃあ、これにサインしてちょうだいね」

「分かりました!」

ふ、ちよろいな。俺はバイトをしたことが無いんだけど、こういう事務的な応対はできる奴なんだ。だから、心象が悪くなるような素振りには決して見せない。

ちよび髭のオーナーも、俺の丁寧な受け答えと快活な滑舌に一発

OKをだした。

普段こんなに話す奴じゃないんだが、いざとなれば開き直れるんだよな。

性格偽証は何故か昔から得意だ。これでもうちよつと積極的で、明るい性格なら、デブとはいえ、彼女の一人二人はできるんだろっけどさ……

俺はオーナーに深々とお辞儀すると、店を出て行く。

その際、周りにいる未来の同僚に、愛想笑いと会釈をしながらも観察を怠らない。

うーん、学生っぽい女の子2人、ここが長そうな茶髪のフリーターっぽい女一人。

ほっそりとした茶髪の兄ちゃん一人、俺みたいなデブ男一人。

ホールはこんなもんか、洗い場の方は見えねえな。

まあ明日きた所で、自己紹介でもあるんだろっから、そのとき確かめるか。

バイト先の偵察も終えて、既に暗くなった住宅街を突き進み我が家へと向かっていた。

現在PM8時30分、普段ならもう飯食い終えて風呂入った後、ソファーにゆっくり腰掛けながらテレビを眺めている時間だ。

腹減ったなあ……母ちゃん、今日の晩飯何にしてるのかな。

俺は空腹のためか、体に力が入らず、よたよたと暗い夜道を歩いていた。

中空を目指し昇る月の光が、細い住宅街の道を後ろから照らしてくる。

前に長く伸びる俺の影は、心なしかスマートに見える。

そんな時、後ろから軽い足音ともに、長い影の先が俺の足元を掠め始めた。

最近は何騒な事件も多いし、この辺はそれほど人気があるわけじゃない。

俺は少し後ろを警戒しながら歩く。

軽い足音はどんどん近くに迫ってくる。

後ろから来る長い影も、俺の1m先のあたりまで……って！

なんだ……？ こいつ俺の真後ろ歩いてるじゃねえか、怖えよ！

俺は拳を固く握ると、肩をいからせながら後ろを振り向いた。

だが、そこには俺が見知ったアイツが立っていた。

「お、やつぱりこの熊のような背中中は昌ちゃんだったのか！」

「ん？ お、お前かよ。びびらんなよ！ 香織！」

「あはは、そんなでかい図体してびびってんの？」

「バカ、用心深いと言え……」

「まあ、良かった！ とりあえず、私護衛してよね！」

「はあ……まあ帰る道一緒だしな」

「やった！」

びびったけど、ほっとしたぜ。

この女は近所に住む前川香織。小中高と同じ学校に通った幼馴染だ。

ボーイッシュな短いサルミみたいな髪型をしている。

顔は母親が美人のせいもあって、それなりに美形に属しているとも思う。

「今バイトの帰りか？」

「うん」

香織は高校を出た後、どこかの事務として就職したんだが、長く続かなくて今フリーターをしている。何のバイトしているのかしらないが。

「昌ちゃん、珍しいじゃん、こんな遅く外出歩いてるなんて？」

「いや、ちよっとバイトの面接行ってきたんだよ……」

「ええ、昌ちゃんがバイト？ すっごい進歩じゃない？」

「まあな……」

香織は俺の右手に、しなやかな細い腕を巻きつけてくる。

馴れ馴れしい奴だ……まあ今に始った訳じゃないんだけど。

昔っから、軽いノリでこうやって手を絡めてくるんだ。

こいつの家は近所って言っても、俺の家より少し奥にあるために、ありがとね、この辺暗いから助かったわ」

結局俺は、自分の家を通り過ぎて、香織を家まで送る事になってしまう。

「おう、じゃまたな」

「うん、バイト頑張ってる」

「お、おう」

香織は俺に笑顔で手を振った後、家の中へと入っていった。

俺が自宅に帰ろうと、踵を返して歩き始めた直後、ただいまと香織の大きな声が、背中の後ろから微かに俺の耳にまで届いてくる。

甲高いよく通る声だよ……しかし……変わってないよな、あいつも……

俺はあの明るく朗らかな性格の香織が、昔から嫌いではなかった。未だにそれを維持している香織を見ると、なんだか微笑ましくさえ思う。

「ただいまー！」

俺はいつになく大きな明るい声で、自宅の玄関の扉を開け広げた。だが 部屋の中は真っ暗だった……

そっぴや、今日母ちゃん親父とデートしてくるとか言ってたっけな……

せっかく、香織に感化されて明るさを演じてみたものの、暗闇に閉ざされた部屋に一人入ると、なんだか火照った気持ちに急速に萎み始めていた。

小田原 昌彦の場合、その二

「申し訳ありません、事情が変わりまして今回は辞退させて頂きま
す」

俺は今日から行くはずだった、レストランのバイト先へ朝一に断
りの電話を入れた。

元々女を調達するただけに応募したバイトだったが、それをす
る必要がなくなったため、行く意味がなくなったから断ることにし
た。

話せば長くなるんだが、簡単に言うと、イブにデートする女性を
確保したからだ。

その女性とは、昨日帰りを共にした、近所に住む幼馴染の前川香
織だ。

詳しく話すと長いが、

昨日の夜

俺は家に入ると、一人寂しくキッチンでコンビニで買ってきた弁
当を食べていた。

390円のオムライスだ。

ほぼ無音のキッチンでオムライスを食べながら、王様の要求につ
いて一人考えていたんだ。

つまり、イブの日に女とデートをすればいいんだと。その女が：
：学生、フリーターのねーちゃん、お水のおねーさん、年下の高校
生、年齢80の御婆ちゃん：etcとまあ、俺の相手がどんな層の女
であろうと女であれば良い。

そして、イブに日にその女と一緒に街に出て、飯食べるなりして

適当に過ごせば、王様だって何にも文句のつけようがないはずだと。そう気づいた頃には、香織の携帯の番号を久し振りに打っていた。

ブルルブルル〜ガチャ！

『はい、前川です』

『俺だよ俺！』

『ああ、この番号誰かと思ったら、昌ちゃんか！』

『忘れてたのかよ！』

『ごめん！ 忘れてた！』

『ち！』

『それで……えーっとなんか用？』

『お前、イブの予定どう？ 空いてるか？』

俺がそう直に香織の予定を尋ねると、香織は少し間を空けた後、

『めっちゃめっちゃ忙しいよ！ 13時には光一とでしょ、18時には武……あーもう面倒くさ……』

『ん？』

『ふ……今年もフリーだよん……え〜ん！』

香織は泣き真似のような声をあげるが、全然フリーの身に悲観した様子は声から伝わってこない。寧ろ楽しそうでもある。

そして、それを聞いた俺にとっては好都合だった。

『なあ、イブさ、俺とデートしない？』

『え……！？ 昌ちゃんと！ アハハハ！ 冗談ばっか！』

なんか笑われてムカつときたけど、ここはミッション遂行のために抑えて会話を進める。

『冗談じゃねーよ！ 頼んでるんだ、ちょっとさ、恋人ごっこでもしないか？』

『ごっこ！？』

『うん、恋人いない同士で繁華街にでも何か食べに行こうぜ！』

『ええ、驕ってくれるの！？ 昌ちゃんが！』

く、そう来たか…… 1万しかないからなあ……

俺の流暢に話してたテンポがここで崩れる。

携帯を片手に貯金箱やらカバンに残っているお金を、探し始めたからだ。

ジャラジャラ……

『………なんかそのかんじだと、お金無さそうだよな！ アハハハ！』

凶星突かれてしまった……

『く、ばれたか…… 実はそうなんだよな、今苦しくつてさ……』

少しトーンを下げて、本当にお金が余り無いことを示唆する。

『私が驕ってあげようか！？』

うつ、これでは俺がたかつてるも同然だ。

惨めこの上ない…… 申し訳程度に、なけなしの1万円の話を加えておこう……

『ふざけるな、貧民とは言え、1万円はあるぞ！』

『へー一万円で私とデートしようって言っただ……？』

この言葉は堪えた。プライドごとなぎ倒された気分だ。

寒々とした空気が俺の周りで凝る。

俺は打ちのめされながらも、搾り出すように言葉を添える。

『まあ、ほら、ラーメンくらいは驕ってやれるぞ？』

『アハハ、ラーメンか、苦学生は大変だね！』

香織め、完全に俺を馬鹿にしてるな。まあそれでも仕方ないけど

……

俺はかき集めた金を、床に綺麗に並べてみるが、それでも…… 12912円しかなかった。

これじゃあなあ…… 俺は深い溜息をついた。

すると、その音が向こう側の香織にも届いたのか、

『まあ、そう落ち込むな、デートはしてあげるよ！』

『え、本当か!?』

『うん、ただし、条件つけていい?』

『お、おう、どんとこい!』

とはいったものの、少しびくびくしていた。

何を言われるか想像がつかない……

『昌ちゃんもさ、お金ない事だし、私のやってるバイトでもしてみない?』

『え!?』

俺は思わず言葉に詰まる。

これは考えてもいない展開だ。第一香織って何のバイトしてるかすら知らないし。

『えーと、お前何のバイトしてるんだ?』

『んー……二つ目の条件!』

『あん?』

『バイト先についてから話す!』

『なんでだよー!?』

『なんでも! じゃないと……デートしてあげないよ……?』

糞、俺の身に迫る危機を知らないとは言え……

俺はいつからか、香織の手のひらのエテ公状態だった。

拒否はできない……呑むしかなかった。

こんなに確実にイブに確保できる女は、香織しかいないからだ。

網走刑務所で3箇月拘留とか冗談じゃない!

それに比べたらこんな事!

『分かったよ、その条件でokだ……』

『まあそんなに心配しなくていいよ! 死ぬ事はたぶん無いから!』

『な、何怖い事言っただよ!』

『はいはい、じゃあ私バイト先に連絡入れとくねー! また明日』

!』

『明日かよ!』

ガチャ、ツーッ。

とまあ、こんな感じで、香織で手を打つ事に決まって、今から香織のバイト先に向かうんだけど、時間も聞いていないし　と途方に暮れていると、

ピンポーン！

もしや……！

俺は階段をドカドカ降りて、玄関のインターホーンを見た。

香織がいる。山にでも上るのかと思わせるようなリュックサックを担ぎ、動きやすそうな桃色のトレーニングウェアを着ている。

おいおい、どんな場所へ行こうって言うんだ……

小田原 昌彦の場合、その三

俺は香織に連れられ、バイト先へ向かっていた。

「まだかよ？」

「もうすぐよ、ほらあれよ！」

香織が指差す方へ視線を向けると、ピンクの円錐形の建物があるのが分かった。

その円錐の中央付近にでかい看板が、無造作に歪に貼り付けられている。

「何でも屋、死出乃旅団」

な、なんだ？ こ、このあからさまに危険そうな看板名は……？
もしかとは思うけど、勘違いかもしれないので香織に確認を取る。

「まさか、ここがバイト先？」

「そうよ！」

あっからかんと香織が答える。

じよ、「冗談は……」

「ほらー行くよー昌ちゃん！」

「え、ちよ、ま……」

俺は香織に半ば強引に腕を引張られ、建物の中へと入っていく。

「おはようございますー！」

「おはよう！ ピンク！」

中に入ってすぐに、髭の濃いスキンヘッドに黒いサングラス、
迷彩色のアーミースーツ上下着こんだ男が香織に言った。

このいかついオッサンは……一体……

それに、ピ、ピンクってなんすか？

「ピンク！ そいつが新人か？」

「はい！ 大尉！」

「そうか、ふむ……」

この無骨で軍にでも所属してそうな親父は、大尉と呼ばれている

らしい。

大尉はサングラス特有の圧迫感ある視線を、俺の脚の先から頭の先まで這わせて、観察するように眺めていた。

「タフそうだな……これならケムシの代わりにはなりそうだ」

け、毛虫？ 誰だよ……

俺が少し困惑した眼を香織に向けた。

それに気づいた香織は、俺の言わんとすることが分かったらしく、
「あ、ケムシさんはちよつと今病院で治療中なの、仕事中に怪我しちゃってね」

「え……？ 怪我！？ なぜ、どうして！？」

俺は怪我の原因がとてつもなく気になって、捲くし立てるように香織に問いかける。

そんな危険な仕事なのか……？

「確か……悪魔サキュバスと戦った時だけ？ 隊長！」

あ、悪魔ってなんだよ！？

「ああ……そうだったな……あれは死闘だったな……ケムシは頑張ったんだが、引き際を誤ってサキュバスの大鎌を足に受けたんだ。あれさえなければ今もピンピンしてるんだがな」

大尉の口から物騒な言葉が滔滔と流れ出る。

死闘ってなんだよ！ 戦でもしてたのか……？ 大鎌って……？

俺が言い知れぬ不安に眼を震わせていると、大尉が俺の顔を見つめ、口端に妖しい笑みを浮べた。

「まあ、ケムシはしばらく出てこれないが、ピンクがチームの要員を迅速に補充してくれた事は感謝する」

「いえいえ、彼暇こいてたので」

暇って……てか、こんな恐ろしげなところで、バイトなんかするくらいなら網走に向かうぜ！

と、恐怖に打ち負けて、衝動的に入り口から逃げようすると、
「どこ行くんた、待ちたまえ！」

大尉がそれに気づいたらしく、強い口調で俺を引き止めた。

「どこへ行くこうと言ったね？」

「怖いから帰ります……」

「君とはもう契約を済ましてある、それは契約違反だ！」

大尉は眉間に皺を寄せて怒鳴る。

「え？ まだ何にもサインしてないすけど？」

しかし、俺も身に覚えが無いので引けない。俺は紙面に何も書いた覚えは無いのだ。

「ピンクにバイトをする承諾をしたんだろ？」

「ええ、まあ……」

「ピンクはうちのチームの一員だ、その一員に承諾する事を述べた地点で契約完了だ！」

「ええ……そんなバカな！？ 法律違反じゃないすか？」

いや、この国の法律詳しく知らないけど、そんな滅茶苦茶な法律

……

「ポンポルーク王国に労働契約を縛る法はない！ あるのは個々で社内規定を自由に決める事ができるといったものだけだ、そして、うちの承諾の規定については、チームの一員と口約束でも契約にうんつと言った時点で承諾したものとなるんだよ。これを一方的に雇用された者が破れば罰金100万円だ」

が、あるそうで……

「そんな……」

俺は愕然としてその場に崩れ落ち、へなへなと尻を床についた。

「さてと、この話は終わりだ……お前のコードネームを決めないとな？」

「はあ……」

放心状態の俺はそれに呼応して、空虚な息を吐いた。

「えーっと、デブコンでいいな」

「へ？」

「だって、お前デブだし……」

大尉は悪ぶれも無く失礼な事をしゃあしゃあと俺に言った。

だが、その口ぶりはいたって平静で、本気でデブコンにするつもりらしい。

そのまんまじゃねーか……だが、この大尉の表情は至って真剣だ。駄目だ……大尉は意見を覆すような男では無い。顔見たら分かるんだ。

そういう部類の人種だ……

こうなったら……プライドかなぐり捨てて、お調子者でいくか……その方が角を無意味に立てなくて済みそうだし……

俺は表情を柔らかくして、180度テンションを変えて言った。

「大尉！ デブコン気に入りました！」

「ははは、そうかゝ気に入ったかゝ！ だってデブコンしか浮ばないしよあ、気に入らないと言ったら、しめちゃうところだったよ！」

「あはは……」

危なかった……間一髪。

「デブコンよろしく！」

「ははは……よろしく……」

俺が力なく差し出した左手を、大尉はがっしり握り締めた。

「アハハ！ デブコンよろしく！」

香織がニヤニヤ笑いながら握手を求めてくる。……貴様って奴あ。

俺は憤怒の表情で、香織とも熱い握手を交わした。

完全に香織に嵌められたぜ……

#

「うちのチームは君とあわせて5人だ、直に他の二人もやってくるだろう。取りあえずここの所長に合わせておこうか、デブコンを！」
「そうですね、うちの受け持つ仕事内容も把握していませんから、

説明詳しくしてやってください」

「よし、じゃデブコン、ついて来い！」

「はい……」

俺は大尉の後をゆっくり付いていく。

大尉の後からついていく間、室内の様子に目を配る。

来た当初はパニックって、室内を眺める余裕はなかったが……

変わった内部だな。といっても、シンプルな造りだ。

真ん中に白い長い柱みたいなものが、天井まで伸びている。

その周りを囲むように5つの丸い円形の金属の足場？　みたいなものがあって、その金属の表面には精密機械の電灯みたいなものが組み込まれている。

何だろうあれは……？

端にある階段を上りきると、ガラス張りの開閉式の扉が見える。

事務所かな？

明るい光が曇りガラスを通して漏れていた。

ガラ〜！

「ミスリル所長、新人連れてきました」

「あら、大きな子ね」

「えっと、今日からバイトのデブコンです」

所長……はつきり言ってイメージしてたのと全然違う……

大尉を見る限り、もっとゴツイ体をした体毛厚い男か、もしくは白い髭を蓄えた博士タイプの白髪の老人を予想していたんだが……

きめ細かい金髪を短く刈り込んだ、しいて言えば、香織の髪型に似ているな。

大人の女性の色香が眼元に漂う美女……唇に微笑みを浮かべて俺を見つめてくる。

「所長、デブコンはこのこと何も知らないんで、いろいろ説明お

願いしやす」

「そうなんだ〜じゃ、デブコン、ちょっとこっちきて」

「は、はい！」

なんか俺は緊張してしまっていた。

大人の色気というか、洗練された女性の雰囲気弱いなよな。

香織とはまるで違う異質な妖艶さを身に纏っている。

俺は所長のデスクの前の椅子に、腰掛けるよう促され座る。

差し向かいに所長はゆっくり座った。

香織と大尉は会釈をすると、部屋を出て行った。

「えーっと、何から話そうかな〜？ 何が聞きたい？」

所長はテーブルの上で両手を組んで、切れ長の瞳を俺に向けた。

薄い紫のシャドーが目の端を薄っすら染めているのが分かる。

俺は躊躇しながらも、聞いておくべき事が山ほどあるので、基本的な質問から入る。

「ここでの仕事は何ですか？」

「ん〜、看板にもあったと思うけど、何でも屋よ」

「何でも屋って事は、例えば？」

「そうね〜、顧客がもってくる様々な依頼案件を請負、遂行する…」

…ただそれだけの事よ」

「そうすると、危険な仕事とか……」

俺が最後まで質問を言い切ろうとした矢先、

所長の頭上の大きなモニターが点滅した。

「あ、仕事よ！ 聞くより、体で覚える方が早いわ！」

所長はそう言うのと、社内放送のマイクに顔を近づけ、

「チーム全員集まってちょうだい、仕事の説明するわ！」

きびきびした大きな声が、館内を所狭しと駆け巡る。

すると、入り口が大きな音と共に開いて、大尉を先頭にぞろぞろやってきた。

ひーふーみ〜、香織、俺、5人揃っている……

初対面の二人が混じっていた。

一人は眉毛の太い凜とした雰囲気青年。青い独特の体に密着したスーツを着込んでいる。体も引き締まっていて強そうだ。

もう一人は……桃色のぼさぼさとした長い髪を三つ編みで纏めた女の子。牛乳瓶の底みたいな度のきつそうなメガネをかけて、擦り切れたジーパンにジージャン、首から銀色の首飾りを下げていた。「まず、自己紹介すませといて！」

所長がチームを見渡して言った。

すると、大尉が簡単な自己紹介を始めた。

「今日入ったデブコンだ」

「やあ、デブコン、歓迎するよ、俺は早乙女正人だ」

青いスーツの青年がフレンドリーな笑みを浮かべて言った。

「よろしく……」

「私はミーシャ……よろしくね、デブコン」

「よろしく……」

こうして、迅速に自己紹介が終わると、所長が仕事の話始めた。

「えーっと、今日は……行方不明の猫を探しにいくわよ！」

「はい！」

はい、に紛れ込めなかった俺。

なんか重々しい雰囲気だったんで、どんな仕事言われるかと思えば……

拍子抜けしてしまっと思って思わず言葉が出なかった。

いや、倦怠感のようなものが、俺を包んで出す気になれなかったというか。

「じゃ各々一階のテレポーターに乗って、場所はサイヤンガル地方の田舎町ジンよ」

「……じゃー！」

入り口から続々と出て行く四人。

俺はぼーっとその後姿を見送っていると、

「あなたも行くのよ、デブコン」

所長に促され、やっと俺の体が動き出す。

入り口を出て階段を降りると、四人があのだん盤の上に既に乗っていて、俺を待っている様子だ。

「こら！ 遅いぞデブコン！ さっさとあそこに乗れ！」

「は、はい！」

俺は大尉に怒鳴られ慌てて、一つだけ空いているだん盤へと飛び乗る。

しばらくして

足元のだん盤から低い機械音が聞こえてくる。

微妙に振動が足裏に伝わっていた

次の瞬間 青い眩いまでの光が俺の体を包んだかと思うと、俺の体は異空間を空を飛ぶかのように漂っていた。

び、びっくりした……ここは……俺飛んでる……！？

俺は唐突な展開に、放心状態で異空間を漂っていた。

徐に左右を見渡してみる。周りにはチームのメンバーが浮遊していた。

青い光の筋が先の闇から、こちらに向かって流星の如く流れてくる。

そのうち、前の闇に白い点が唐突に現れ、その点が次第に大きなだんへと変わっていく。

その広がる勢いは激しく、最後に、視界の全てを白光が覆ったかと思うと

俺は、いや、俺達は、どこかの索漠とした荒野に立っていた。

まだ心臓が早鐘を打っている状態だ。

浮遊感があらゆる部位にまだ残っていた。

強烈な刺激を連続で受けたため、肩で息をし足は震えていた。

だが、俺とは対照的に、周りの連中は全く動揺もなく、落ち着いた様子で両の脚をのっしりつけて立っている。たぶん、慣れているんだろうな……

「よし着いたな、えーっと、あの村だ！」

大尉が遠めに見える村らしき建物の集まりを指差す。

「距離、529メートルですね」

と、ミーシャが望遠鏡のようなものを眺めて言った。

「腕がなりますね!」

早乙女が手をバキバキ言わせながら気合を入れている。

俺はその傍らで冷め切った眼で佇んでいた。

たかが、猫探しで……って思いが拭いきれない。

「昌ちゃん、気合入れないと死ぬよ……?」

俺の緩慢とした動きを見て、香織もとい、ピンクが戒めの言葉をかけてきた。

「ただの猫探しだろ……?」

俺がそう返すと、香織は今まで見せた事のない、きりつとした顔で俺を見つめて、

「ただの猫ならいいけどね……」

と、謎の言葉を残すと、先を歩く三人に追いついていく。

な、なんだよ……ただの猫ならって猫は猫だろ? と思いながら

も、なんだか背筋が寒い思いがして、急に人のぬくもりが恋しくな

り、四人の中へ俺は紛れに行った。

小田原 昌彦の場合、その三（後書き）

後から推敲多くなっています……

小田原 昌彦の場合、その四

街に着いた途端、早速猫探しが始った。

といっても、依頼主である飼い主は飼い猫ルンの体内に、マイクロチップを埋め込んでいるらしく、飼い主から預かった場所測定器を用いれば猫の居場所を容易に見つけれる。

ただし、大尉の話によると、そのルンは齢50を越えてから、猫化けを繰り返し、今では人間並みかそれ以上の知能を備え、妖術まで使える猫又へと変化しているとか。

とにかく、猫だろうが、猫化けだろうが、猫又だろうが、逃げた飼い主のペットを無事飼い主の元へ送り届ける事が、今回の任務だ。

俺達は街の路地でより固まって捕獲作戦を練っていた。

「いるわね……街の広場の辺りに反応があるわ」

ミーシャが手の平大のレーダーを凝視しながら言った。

「大尉、どうします？」

「そうだなあ……星は動いているか？」

「止まっていますね」

「ふーむ、相手の力量も分からないし、取りあえず、接近して様子見をするか」

大尉がそう言うのと、さっきまで気合をいれていた早乙女が、興奮冷め切らない様子で、

「なに言ってるんですか！ たかが猫じゃないですか、この網をもつて俺が突撃かけて一気に捕獲しますよ！」

香織は黙っている。大尉はうんと唸りながら顎鬚を摩っていた。この雰囲気ではペーペーの俺が物申すのも中々できる事じゃない……

長い沈黙が流れようとした時 大尉がおもむろに口を開いた。

「よし！ 俺達は離れた場所で待機して見てるから、早乙女思存

分やってみろ！」

「は、はい！ お任せください！」

早乙女の瞳の中に嬉々とした色が浮ぶ。

「噴水の前で寝ていますね！」

ミーシャが言った。場所と猫を完全に特定したらしい。

俺達は少し離れた場所の木陰からその姿を捕捉した。

黒猫か……不吉な……、黒猫つていやぁ不吉なものの代表格だな……

俺は何故かその姿を見つめていると、とても嫌な予感がした。

体毛がそり立つような悪寒にも似た寒気が背筋を走る。

「行きます！」

早乙女が先に大きな網がついた長い竹の柄を握り締め、勇猛果敢に猫へ向かって駆けて行く。何故か俺はその後姿に手を合わせていた……

「よし！ 猫又の実力拝見といこうか！」

大尉が欠伸をしながら、皆に言った。

それにこくと頷く香織と、ミーシャ。

どうやら、誰も早乙女が捕まえられるとは思ってもいないようだ。

哀れな早乙女……無事帰ってこれればいいのだが。

「おりゃー！」

早乙女が黒猫に向けて、網の口を振り落とした。

猫は早乙女の声に反応すると、機敏な動きで頭上から覆いかぶさってくる網を寸前で横へ飛んで避ける。俺はその様子を冷めた目で眺めていた。

静かに近付けよな……

「ち！」

早乙女が舌打ちをして、連続で網を猫へと放つ。

闇雲に振り回すも、猫は巧みに後ろへステップしてかわし続ける。それでも、早乙女が勢いをつけて、上から網をかぶせようとした時

黒猫はそれを避けた後、大きなジャンプをして、噴水の真ん中にある銅像の頭の上に飛び乗った。

とんでもない跳躍力だった。

髭を生やしたよく分からない銅像の上で、黒猫は毛繕いをしていく。

「あちゃー、完全に早乙女遊ばれてますね……」

ミーシャが大尉を見上げて言った。

大尉はその一連の様子を観察した後、身動き一つせず黙っていた。黒いサングラスの奥でどんな眼をして、何を考えているのか。

俺にはさっぱり見当がつかない。

それも当然かもしれない。

俺にとっちゃ、猫の実力もさることながら、ここのメンバー全員も付き合い浅い未知な人々である。

まあ、ピンクに関しては、多少は分かっちゃいるつもりだが、それでもここではどういうポジションなのかさっぱりだ。

だが、それを知る機会がすぐに訪れる。

大尉が不意に口を開いた。

「ピンク！ 手伝ってやれ！ デブコンもいけ！」

え、俺もですかい！ ミーシャから網を渡される。

だけど、香織は網をもっていない。

「いくよ！ 昌ちゃん！」

「お、おう！」

俺達は木陰から飛び出した。

先に香織が噴水へ向かって走り出した。

とんでもない速さだ、追いつけないよ！

だが、前を走っていた香織の姿が次の瞬間、大気に溶け込むように消えた。

「あ、あれ？ 香織どこいった!？」

俺が突然の出来事にあたふたして周りを見るが、香織の姿はどこにもない。

後ろを振り返って、大尉の方を見てみると、どこか上の方を指差している。

その方向に視線を向けると、香織はいた……

噴水の少し上の宙に留まっている……てか、浮いてるじゃん！

空中浮遊!? あいつ、超能力でも使えるのか!?

俺は香織の空中浮遊に眼を奪われ、その場でしばし立ち尽くしていた。

「デブコン、お前も手伝え!」

だが、俺を呼ぶ声にはっとして我に返ると、早乙女の近くに駆け寄る。

早乙女は噴水の下貯水地に足を踏み入れ、彫像の上に向けて網を空しく振っていた。

だが、いかんせん、長さが足りない。

俺は貯水地に足を踏み入れず、外からその様子を眺めていた。

無駄な気がしてならないからだ。早乙女一人で十分だ。

だが、上空の香織がそんな俺を厳しい目で睨んできた。

な、なんで睨むんだよ! どうせ網なんか届かないし……

と、思っていたが、不意に自分の役目に気づかされる。

そ、そうか、俺達は猫の注意を下に引き付ける、言わば捨て駒か。それを悟った俺は、早乙女の横で届かない網を、猫に向けて一緒に降り始める。

頼んだぞ……ピンク!

猫は俺達に気を取られて、上にいる香織には気づいていない様子。香織はゆっくり、手を伸ばしながら下降して猫に近付いてゆく。

ほぼ宙で逆立ちしている格好だ。

だが、虫の知らせか、はたまた、猫又の本能かは知らないが、不意に猫の気が俺達からそれで、突然、上を見上げたんだ。

それに気づいた香織は、落下速度を上げて、猫に両手で抱きつこうとした。

「ああ、糞！」

猫はそれをまた、すんでのところで交わし、噴水から少し離れた地面に飛び降りた。そして、猛ダッシュした！ 加速のついた猫の走りはとても俊敏で早い。

全速力で街の広場を疾走して、その黒い姿をあつという間に路地に滑り込ませていった。

#

「ふむ……まあ、最初はこんなもんだろ」

「そうですね、しかし、まだ本性を現してません」

「現すに及ばないって事が……」

俺達は昼飯時になると、街のレストランでしばし飯休憩を取る事になった。

大尉とミーシャがさっきの捕獲の際の事を、分析するかのようには話している。

不意にその二人の会話に早乙女が割り入る。

「ブルースーツの力使ったほうが良かったですね？ 大尉」

「いや、あの地点では使用しないほうが良いだろう、後の事を考えるとな……」

「ですよね……」

早乙女はそれを聞いてほっとした顔で、大尉からテーブルに視線を戻すと、スパゲティをフォークに絡めて口に運ぶ。

「なあ、ピンク！ お前いつから超能力使えるようになったんだよ

……」

俺はハンバーグを切る手を止めて、香織に聞いた。

ピンクでも香織でもどっちでも良いんだけど、ここでは敢て皮肉を込めてピンクと呼んだ。

香織はラーメンを食べていたが、その熱い汁を箸で俺の顔に飛ばしてくる。

「あ、あち！ な、なにしゃがるんδει！」

俺は咄嗟に切れて、江戸っ子口調に変わってしまった。

「ピンク言うな！ 昌ちゃん香織と呼ぶように……！」

少し怒ったような顔で俺を睨んでくる……

どうやら、香織もピンクのコードネームが気に入っていないらしい。

そのためか、俺に対してもデブコンとは言わなくなっている。

この時、暗黙の内に呼び名の協定が、俺達の間で結ばれた。

香織は少し間を空けた後、ラーメンを一つ啜って嚥下して俺に顔を向けた。

「あれはね、私の着ているピンクのジャージあるでしょ？」

「うん」

「これね、ミーシャさんが作ったものなんだけど、これを着ていると、移動に長けた超能力を使う事ができるの。つまり、テレポーテーション、空中浮遊、疾走、この3つの力を自由自在に使えるわけ」

「ええ、そんなもの作れるのか……？ ミーシャさん、なんかすげえな……」

「うん、噂に寄ると、どこかの超能力アイテム研究所の研究員として働いてたらしいわ」

「ふ……ん……」

狐につままれのような話でピンと来ないけど、超能力とかあるんだな……

しかも、着た者にその力を付与するジャージか……世の中には色々あるもんだ。

それにしても、それを作れるミーシャさんはやっぱり只者じゃないよな。

「うっ、きた……頭痛が……」

そんな和やかな会話をしていると、香織が不意に額を手で押さえ始めた。

苦痛を帯びた表情を浮かべている。

「どうしたよ？」

「ジャージの後遺症……というか、超能力を使った反動……」

香織が頭を抑えて顔を苦痛で歪めていると、大尉が席を立てて香織の傍らまでやってきた。

「ピンク、後遺症か、この薬飲め、直ぐに治まるぞ」

「あ、有難うございます……大尉、すみません」

「ごめんね、ピンク、私のアイテムが不完全なせいで……」

香織は大尉から手渡された錠剤を飲み干す。しばらくすると、その表情が早くも柔らでいた。水をもう一度飲んで、香織はふーっと深い息を吐くと、

「大丈夫ですよ、ミーシャさん。私若いし、もう大丈夫です！ほらこの通り！」

香織は快活な笑みを浮かべて立ち上がった。

右手を回しながら健全さをアピールしている。

効き目はええ……俺は何かのアニメを思い出してしまった。

香織は又椅子に座ると、ミーシャに穏やかな顔を向けて口を開く。
「それに、このジャージには何度も命助けてもらっています。今じや仕事には不可欠なものです。本当に、ミーシャさんには感謝しています」

「ふー……そう言ってもらえると少しは気が安らぐけど……でももう少し負担のないものを開発できるよう私も頑張りますね……」

「有難うございます！」

いやあ、なんか心温まる会話を聞かされたような、怖い現実を知らされたような、何とも複雑な思いが俺の中で交錯していた。

命を助けられたか……何度もか……アハーハハ！ 笑えねえよ……

……！

香織の奴なんちゅう危ないバイト続けてるんだよ……

小田原 昌彦の場合、その五

「かなり先行かれてますね」

「うむ、奴は足が速い、車借りて正解だったな……」

あの噴水の捕獲劇から5日経っていた。

黒猫ルンはさすがに猫又なだけあって、普通の猫とは違っていた。ルンは追われている事にあの一件で気づいたのだろうか。

それからの移動距離と速度が半端じゃなかった。

大尉は高速で移動し始めたルンに追いつくために、レンタカー屋で黒い車を借りた。

車で移動しないと、ルンに追いつけないと判断したようだ。

5日の間、ルンは全く止まらずに移動していた。

ミーシャさんがレーダーで確認した速度は時速60キロは出ているらしい。

その間、追いつかんがために、飲み食いはほぼ車上でおこなわれ、トイレ休憩さえも惜しんで車を走らせていた。ただ、さすがに女性二人がいるだけに、途中で銭湯を見つければ、かつきり20分だけ入浴をさせてもらえた。

運転は交代制だ。俺は大学に入ってすぐ免許をとっていたので、交代制のシフトに組み込まれていた。他に運転できるのは大尉と、早乙女だけだ。

「しかしよう、黒猫あんな必死こいて走ってどこ行こうってしてんだ？」

「知らないわよ！ 猫に聞いてよお……」

香織はうんざりしたような顔で言った。

車の後部座席で足を折りたたみ、その隙間に顔をうな垂れている。その様子から察するに、今回のような状況は異例のようだ。

思ってた以上に苦戦を強いられているんだろう。

現在、午前1時……俺がこれまで運転をしていたが、そろそろ早乙女と運転が変わる時間だ

……眠い……

車を道路の脇に止めて、助手席の早乙女を見やる。
疲れているのか、すやすやと気持ちよく寝ている。

俺は助手席の早乙女の肩を揺すった

起こすのも気が引けるんだが……俺も眠いんだ……

「早乙女さん、起きてー交代時間だよ！」

「うっせー、バカ親父……俺のXMASプレゼント質に入れやがって……」

俺が声をかけると、早乙女がそれに呼応して何やら呟いた。

早乙女の目尻には涙が光っている……

俺は寝言の内容に思わず、彼の家庭の事情をイメージして目頭が熱くなる。

だが、ここで情に絆されて、運転を肩代わりするつもりはなかった。

もう三度も早乙女が起きずに、ばっくれているんだ。

この人一旦寝ると、揺さぶろうが喚こうが起きないんだよ。

ふーあれをやるしかないな……4日目から使い出したあの技を……

俺は溜息をついてシートベルトを外すと、助手席の早乙女におもむろに背中を押し付ける。

巨体ならではの俺が編み出した秘技、『デスサンド』。

俺の大きな背中中の肉壁とドアに挟まれ苦しむがいい……

オラオラオラー

ギュウウー！！

「ウウ……」

早乙女の苦悶の声が後ろから聞こえてくる。

苦しいだろ……？ 起きないと潰れてしまっぜ早乙女さんよ。

「ク、プハーハ、ハアハア……」

タイヤから空気が漏れるような音が背後から漏れる。

圧迫によつて、あまりの息苦しさに早乙女が目覚めたようだ。

「ああ、分かったよ！ ごめん、変わるから……」

「早乙女さんのんますよ……」

俺は細い目を更に細めて早乙女を見下ろす。

月明かりを浴びて闇に浮ぶ俺の顔を見て、早乙女は顔を引きつらせていた。

深夜の寝起きに映った俺の顔は、早乙女の眼にどんな風に映ったんだろうな……ククク。

#

明くる日の薄暮の迫る頃、俺達はまた、黒猫ルンと再会することとなった。

ルンはさすがに走り続けて疲れたのか、とある空き地にある土管の上で寝ていた。

空き地の傍に車を静かに止めると、車の陰に隠れて作戦会議が開かれた。

「よし、ピンク、早乙女、お前等本気でやれ……」

本気……超能力全快でやれって事か……

「分かりました！ ブルースーツの力思い知らせてやりますよ……」
「頑張ります……」

その大尉の言葉を聞いて、早乙女が拳を勝ち合わせ気合をいれ

ながら言った。

長旅の鬱憤のせいか、眼は血走っていて、網を握り締める手がヤク常習犯のように震えていた。

香織はというと、もう疲労のピークなのか、目は虚ろで最初の頃とは別人のようだ。

「Go！」

大尉の一声を皮切りに、早乙女が雄たけびを上げて猫に突っ込んでいく。

心なしか体が一回り大きく見える。

早い……！ 空き地の砂を巻き上げながら、信じられない速さで、ルンに真直ぐに向かっていく。

早乙女は黒猫の手前で地を蹴り、大きなジャンプをしたかと思うと、落下しながらルンに右ストレート……え、殺す気か？

「オラア！」

早乙女の殺意の籠った声に、ルンは慌てて眼を覚ますと、土管から素早く飛び降りた。

的を失った早乙女だが、お構いなしにその渾身の右ストレートを土管に叩きつけた。

激しい衝撃音とともに、石でできた土管が粉々に打ち砕かれ、その石片が弾丸のような勢いであちこちに乱れ飛んだ。

避けたルンにも無数の石片が襲い掛かる。

だが、その刹那、ルンの周りの石片が突然時間が止まったように勢いを失い、宙でぴたりと固定される。

そして、ルンが欠伸をした直後、それらが地面にストンと垂直落下した。

なんだ、あれは……？

俺はその奇怪な現象を目にして、突っ立ったまま呆気に取られていた。

「超能力だな……そろそろ奴も尻尾を出し始めたか……」

大尉が神妙な口ぶりで言った。

ミーシャさんがそれにこくと黙って頷く。

ドゴーン！

俺が大尉に顔を向けてその言葉を聞いている間にも、激しい戦闘が繰り広げられていた。

「しねやあ！」

早乙女がルンに青スーツパワー全快で襲い掛かっていた。

もう網をその手に握っていない。

捉えられないストレスが重なってか、本来の目的を忘れて、超能力を加味した豪腕をいかになくルンに振るっている。

それを巧みな動きで交わし続けるルン。

外れたパンチが地面に当たると、爆裂音とともに砂埃を巻き上げる。

ピンクは上空に漂いながら、暴走した早乙女の攻撃に巻き込まれるのを嫌って傍観しているみたいだ。

「3、2、1……」

そんな時、不意に傍にいたミーシャさんがカウントダウンを始めた。

0をミーシャさんが言い終えたと同時に

パタ……

あれほど暴れ回っていた早乙女が、電池がきれたみたいにその場に唐突に倒れた。

それを見た香織がふわっと上空から降りてきて、早乙女の後頭部を指で突付いた。

反応がないのを確認すると、ミーシャさんに手で×マークを作り何かを知らせた。

「さ、早乙女さんどうしたんすか……？」

俺はその一連の流れが理解できず、ミーシャさんに尋ねた。

「早乙女君が超能力を使って動ける時間は15秒なの……」

「ええ……」

「デブコン、早乙女をここへ引きずって来い……」

「お、俺がすか？」

俺はルンと早乙女の戦いを眺めているうちに、ルンに恐怖を感じ始めていた。

「ほら、行って来い！」

逡巡して中々いかない俺に、大尉が威圧感たっぷりのサングラス視線を向けて怒鳴った。

「は、はい！」

嫌々ながらも空き地に足を向けた時、幸運にも香織が黒猫を追っている最中だった。

ナイス……香織！ 思わず拳を軽く握る。

俺はルンが香織とじゃれあっている間に、早乙女の所までで頭を抱えながら駆け寄る。

そして、彼を素早く担いで、逃げるように空き地を出た。

「デブコン！ よくやった！」

帰ってくると、大尉が珍しく褒めてくれた。

普段厳しいんだけど、こういう人にたまに笑顔で褒められると妙に照れてしまう。

力尽きぐったりした早乙女を、車の椅子に寝かせた後、空き地の様子にまた目を配る。

映像を5倍速で早送りしたような速度で、香織がルンを追い掛け回していた。

だが、そのスピードにも全く臆した様子なく、余裕で香の放つ高速の網を交わし続ける。

そして 香織も力尽きた……頭を抑えながら地面で苦しみもが

いている……

うわ、めっちゃ頭痛そう……香織……！

俺は思わず香織に駆け寄っていた。

「香織、大丈夫か！？」

「うう、大丈夫……でもない……」

俺は香織の後頭部に優しく手を回して頭を摩ってやる。

苦しそうだ……く、こんなバイトやめちまえよ……

苦痛に顔を歪める香織を眺めていると、行き場のない怒りが込み上げてくる。

だが、そのうちその怒りの矛先が大尉に向かう。

なんで、大尉はいつも見てるだけなんだ！？

そんな思いが急速に膨らんでいく。

俺は大尉に憎悪にた気持ちを抱き、強く睨みつけていた。

小田原 昌彦の場合終了。

今晚はチーム全員の回復を図るため、田舎の民宿に泊まる事ことになった。

「香織……」

俺は布団に横たわる香織を哀れに思いながら、何故か釈然としな
いものが胸裏にわだかまっていた。

何で体を痛めてまで、こんなバイトを続けるのか理解できない。
長く続けてきたバイトだからか……？ 絆とか信頼とかに縛られ
ているのか？

分からねえ……大尉みたいな命令だけして自らは何もしない男の
下で、そんな気持ちが生まれるものだろうか……

隣で全身筋肉痛で苦痛に顔を歪めてる早乙女だってそうだ。

いや、この人は違うのかもな、血の気が多いからこの仕事に適性
があるのかも……

俺はすくつと立ち上がると、窓に近付き外の景色を眺めようとし
た。

だが、あいにく、窓は水蒸気がびっしりついて曇っているため何
も見えない。

この部屋はエアコンの暖房が、行き届いていて暖かいせいだろう。
何も見えない窓の傍で、ぼーっと佇んでいると、ミーシャさんが
隣に不意に現れる。

民宿の寝着に着替えて、上から青いドテラを羽織っている。

「どうしたの？ デブコン」

「いや、別に……」

「疲れたのね……無理もないわ……」

ミーシャさんは宿の温泉に入ってきたためか、ぼさぼさとした
長い髪を結うことをせずに、そのまま自然に流していた。

傍にいと、石鹸の香と女性特有の柔らかい匂いが鼻孔に穏やかに届く。

彼女は眼鏡が曇ったのか、不意にそれを顔から外し、布で拭いはじめた　が……

その眼がねを外したミーシャさんの素顔をみて驚いた……

とつても……美人、　いや美少女！？

俺は無意識のうちに彼女の顔を、食い入るように見つめていた。その暑苦しい視線に気づいたのか、彼女がこちらにきよとんとした眼を向けた。

「ん？　なんかついてる？」

「いえいえいえ……　ただちょっと驚いたもんで……」

ミーシャさんの問いかけに我に変えると、手を振って取り繕いながらも本音を添える。

「へ？　何に？」

「いや、あの、なんていうか、その、ミーシャさんの素顔がその……」

「変だった……？」

彼女は俺の言葉を聞いて、恥ずかしくなったのか眼鏡をそそくさと掛けなおす。

「変とかとんでもない……　こんな美人だと思わなくてつい……」

俺が本心から来る言葉を成行きで漏らすと、返事が返ってこない。照れ臭くって下げていた視界に、彼女のもじもじ丸めた手が映った。

「あはは……　ちょっとびっくりしちゃった、そんな事言われたことなくて……」

視線を彼女の顎下辺りに上げると、少しの間の後、照れ臭そうに微笑んだ。

頬が心なしか赤みを増していた。

#

大尉は部屋にいなかった。

香織と早乙女もまだ眠ったままだ。

俺は思い切ってミーシャさんに大尉の事を尋ねてみる。

「ミーシャさん……俺あんまりここ長くないから……わかんないですけど」

「ん？」

「俺達はチームですよ、仲間ですよ。」

「そうよ」

「なら……」

俺は一呼吸おいた後、

「なら、なんで、仲間が苦痛で地面に触れ伏しているときでさえ、大尉は命令だけして加勢をしてくれないんでしょうか？ あんなに強そうなのに……」

俺は真剣な眼差しで窓をみつめながら、わだかまる思いを矢継ぎ早にミーシャさんに語った。少しの沈黙の間の後、穏やかな声色が耳に届く。

「デブコン……大尉はね、あんな風体だから、誤解されがちだけど……常に仲間の事を思っている方よ……」

「ならなぜ！」

俺は少し語気を荒げた。

だがその荒ぶった声を宥めるように、ミーシャさんは静かな口調で言葉を重ねる。

「大尉はね、あのルンの実力を計っている最中なんだと思うの……猫又は恐ろしい化け物よ……今まで何人かのハンターが殺されたって聞いているわ……」

「え……！？」

俺は思わず驚嘆の声を漏らした。

あの小さな黒猫ルンが……その見かけとミーシャさんの語る事実とのギャップに、戸惑いを隠せない。

「まだ、ルンは本気を出していない。言わば……私たちは遊ばれている状態よ。それは言葉を変えれば、まだルンが怒りを顕にしている……ないって事で、つまりまだ大尉は安心してみていられるの………大尉は……」

ミーシャさんが言葉を続けようとした時

「ミーシャ……そこまで……」

と、不意に近くで声がしたので、驚いて振り向くと大尉が後ろに立っていた。

全く気配すら感じさせず、後ろを取られていた。

「大尉……」

ミーシャさんが目を伏せ気味に、大尉に向き直る。

罰が悪そうに鼻を擦る俺の肩を、大尉がこつい手で掴んだ。

「デブコン……時が来れば分かる……」

それだけ言い残すと、背中を向けて部屋をゆっくり出て行った。

#

それから又一日一日と過ぎていく間に、黒猫ルンと何度か出会い対峙した。

猫又ルンは出会ったたびにその実力の一部をさらけ出していく。

「強い……」

ミーシャさんの言っていたことは本当だった。

もう、早乙女の攻撃が全く通じない。眠ったまま、早乙女の豪腕を受けている。

そして、欠伸をしながらの突然の猫キック……いや、後ろ蹴り。その蹴りを受けて、空彼方に吹き飛んでいく早乙女。

これほどとは……

「もう少しだな……」

大尉がルンを観察するかのようには眺めている。

そして、イブ当日、夕焼けが空を紫色に染める頃

黒猫ルンはついに本性を現した。

というよりは……俺達の前で二足で立ったのだ。

猫の分際で、後ろ手を組んで人間のように笑みをその顔に浮かべている。

「ま……ったく、君達はひつこいね……」

その人間の青年のような澄んだ声が、対峙する俺達の耳に届く。

俺はその異様な状況に、黒猫の体からかんじる威圧感のようなものに、自然と体を強張らせる。周りのメンバーも何かを察知しているようだ。扇状に自然と陣形を取っている。

「僕はね、あそこに見える屋敷のタマ嬢と今夜デートの約束をしているんだよ」

ルンが指差した方を一斉に見るチーム。

そこには確かに大きな屋敷があった。

「まあ、ということ、今日は楽しいデートなんだ、ちょっと僕はタマ嬢を迎えにいつてくるよ」

ルンは前足を地に下ろすと、足取り軽い感じで門の中へ潜り込んで行った。

「大尉……ふざけた奴ですね、アイツ」

「ふむ……まあ、猫にもイブは特別なんだろうよ……」

早乙女が疲れたような顔で言った。それにウィットに富んだ言葉を返す大尉。

最初の血気盛んな勢いは、早乙女から当になくなっていった。

ここへ来るまでに散々ルンに打ち負かされ、自信を打ち砕かれてきたからだ。

香織は屋敷の外の平原にある岩に腰掛けて俯いていた。
うーん、俺は何かが頭の端にひっかかっていた。

今日はイブ……香織……あ!?

だが、すぐに思い出すと、香織に素早く詰め寄る。

「おい、香織！ 今日お前俺とデートの約束だろ!？」

「ん〜？ 今それどころじゃないじゃない……仕事だって終わってないし」

「バカ！ 約束は約束だ〜！ 今からデート行くぞ〜!」

「無理よ〜、ここは郊外にある辺鄙な場所よ、しかも、大尉が許さないわ」

この件で退くわけには行かなかった。

網走の監獄のイメージが走馬灯のように頭を駆け巡っているからだ。

「お、お前それは……」

俺が更に捲くし立てようとした瞬間

ルンが帰って来た……

二足歩行で俺達と向き合って体を震わせている。

な、何があつたんだ……？

「フッフ……俺って何なんなのかな〜……ハハハ」

魂が抜けたような空虚な笑い声が、静かな平原に響き渡る。

俺はその様子を固唾を呑んで眺めていた。

「忘れてたつてさ……そんな約束しらないつてさ……」

黒猫は俺達の頭上にある満月を仰いで、泣いている様にも見える。

「でも女なんて沢山いるから……うんうん……」

黒猫は低い声で誰に話かけるわけでもなく一人呟いていた。

「もういいんだ……」

そう呟いた後、俺達の方へ紫光を放つ瞳を向けてきた。

怖気が走るような殺気と狂気が、入り混じった眼をしている。

「だから！ お前たちの中の女一人浚って行く事に決めたんだ！…
…慰めてもらうんだ！！！」

ルンが狂気を孕んだ表情で強く言い切った直後、体が大きく膨れ
上がっていく。

その膨張に呼応するかのように、大気が震えていた……

「お前たち、後ろに退くんだ！」

大尉がその異様さに咄嗟に大声で叫んだ。

その声に反応して、一斉にその場を離れようとしたメンバー。

しかし 香織がルンの伸ばした大きな舌に、絡み取られ引きず
られていく。

「香織！」

香織は大きな影の手前で立った状態で、俯き加減で眼を閉じてい
た。

ショックで意識を失ったらしい。

よく見ると、その傍らには異形の姿と化したルンが二足で佇んで
いる。

3メートルはあろうかという巨体、大きく割れた口、鋭い牙……

そして、鋭い爪が手から長く伸びて内に反っていた。

「ピンク……！」

早乙女が飛び込んでいった。俺も地面に落ちていた棒つきれを掴
んで、その後に続いた。

俺達が接近すると、ルンが手を一度横へ払う。

すると、凄まじい突風が吹き付けてきて、俺達の体が瞬時に宙を
舞った。

俺は後ろに激しく吹き飛ばされた。

だが、俺の大きな背中中に何かがつつかえ、地面への激突を免れる。

「デブコン！ 大丈夫！？」

リーシャさんだった……片手で俺を支えているようだ。

なんて怪力だ……まさか超能力！？

俺はゆっくり地面に立たされた。

「あなたは無理よ、スーツきていないんだから……」

「でも、香織が……」

「大丈夫！ 私がなんとかするから！」

リーシャさんは俺に凜々しい顔でそう告げると、白いコートを脱ぎ捨てた。

俺はその姿を見て言葉を失った。

桃色のジャージ、その下に見え隠れする青いスーツ、白っぽい手袋、そして、手には日本刀！？ この品々はまさか……

「これは、ピンクのジャージと、早乙女のブルースーツよ、そして、この白手袋はその二つのスーツのパワーを最大限にまで高める究極のアイテム……そして、この全ての悪を切りさく日本刀……」

リーシャさんは刀を一振りすると、眼鏡をはずした。

「こんなもんは不要よ、眼も超能力で活性しているから、何でも見える！」

端正な顔立ちが自信に溢れている。

その横でまだ身動きせず、黙ったまま突っ立っている大尉。

こら大尉、女に行かせるつもりか？

俺は大尉に蹴りが入れたかった。

この後に及んでまだ見てるだけか！

そう心で罵倒しながら、怪訝な眼を大尉に向けていると、

「デブコン、いいの。大尉には大尉の役割があるの……」

「馬鹿な……」

ミーシャさんは大尉のことで不満たらたらの俺に、眼を瞑って首を横に振った。

「くっ……！」

俺は顔を背けて、化け物となったルンを見据える。

そうだ……大尉が動かないなら俺がやるしかない……

ミーシャさんを先に行かせるなんてできない！

近くに落ちていた大きな岩を引っつかむと、ミーシャさんを置いてルンをどつきにいった。

「てめーは俺が倒す！死ねや〜！」

だが、威勢の良い決め台詞を吐いて、突っ込んでいったのもつかの間……

俺の肩に鋭い痛みが走る。

その痛み思わず、苦悶の声を漏らす。

何かが突き刺さっていた。

よく見ると、ルンの爪の一つが長く伸びて、俺の肩を貫いていた。

「デブコン〜！」

ミーシャさんの悲痛な声が届く。

「ぐふ……」

ルンが爪を引き抜くと、俺の肩から湿ったものがどつと流れ出る。血か……

俺は仰向けに背中から、糸が切れた人形のように倒れこんだ。

その俺の姿を見てか、ミーシャさんが駆けつけてきて、俺の傍で蹲り心配そうな顔で見下ろしている。

「だから言ったのに……無茶しないでよ……」

ミーシャさんの頬を大粒の涙が流れていく。

柔らかい手が額に当てられ……頬をなでる手の温もりが俺の痛みを幾分癒してくれる。

だが、ミーシャさんの表情が変わっていく。

憤怒の表情で眉を吊りあげらせ、鼻にまで皺を寄せている。

始めてみせる怒りに打ち震えたミーシャさんの素の顔。

彼女の膝枕に頭を置いている俺は、その表情を直視しながら眼を白黒させていた。

そのうち、ミーシャさんは不意に立ち上がって、大尉を見ると、

「大尉、後を頼みました……」

「……デブコンの治療は任せろ……」

「有難うございます！」

俺の体が大尉のごつい腕に抱きかかえられる。

堅い……ごつい手の中で男臭さに鼻が曲がりそうだ。

「こら、化け猫！　よく私のデブコンをやってくれたわね！」
わ、私のデブコン……！？

俺は大尉に肩に包帯を巻かれながら、ルンと向き合うミーシャさんの言葉を確かに聞いた。

ミーシャさん、な、なにを……

私の？　そんな、ま、まさか……俺の事……ミーシャさんが！？
平原で横たわりながら、俺は明らかに動揺していた。

「ん？　そっちの姉ちゃんも美人だな……」

「ふ、そんなふざけた事いつてられるのもこれまでよ！」

ミーシャさんが自信たつぷりに言い放った後、ミーシャさんの体の周りに正体不明の突風が吹き荒れ始めた。

「いくぞー！」

ミーシャさんが日本刀を振り上げ、前へ一歩踏み出した。

その後

羽が折れた鳥のように静かに膝を地につき、眼を閉じて前にふわ
っと倒れこんだ……

一瞬の出来事だった……が、俺は驚かなかった。

たぶん、こうなるだろうと予想をしていたから……

そりゃ……ミーシャさんみたいな華奢な女性が、あんなに一気に
超能力解放したら……ね……

#

早乙女、ミーシャさん気絶しているし、香織はルンに拉致られて
いる。

そして、俺は地面に寝かされたまま動けない。

最悪の状況だ……

ルンは嫌がる香織を抱きかかえながら、ペロペロ香織の頬を舐めていた。

そのルンの前にやっと……ようやく……今更……

大尉

が立ちはだかった。

おせーんだよ！ と心で呟く俺。

「時は満ちたり……」

「なんだ、お前は？」

「俺がお前を倒す……」

「なんだと……！？」

大尉が低い声で言う、ルンの表情が変わった。

明らかに今までとは違う。

大尉に何か感じるものがあつたのか、脇に抱える香織を横の草むらへ放り投げた。

次の瞬間 大尉が猛然とルンに向かってダッシュした。

それほど素早いわけじゃない。超能力を使った早乙女の方が断然早い。

だが、その後が違った……ルンの前で立ち止まって、腕を組んで仁王立ちしている。

「おら、打ち込んで来い、お前の攻撃なんてきかねーんだよ！」

「ふざけるなー！」

ルンの強烈な猫パンチが、大尉の肉体を絶え間なく打ち付ける。

その攻撃をだまって受ける大尉。

何で避けもせず、受けているんだ……？

「お前の攻撃はそんなもんかー！」

大尉が何事もなかったようにルンを煽る。

その煽りに憤怒したのか、更に足まで使って大尉をけり始める。大尉の背中が前からの衝撃を受けるたび揺らぐ。

いわゆる、サンドバッグ状態だ……

痛みを感じないのか……！？

「ハハハ、オラオラーもつとこい！」

大尉は哄笑しながら、まだまだ煽っている。

しかし、あれだけ物凄い攻撃を受けてまだ元気そうだ。

絶対おかしい……どうなってるんだ、もしか、サイボーグとか言うオチか？

「こいつ……なんでこんなにタフなんだ!!」

ルンは疲れてきたのか、明らかに大尉を攻撃するテンポが鈍ってきている。

ついに、肩で息をしながら、大尉を殴る手を休めるルン。

疲労のピークのようなのだ。

そのルンの様子を見て取り、大尉が3歩ほど後ろに下がる。

「さて……次は俺の番だな……全て返してやるぜ、俺が受けた苦痛の全てをな!!」

そう大尉が言い放つと、前傾姿勢で肩を突き出し構える。

次の瞬間、大尉の体が炎に包まれると、

「リベンジ・ファイヤー・タックル!!」

大声で横文字を並び立てた後、ルンに肩から体当たりに行った。

その炎を纏った強烈な体当たりをその身に受けたルン。

後ろに吹き飛ぶ様子もないが、反撃を繰り出す様子もない。

ズシン……

だが、大尉が後ろにステップすると、支えを失ったように前に倒れた。

終わったのか……？

俺はよろめく足でなんとか立ち上がって、肩を抑えながら大尉に元へ歩み寄る。

「大尉……」

「デブコンか……これ見てみる」

大尉が蹲って何かを指差した。

見ると、黒猫ルンが元の姿に戻って、地に伏せているのが分かる。

「死んでるんすか？」

「気絶してるだけだ……」

俺は深い息を吐いた後、大尉の隣に尻を落とした。

「大尉、今の技どうやったんですか？」

「む、詳しく話すと長くなるが聞くか？」

「はい、ぜひ！」

俺がそう告げると、少し間を空けた後、大尉が語り始めた。

「俺の着ている迷彩服はな、ミーシャが作ったもので、最後にルンに使った技が封印されているんだ。ただ 使いどころが難しくつてな、相手の強烈な攻撃を服にある程度吸収させないと、あの技は使えない。だから、俺はアイツが本気で攻撃してくる状況を待っていたんだ」

「そっだったんですか……」

俺はずっと抱いていた疑問が、大尉の話を聞くことで払拭された。同時に、大尉に不信を抱いて、罵倒を心の中で浴びせていた事を悔いた。

「よく頑張ったな、デブコン。お前はよくやった……」

「大尉……」

そんな俺に微笑んで褒めてくれる大尉に、感きわまって抱きついてしまった。

「ハハハ、大袈裟な奴だ」

#

メンバーのみんなは心身ともにボロボロだったが、大尉がルンを倒したと教えると、一様に喜びを各々の仕草で現した。

早乙女はガッツポーズをとった後、腰がぐきつと変な音を立ててその場に倒れこんだ。

だが、その顔は痛みを堪えながらも笑っていた。

ミーシャさんは……大尉のことを信じきっているのか、軽く微笑むだけ。

香織もやっといつもの朗らかな笑み浮かべて飛び跳ねていた。

それから暫く、俺達は平原の岩場で腰を下ろして、満天の星空を眺めていた。

そうだ、今日はイブだった……不意にその事をまた思い出した。俺は香織の前を……素通りすると、ミーシャさんの横に座った。

「どうしたの？ デブコン」

「いや、星空が綺麗なんで、ミーシャさんと一緒に見ようと思っ
て」

「な、何いってんの……」

ミーシャさんは恥ずかしそうに口ごもった。

ふと香織を見ると、大尉と二人で楽しそうに話している。

そういう事か……俺は二人の様子をみて悟った。

香織があれだけ頑張れるのは……ふむ、何も言うまい……

俺には……

「ミーシャさん！」

「はい？」

「ヒューヒュー！」

俺が顔を赤くして重大な事を述べようとすると、早乙女が横から茶化してくる。

この野郎……ふ……俺はそれを軽く受け流して微笑みを浮かべて、
「少しこの辺散歩しませんか……？」

俺がそう言っただけで差し出した手を、ミーシャさんは戸惑いながらもそつと掴みかえしたきた。

お互い恥ずかしそうに微笑ながら、星空の下平原をそぞろ歩く。

こうして俺のイブのデートは……始った……

E
N
D

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6943e/>

俺は王様

2010年11月22日20時51分発行